鳥羽 徹 | ファルまろ
売国しようそうだ
天才王子の
赤字国家
再生術
2
書店様向け試読版
※制作途中段階のものです。

◆第一章◆

ヴーノ大陸。
巨人の背骨（せぼね）と呼ばれる大山脈によって東西に分断されたその大地には、大小様々な国家が乱立している。
その中に、大山脈の谷間を削るようにして開拓された北端の小国があった。
国の名を、ナトラ王国と呼ぶ。

◆◇◆

秋の気配が忍び寄る時期というのは、多くのナトラ王国民を憂鬱（ゆううつ）な気持ちにさせる。

短かった夏が終わり、もうじき長い冬が訪れることを、冷気を含んだ親切な風が教えてくれるからだ。その風を浴びた王国民は、身震いと舌打ちを一つして冬の備えを始めるのが通例である。

しかし今年の秋は違った。

夏の日差（ひざ）しが弱まり、秋口が顔を覗（のぞ）かせてきたにも拘（かか）わらず、民の顔は明るく活気に溢（あふ）れ、ナトラ王国全土に熱気が残っているのだ。

理由は夏の手前に勃発（ぼっぱつ）した、隣国マーデンの侵

攻で始まった戦争である。

ナトラ王が病床にある中、代わりに指揮を執(と)ったのは王太子であるウェイン・サレマ・アルバレスト。

彼は見事マーデン軍を撃退し、それどころかマーデンに逆侵攻をして金鉱山を奪取した。

取り返さんとマーデンは三万もの大軍を興すが、ウェインは数千の兵士で見事鉱山を守り切ったのである。

このナトラ王国の歴史に残る快挙に、王国民は大いに喝采(かっさい)し王太子を讃(たた)えた。

その戦勝の熱が今もなお冷めやらず、人々に寒

さを忘れさせているのである。
それはここ、王都コーデベルでも同じであった。
「いやさすがは王太子殿下だ」
「王が倒れられたと聞いて、一時はどうなることかと思っていたが……」
「殿下はお優しく、そしてお強い。殿下がいればこの国も安心だな」
特別耳をそばだてることもなく、このような会話がそこかしこから届く。それだけ先の戦争が人々の心に印象深かったということなのだが――――
（民の浮かれ気分はまだ続きそうね……）
麻袋を持ち、大通りを歩きながらそんなことを

思うのは一人の少女だ。

透き通るような白い髪と、燃えるような赤い瞳（ひとみ）。まるで人形めいた容姿（ようし）だが、しかし彼女は本物の人間だ。

彼女の名をニニム・ラーレイ。何を隠そう、国中の人々が話題にしている王太子ウェインの補佐官である。

（あくまで隣国（うちく）との戦争に一度勝っただけのこと。それでナトラの国力が倍化したわけでもないし、諸外国の脅威（きょうい）が消えたわけでもないのだけど）

ニニムの思考を悲観的とは言うまい。彼女とて戦勝は喜ばしいことだと思うし、その結果主君で

あるウェインが民衆から尊敬されるのも嬉(うれ)しい。だが国政に携わる者として、過ぎた成功よりも未来の危険を憂慮(ゆうりょ)するのは当然のことだ。

（それにウェインの評価の偏(かたよ)りも気になるところね）

ウェインの人となりについては様々な形で民衆に伝わっているが、多くに共通するものとして仁君(じんくん)としての側面がある。

やれ全(すべ)ての兵士の名を覚え、一人一人励ましただの。やれ虐(しい)げられてきた鉱山の民を手ずから解放しただの。虚実(きょじつ)織り交ぜられてはいるものの、ともあれウェインは心優しいというのが民の評価

だ。

それが悪いわけではない。わけではないのだが――時として評価の偏りは弊害を生みだすことになるのを、ニニムは知っている。

（その辺り、ウェインはどう思っているのかしら）

この後で聞いてみよう。

ニニムはそう心に決めて、足取りを速めた。

彼女が向かう先には王宮が見える。

そこで王太子であるウェインは、ニニムの到着を待っているはずだ。

◆◇◆

ナトラ王国の王宮であるウィラーオン宮殿は、初代国王であるサレマ王が指揮して建設された由緒（ゆいしょ）正しい建物だ。

が、なにせ二百年近く前の建物である。度重なる改修工事で最低限の外観と機能性は保たれているものの、そろそろ新たに建て直してもいいのでは――――という話は数十年前から何かにつけて議題に上がっている。

しかし今のところ実行に移される様子はない。それは由緒の正しさや、使う側の愛着というよりも、予算の都合という身もふたもない理由であった。

そんな歴史あるオンボロ宮殿の回廊を、何人もの官吏（かんり）を引き連れながら、一人の少年が歩いている。

彼こそがウェイン・サレマ・アルバレスト。ナトラ王国を建国した初代国王の名を字に与えられ、その初代の再来とまで囁（ささや）かれる人物だった。

「殿下、以前より行われていたトリト河の流路工事が無事に完成しました」

「本流と分流の水量はどうだ？」

「こちらが計測した数値になりますが、どちらも想定の範疇（はんちゅう）に収まっております。計画通り、本流が氾濫（はんらん）する可能性は大きく減ったかと」

「楽観はするな。森羅万象（しんらばんしょう）を御（ぎょ）せると勘違いする

と大抵は痛い目をみることになる。引き続き監視をさせておけ」

「はっ、そのように」

官吏の一人が頭を下げて一歩後ろに下がると、代わって別の官吏がウェインに言葉を投げた。

「そのトリト河に関してですが、分流した河を巡って現地の部族が揉めていると報告が」

「流域の扱いについては派遣した代官に一任したはずだが、収められそうにないか？」

「恐れながら、言葉と権威だけでは御しがたいとのことです」

「仕方ないな。ラークルムに兵を率いて黙らせて

こいと伝えろ。ただし流血は極力避けろ。それと現地の情報を吸い上げて詳細な報告書を提出するように」

「ははっ！」

ウェインの指示に淀(よど)みはなく的確だ。威厳(いげん)と寛容を併せ持ちながら国政をこなすその姿は、心ある官吏にとって理想的な王太子であり、真(まこと)に仕(つか)え甲斐(がい)のある人物だろう。

「殿下、カバリヌとの国境を守るハガル将軍から報告書が届いております。いくつか承認を頂きたい事案があるそうです」

「目を通して返事を書いておく。それとカバリ

ヌとマーデン軍残党のいさかいはまだ続いている
な？」
「はい。王族の生き残りを旗印に根強く反抗している模様です」
「状況がどう転ぶか解らん。外交用に両陣営と繋(つな)ぎを作っておけ。密偵の数を増やして監視を強めるのも忘れるな」
「御意(ぎょい)。すぐに手配いたします」
そうして家臣達とやり取りしていると、回廊の先に執務室の扉が見えてくる。ウェインの目的地だ。
「殿下、遅れましたが先の戦争の決算と、それに伴って再編成された各部署の予算額が出ましたの

で、こちらを」

受け取った書類をウェインは数秒見つめる。

「数字に間違いはないか？」

「ございません」

「……よく解った。俺(おれ)は執務室で報告書に目を通している。何かあれば来い」

ウェインの言葉に官吏達は足を止め一礼し、ウェインは執務室の中に入った。

「……ふう」

一人になったウェインは書類を机の上に置いて、大きく伸びをし、一息。

「国売ってトンズラしてええええええ！」

叫んだ。

「やっべーよ国庫にお金全然無いわ……何だこれ……そりゃマーデンとの戦争でかなり無理したけど、ここまで減ってるとかマジかよ……」

戦慄の面持ちで机に置いた書類を見据える。そこに記載された無慈悲な決算の額面は、およそ為政者を震え上がらせるに十分なものだ。

だが、そこでウェインはハッとなる。

「……いや待て落ち着け、見間違いの可能性もある。むしろ見間違いだ。きっとそうだ。そうに違いない、もう一度確認してみれば数字の桁が二個か三個くらい増えてるはず……！」

ウェインは放り出した書類を恐(おそ)る恐る手に取った。

そして目一杯腕を伸ばし、書類を体から遠ざけながら、ページをちらっと指でめくった。

間違っていなかった。

ウェインは机に突っ伏した。

そこに扉を開いて麻袋を持った二二ムが姿を現した。

「……何遊んでるのよ、ウェイン」

机に倒れ込むウェインを見るや否(いな)や、二二ムは呆(あき)れた声を出す。

しかし返ってきたのは不敵な笑い声だった。

「ふふふ、ニニムよ、これを見てもそう言っていられるかな……！」

「これって……ああ、戦費の決算が出たのね」

ニニムは書類を受け取り目を通した。

「……うん、私達が試算した通りね。何度見てもひどい数値だわ」

覚悟はしていたが、やはり戦争にはお金がかかる。元々ナトラは裕福な国でないだけに、影響は大きい。マーデンの領地を削り、金鉱山を奪取したとはいえ、元を取れるまでに年単位の時間がかかるだろう。

「それでこの費用を元に、各部署の予算を再編成した書類がこれなんだが……王室費あるじゃん」

「ええ、王族が私的に使える予算ね」

言うなれば王族のお小遣(こづか)いである。とはいえ当然ながら、国家の代表たる王族のお小遣いともなれば、その金額は一般的な平民のそれを容易に超える。

越えるはずなのだが。

「今期の俺の分がこれよ」

ウェインは懐(ふところ)から小さな布袋を取り出し、ひっくり返した。

机の上に、金貨が一枚だけ転がり落ちた。

「……これだけ？」

「これだけ」

ウェインはうめくように言った。

「もうさー、マーデンから国を守って、金鉱山も奪って、俺かなり低予算の戦争したつもりなのに、報酬が金貨一枚とかテンション下がるわー……」

ぐんにょりと机に項垂(うなだ)れるウェインを横目に、ニニムは書類に目を通す。

「他(ほか)に削れるところはなかったの？　軍事費とか」

「失った兵力や装備の補充があるからむしろ軍事費は足りないぐらいだ。これ以上減らしたらクーデターで死ぬ」

「じゃあ抱えてる事業をいくつか中止するのは？」

「ただでさえ軍部偏重(へんちょう)って思われてるんだ、これ

以上内政を滞(とどこお)らせると文官連中から暗殺者が派遣されて死ぬ」

「それなら単純に税金をあげる」

「民に反乱起こされて死ぬ」

ウェインの返答を受けて、よし、と二ムは頷(うなず)いた。

「すっぱり諦(あきら)めましょう」

「ぬおおおおおおおおおおお！」

ウェインは身もだえした。

そんな主君の様子に若干の哀れみを抱いた二ムの脳裏(のうり)に、思いつくものがあった。

「……そうね、それならウェイン、逆に考えるの

はどうかしら？」

「逆ぅー？」

「極貧（ごくひん）の国で戦争をしておきながら、なお金貨一枚分の余裕をウェインは得られたって考えるのよ」

「……」

ウェインは腕を組んだ。

「確かにそういう見方もできるな」

「でしょ？　仮に他の人間が率いてたら、間違いなく赤字になってたわよ」

これは二ムの素直な感想だ。ウェイン以外の指揮で今の結果は無かっただろう。

すると気をよくしたのか、ウェインはおもむろ

に胸を反(そ)って大仰(おおぎょう)に息を吐(は)いた。心なし、鼻が伸びているようにニニムは感じた。

「ま、確かに？　この国で俺以上に権威、人望、才気を持ってる奴(やつ)はいないっていうか？　そんな俺がちょっとばかし本気を出しちゃったわけだから、この結果も当然みたいな？」

ウェインは気取(きど)った仕草(しぐさ)で金貨を弄(もてあそ)び始める。

若干うざかったが、落ち込まれたままでも面倒なのでニニムはこのまま行くことにした。

「その通りよウェイン、いわばその金貨こそがウェインの能力の証明」

「おお」

「ウェイン以外の誰も手に出来ない国家の重み！」
「なるほど！」
「余人の目には一枚に映っても、そこには値千金の価値があるわ！」
「おいおい二ムさんちょっと褒め過ぎじゃないの！？　俺調子に乗っちゃうよー！？」
「あら、私は本当のことを言っただけよ」
「ですよねー！　いやーつれーわー！　俺の才能が半端なくてつれーわー！」
二ムは微笑んだ。
「それはそれとして留学時代に貸した金貨を返してもらうわね」

「ほあああああああああああ!?」
金貨をひったくられたウェインは叫んだ。
「鬼(おに)かお前は!?」
「正当な権利よ」
「タイミングってのがあると思うんですけど!?」
「利(り)子(し)も取り立ててほしいの？」
「どうぞ持って行ってください二二ム様……！
肩もお揉みしましょうか……！」
ウェインは断腸(だんちょう)の思いで金貨を見送った。利子の帳消しはプライドに優先される。
「代わりってわけじゃないけど、はいこれ。あげる」

そう言ってニニムが麻袋から取り出したのは、紙に包まれた食べ物だ。

「白熊亭の兎肉のパイよ」

「うっわ、懐かしいなオイ。あの店まだ開いてたのか」

白熊亭は城下町の一角にある小さな飲食店だ。幼い頃のウェインとニニムは、ちょくちょくお忍びで寄っていた過去がある。

「おお、この分厚いパイ生地、効かせすぎた香草、パサついた兎肉……まさにあの頃の味だな」

「素直に不味いって言いなさいよ」

「過去を思い出す時、人は詩人になるもんさ」

パイを食べながら、ウェインはおもむろに窓の外を見た。

「しかし、最近は城下の視察もなかなか行けないな」

「こればかりは仕方ないわよ。君主代行となれば時間も限られるし、安全のために人も相応に動かさなきゃいけないもの」

「昔みたいに俺と二二ムだけってわけにはいかないか」

「暗殺されてもいいのなら二人きりで出られるけれども」

「さすがにそれは勘弁だな」

今やナトラ王国において時の人であるウェインだが、それを邪魔に思う人間も少なくない。相手はウェインに冷遇される官吏、聡明な名君よりも御しやすい暗君（あんくん）を望む貴族、ナトラ王国の躍進（やくしん）を望まない諸外国など様々だ。

もちろんその何倍もウェインの存在を喜ぶ人間はいるが、いかんせん影というのは傍（そば）に潜（ひそ）み、隙（すき）をみせると喉（のど）に手をかけてくるものなのである。

「城下の様子はどうだった？」

「お祭り騒ぎはもう少し続きそうな感じ。ナトラ（うち）で良いニュースなんて滅多（めった）にないから、仕方ないといえば仕方ないかもしれないけど。ただやたら

とウェインが情け深い人柄って言われてるのが気になるところね」

それかー、とウェインは渋い顔になる。

「民に好かれるのはいいんだけど、侮(あなど)られると面倒なんだよなぁ」

ウェインが口にした言葉は二二ムが懸念(けねん)していた通りのものだ。

民から人気を得られて喜ばない為政者(いせいしゃ)はいないだろう。人気とは支持であり、それが高いほどに国は動かしやすくなるからだ。

しかし為政者は民に好かれることはあっても、甘いと侮られることはあってはならない。

一度そう思われてしまえば、民は法政を軽んじて欲しいままに悪徳を積むようになり、国は千々に乱れてしまうからだ。

そのために為政者には高度なバランス感覚が求められる。民から好かれ、それでいて民から畏れられるように――言葉にすると簡単だが、これを出来ずに滅んだ国は枚挙に暇がない。

「俺としては、このまま侮られることなく収まるならよし。逆に加熱するようなら……」

「するようなら？」

「……敷いちゃうか、圧政！」

「あのね」

「圧政、苛政、暴政、虐政……おお、屍よ積み上がれ！　民の悲嘆と怨嗟こそが我が安寧なれば！」
「そして行き着く先は文字通りの槍玉ってわけね。為政者が言っていい冗談じゃないわよ、ウェイン」
「ふぇーい」
ウェインとしてもまだ一度の成功を収めただけで、地位が盤石なわけではない。せっかくの自分の人気に安易な水を差すのは避けたいところだ。
「ま、当面は経過を様子見だな。市井には気を配っといてくれ」
「手配しておくわ」
「じゃあそんな感じで――俺は遊びに行く！」

「待ちなさい」
椅子（いす）から立ち上がろうとしたウェインの襟首（えりくび）をニニムは掴（つか）んだ。
「なに寝ぼけたこと言ってるの。まだ仕事は残ってるでしょ」
「……ふっ、そういうと思ったぜ。だがニニム、少し考えてみろ。そもそも俺がこんなに忙しいのはおかしいんだ」
何言ってんだこいつ、という目をするニニムにウェインは続けた。
「いいか、まず俺が思うに、国家とは家臣たる百人の専門家（スペシャリスト）と君主たる一人の万能家（ゼネラリスト）で成り立つも

のだ」

「はあ」

「国家は農業、畜産業、建設業、運輸業、軍事業と様々な事業を抱えているが、君主がその全てを主導し、思案し、発展させる必要はない。それはその事業に特化した家臣がすればいい」

「なるほど。続けて」

「では君主の役目は何かといえば、事業方針の決定と監査だ。事業が発展すべき方向性を決定し、必要な予算を分配し、不正の有無や事業が健全に発展しているかを見張る。そのために君主は国家が抱える全ての事業に精通している必要があるが、

それは不正や間違いを看破（かんぱ）するためであって、事業そのものに手を加えるためじゃない」

「納得できる部分はあるわね」

「だろう？　だから俺が事業の研究開発や進捗（しんちょく）に頭を悩ませるのはおかしいんだ！　本来の俺の仕事は各部署から上がってくる報告書を確認して決済するだけ！　そして今日の分はもう終わった！

つまり俺はこれから自由時間！　どうだ、この完璧（かんぺき）な理論は！」

「寝言（ねごと）は終わった？」

「ニニムうううううううう！」

ウェインは叫んだ。

「なんだよ、俺の理論のどこに問題があるってんだよ！」

「じゃあまず聞くけど、その専門家と言えるほどの人材がナトラ（うち）に何人いるの？」

「……」

ウェインはそっと目を逸らした。

二二ムはその顔を手で挟んで自分に向けさせた。

「その、まあなんだ……片手で数えられるぐらいはいる……いてほしいかなって……」

「じゃあ残る箇所を誰かが穴埋めしなくちゃいけないわよね、万能家（ゼネラリスト）さん」

「うんまあ……そうなんだけど」

「ついでに意図的に口にしなかったみたいだけど、外交も君主の仕事にあるわよね。肩書の釣り合いが取れなきゃ話し合いのテーブルにつけないことは珍しくないもの」

「うんまあ……それもそうなんだけど」

「で、さらにいえばこの後に待ってるのは、新任のアースワルド帝国大使との会談なわけよね。ナトラ（うち）でそれと釣り合いが取れる相手というと」

「解った！　解りましたよ！　やればいいんだろやれば！」

ウェインはヤケになりながら言った。

「ああもう、なんで前任のおっぱいの人は帰っち

やったんだ！」

「ウェインが蹴落(けお)としたからよ」

「その通りだよこん畜生！」

アースワルド帝国。東西に分断されたヴーノ大陸の東部に位置し、近年破竹(はちく)の勢いで領土を拡大した東の雄だが、その立役者(たてやくしゃ)だった皇帝が数か月前に急逝(きゅうせい)し、今は大きな混乱の最中にある。

そんな帝国の大使として以前までこの国に駐留していたのが、フィシュ・ブランデルという女性大使だ。しかしウェインとの外交上の駆け引きにおいて敗れて失脚し、任を解かれて帰国してしまった。そして最近になってようやく帝国より新た

な大使が派遣され、今日初めて会談の場を設(もう)けることとなったのである。

「ちなみに新しい大使ってさ」

「テオルド・タルム大使。壮年の男性よ」

「テンション下がるわー」

「経歴としては主に帝国大使の随伴として各国を渡り歩いてきた苦労人。おかげでツテがあるのは外国や属州の要人ばかりで本国はめっきりみたいね」

「美人の知り合いは？」

「いないわね」

「テンション超下がるわああああ」

「大使に任命されたのは今回が初めてみたいね。ただ本人は年齢もあって本国に戻りたいと周りに零(こぼ)してるそうよ。……ウェイン、ちゃんと聞きなさいって」

「聞いてるよ」

おざなりに手を振りながら、ウェインは息を吐いた。

「はあ、いつになったら楽隠居(らくいんきょ)できるんだろうなあ」

展望は未(いま)だに見えず、課題が山積していくばかりである。

◆◇◆

「ジラート金鉱山は、大陸でも一級の金産出量を誇っていましたが、いかんせんこれまでは西側に主に流通していました。このことは摂政殿下もご存知(ぞんじ)でしょう」

会談が始まって早々、テオルドは切りだした。

「その金鉱山を同盟国である貴国が手に入れたことは、まさに天祐(てんゆう)としか言いようがありません。我が帝国において金の需要は非常に高い。是非とも産出する金を買い取らせて頂きたい」

彼の言葉は力強く、意気込みがそのまま言葉に

宿っているかのようだ。

実際、それは勘違いではない。ナトラ王国駐留帝国大使テオルド・タルムにとって、このナトラ王国王太子との会談は極(きわ)めて重要なものなのである。

彼が帝国の外交官となって十五年余り。端的に言って、日の当たらない外交官人生だった。

なにせ出身は平民で、己(おのれ)のことながら能力的にも敏腕とは言いづらい。そのため手が足りない各国の大使館に穴埋め要員として割り振られ、大使に付き従いながら雑務をこなし、用済みになればまた別の大使館に回されることの繰り返しだった。

そしてその傍(かたわ)らで、実力主義を掲げる帝国の名のもとに、自分よりも若く有能な人間が次々と躍進していくのだ。忸怩(じくじ)たる思いを抱いたことは一度や二度ではない。

だが、ついにチャンスは訪れた。先任のフィシュ・ブランデル大使が失脚し、空いたポストに自分が抜擢(ばってき)されたのだ。

もちろんそこには帝国の内情が不安定な中、有能な人材を国外に置くのが惜しいという側面が強い。上司からも、余計なことをせずに静かにしてろと厳命されている。

（――だが、今回ばかりは従えん！）

帝国の嵐（あらし）がすぎ去れば、自分は解任されて他の大使が改めて派遣されるだろう。それまでに功績を立てておかなければ、また穴埋め要員に逆戻りだ。

テオルドはもう四十代だ。そろそろ外国を駆けずり回る生活が辛くなってきた。それに本国には家族もいる。だというのに一年の内に会えるのは一回あるかないかだ。

（家族のためにも功績を立てて、本国勤めに回らなくては……！）

とまあ、このような個人的事情に突き動かされながら、テオルドはナトラ王国の王宮に赴き、ウエインとの会談に臨んだわけである。

理由が何にせよ、高いモチベーションを持って仕事にかかることは決して悪いことではない。

ただ問題は、彼の仕事の内容が生き馬の目を抜く外交の場であり――

（鼻息荒くしちゃってまあ）

露骨に目をギラつかせているテオルドの心情など、相対するウェインにとっては手に取るように――いや、取るまでもないほどに明白なことだった。

（そんな簡単に手札をさらけ出すなんて、足元を見てくれって言ってるようなもんだろ）

外交とは自国の利益（りえき）を巡る駆け引きだ。外交の成否一つで数千、数万単位の国民に影響が波及す

ることを考えれば、些末（さまつ）な情報といえど軽々に扱えるものではない。

ましてこうも率直（そっちょく）に自らの要求を明かせば、その要求をした背景、経緯、要求が通った場合、通らなかった場合の行動など、容易（よういに）想定と対策をされてしまう。

そもそも今回の金鉱山など、ナトラの状況を鑑（かんが）みれば帝国側から要求する必要などないのだ。今のナトラは西側との繋がりが薄く、東は帝国領と隣接している。よほどあこぎな値をつけなければ、いずれナトラの方から購入を打診してくるのが自然である。

（それを押して性急（せいきゅう）に取引を成立させたい、か。本国に戻りたがってるって話だったが、よほど功に焦（あせ）ってるみたいだな）

内心で冷静に分析しながら、ウェインは口を開いた。

「大使の提案は真にありがたい。きらびやかな黄金に惹（ひ）かれるものはあるが、その輝きは我が国の冬を照らしてくれるものではないからな。私としても、民を直接助けられるものに変えられるならばそれに越したことはないと考えている」

「それならば」

「だが」

今にも食い掛ってきそうなテオルドをウェインは制した。

「先のマーデンと我が国の激戦については聞き及んでいると思う。あれによって被害を受けたのは何も人だけではない。主戦場となったジラート金鉱山も鉱山としての機能を大きく損なっているのが現状でな」

嘘ではない。あの戦争に勝つためにいくつもの坑道を潰したのは事実だ。他にも運搬路や鉱夫の住居なども破壊され、復旧作業は今も続いている。

「おかげで採掘環境は十全とは言えず現在は休止中……本格的に稼働してからどれほどの採掘量が

見込めるかの目算(もくさん)も立っていない。そんな状況では貴国との取引等は難しいところだ」

「む、ぬう……」

こちらは少し嘘だ。復旧作業と並行して採掘は再開され、期待される採掘量と収支の試算も行われている。取引締結とまではいかなくても、その前段階まで話を詰めることは可能だろう。

ではなぜ嘘を吐いたのかといえば、取引の締結が大使にとって大きな功になると解っているからこそ、末永くお付き合いできそうな大使に渡したいからだ。

駐留大使は他国との重要なパイプ役だ。まして

これほど帝国との繋がりを強くできる取引はこれから先で何度あるか解らない。それを思えば、いつ解任されるとも解らない木っ端大使とおいそれと取引するのは憚（はばか）られる。

（ブランデル大使が残っていれば、埋め合わせも兼ねて取引の話をすることも考えられたが、この人じゃちょっとな）

当のテオルドが聞けば憤死（ふんし）しかねない評価である。だが外交の席についた以上、たとえ年齢に一回り以上の差があろうとも立場は対等。能力のみに評価は下されるのだ。

「では摂政（せっしょう）殿下、再稼働の目途（めど）はいつ頃つくので

す？」

「まだ何とも。我が国にとっての重要な拠点ゆえ、万全の体制を構築するつもりだが、そのためにはやはり時間がかかるからな」

「しかし、それでは……」

「なに、心配には及ばない。貴国との関係が重要であることは理解している。採掘が再開すれば、真っ先に交渉の席を用意させてもらうつもりだ」

食い下がろうとするテオルドをいなし、ウェインは小さく微笑んだ。

その後も会談は続き、テオルドはどうにか取っ掛かりを作ろうとするが、ウェインはのらりくら

りとかわして言質を与えず、ついにテオルドは消沈した様子で肩を落としてしまった。

（……他に引き出しもなさそうだし、後は適当に流して終わらせるか）

手札の切れ目が勝負の切れ目だ。これ以上付き合っても、互いに実りはないだろう。

「大使、もしや気分が優れないのかな？　それならば予定よりも早いが、会談を切り上げても……」

「い、いえ、問題ありません！」

テオルドは自らが弱気を晒（さら）していたことに気づき、慌てて居住まいを正す。

「ただ……そう、お若いにも拘わらず深い見識を

持つ摂政殿下に、一人の人間として感銘を受けていた次第です」

ウェインは軽く笑い声をあげた。

「帝国の能吏（のうり）にそういってもらえるとは、少々面（おも）映（は）ゆいな。未熟ながら肩肘を張っている甲斐があるというものだ」

「未熟など……立場上、私はこれまで何人もの王族の方を目にしてきましたが、各国の主君と変わらぬ冴（さ）えを摂政殿下からは感じます」

「妻帯（さいたい）もすませていない若造相手に、それは少々褒め過ぎというものではないかな、タルム大使」

苦笑を滲（にじ）ませながらウェインが何気（なにげ）なく応じる

と、不意にテオルドの眼が見開かれた。
「そういえば、摂政殿下はご結婚の方は……？」
「ん？　ああ……家臣たちは候補を探しているようだが、今のところ私が指輪を贈る相手は決まってないな」
ウェインは肩をすくめた。
「あるいは私が市井の娘にでも懸想（けそう）していれば、講談の一つにでもなるのだろうが、瞼（まぶた）の裏に浮かぶのはせいぜい書類の山ぐらいなものだ」
「……そうでしたか」
表情に思案を覗かせながらテオルドは頷き、それから小さく笑った。

「結婚は良いものですよ摂政殿下。人生を豊かにしてくれます」
「しかし栄枯盛衰は世の理というぞ？」
「枯れ果てる時すら共に楽しめる相手を伴侶というものですよ」
「……なるほど、そう言われると悪くないように思えるな」
それから、ウェインとテオルドは言葉を交わし続け、やがて予定の刻限となって会談は幕を閉じた。
結局この会談において、両国の間に新たな約定などが結ばれることはなかった。若い王太子と新任大使の顔合わせ。結果だけを見れば、それだけ

の内容だった。

しかし意外というべきだろうか。不本意な結果にも拘わらず、テオルドの顔には失意ではなく一筋の光明が差していた。

（……金鉱山は無理だった。しかし、こちらならば可能性はある）

脳裏に計画の絵図を描きながら、テオルドは足早に王宮を立ち去った。

◆◇◆

去っていくテオルドの背中を、ウェインは窓越

しに見つめていた。
そんな彼に傍(かたわ)らのニニムが声をかける。
「……で、いいの？　あれを放っといて」
「あれって？」
「タルム大使よ。気づいてるんでしょう？」
ニニムは僅(わず)かに苦々(にがにが)しさを滲(にじ)ませながら言った。
「あの大使……帝国でウェインの結婚相手を探すつもりよ」
「みたいだな」
そう、それこそが咄嗟(とっさ)に思いついたテオルドの計画だった。
客観的に見れば、ウェインは若く温厚で才気(さいき)溢(あふ)

れる王太子だ。しかも独身ときている。世の婦女子にとってこれほどの相手はそういないだろうし、紹介した相手が見事にウェインの妃（きさき）に収まれば、テオルドの覚えが良くなるのは間違いない。

「苦肉の策とはいえ、なかなか大胆な手を考えるもんだ」

苦笑するウェイン。しかし、真に恐るべきはウェインとニニムである。二人はテオルドの思惑を完全に看破するどころか、その先までも既に考慮していた。

「ま、実際のところ難しいだろうけどな。ニニムもそう思うだろ？」

「……そうね。他国の王族に紹介するとなれば市井は論外。男爵や子爵程度の子女でも無礼。少なくとも伯爵位は欲しいところだけど、あの大使にそういったツテはないはずよ」

「まして、帝国の法だと貴賤（きせん）結婚は許されても、貴族が外国の王族に嫁ぐのは皇帝の認可が必要なはずだ。その肝心の皇帝が空位じゃあ、どうしようもない」

貴族の結婚に制限があるのは珍しいことではない。特に外国の有力者との婚姻は、国内貴族のパワーバランスの崩壊や、外国からの干渉などを誘発しかねないため慎重になるのだ。

むしろ認可を取る余地がある帝国は緩(ゆる)い方だ。身分制度の根強い大陸西部では、外国人との結婚を完全に禁止したり、平民と貴族の結婚などを例とした貴賤結婚を許さず、出自(しゅつじ)が対等の結婚しか認めない国も多くある。

「でも万が一は有りうるわ。実は大使が有力な貴族に知り合いがいて、皇帝空位にかこつけてごり押しできるような政治力を持ってるかもしれない」

「そこまで力のある貴族が、帝国が割れそうなご時世に、他国の王族にちょっかいかけるか？　結婚できそうな年頃(としごろ)の娘がいるなら、国内の繋がりに回すだろ」

「んー……帝国に見切りをつけて、とか」

「無いな。帝国が沈む間際（まぎわ）ならありうるが、今の帝国は割れることはあっても沈むのはまだ先だ。店じまいの準備をするには気が早すぎる」

そう言い切った後、ウェインはにっと笑った。

「というわけで、俺は帝国の誰かさんと結婚なんてしないから機嫌直せって」

「……別に不機嫌になんてなってないわ」

「はい嘘（うそ）ー、嘘ですぅー、めっちゃ不機嫌になってますぅー！　いやーニームさんってば照れちゃって可愛（かわい）いいいいいい痛い痛い痛い!?」

「前からウェインの腕の関節を増やせそうな気がしてたのよね……」

「増えないから！　肘だけで限界だから！」
憤然（ふんぜん）とした様子でニニムはウェインの腕から手を離した。
「照れてないわ」
「解った、悪かった。ニニムは照れてないし不機嫌にもなってない。いつも通りスーパー美人で超絶可愛い。これでいいか？」
「いいわ」
「いいのか……」
満足げに頷くニニムに若干慄きつつ、ウェインは気を取り直した。
「ともかくだ、あの大使が俺の立場に見合う結婚

相手を引っ張って来れるなんて有り得ないし、万が一引っ張ってきても俺自身に結婚するつもりはない。ついでに言えば、結婚するつもりがないのはナトラの貴族が相手であっても同じだ」

これにニニムは軽く目を見開いた。騒動の渦中にある帝国に手を出したくないのは理解できるが、ナトラの貴族でも断るというのはどういう了見か。

そこでニニムはハッとなった。

「まさかウェイン……」

声に戦慄を蓄えながら彼女は言った。

「……男色だったりする？」

「おっぱい揉むぞ」

「一揉みにつき指一本ね」
「ちょっと代償高くないですかねスーパー美人で超絶可愛い二二ムさん!?」
「理由を話したら値引きするわ」
ひどい商売だ、と思いながらウェインは答えた。
「別にそんな複雑な話じゃないぞ？　単にホラー俺、チャンスがあればいつでもこの国売るつもりだからさ」
「……」
二二ムは目元を手で覆(おお)った。
「相手からしたら未来の王様の妃になりに来たのに、それがご破算(はさん)になるわけだろ？　さすがに悪

いかなって思うじゃん」

「……そういう気の使い方ができるなら、まず国を売るところから離れるべきだと思うのだけれど？」

「いいや、絶対に売国する。責任と義務から逃れて悠々自適（ゆうゆうじてき）のハッピーライフを送ると俺は心に決めてるからな！」

「……あ、そう」

「というわけで理由を答えたけど、今のおっぱいはお幾ら？」

「指二本」

「値上がりかよ!?」

ニニムは大仰にため息を吐いた。

「全く……これならいっそ、結婚を断れないような相手をあの大使が連れてきてくれることを祈りたくなるわね」

「そんな都合のいい相手なんて見つかるもんかよ。賭(か)けてもいいぜ」

「じゃあ、もしも見つかったら鼻に茹(ゆ)でたジャガイモを突っ込むわね」

「おーいいぜ、やってやるよ。どうせ見つかるわけないからな」

勝利を確信しながら、ウェインは笑い声をあげた。

◆◇◆

「見つかりました」

「えっ」

先の会談から数週間後。

二度目の会談の場において、テオルドは開口一番そう言った。

「見つかった、とは……？」

ウェインが恐る恐る聞き返すと、テオルドは些か戸惑いを滲ませながら答えた。

「僭越（せんえつ）ながら、先の会談で摂政殿下が未だに独身とお聞きし、両国友好のためにも、摂政殿下に良

い縁談がないものか帝国で探していたのです」

「なるほど、それはまた……せめてその旨を伝えてもらいたかったが」

「申し訳ありません。ですがなにぶん相応しい女性が見つかるかどうか、私としましても断言しかねるところがありましたゆえ……」

まあそうだろう。自ら探すと明言してしまえば、見つけ出さなくては顔を出せない。さすがに前回の会談の時にそこまでのリスクは犯せまい。ウェインもそれは解っているからこそ、深くは追及しない。それに、今はそんなことは問題ではない。

「解った、そこについては不問にしよう。だが、

そうなると……見つかったのか」

「見つかりました」

「……」

ウェインは補佐官として横に控えるニニムにそれとなく目をやった。

彼女はにっこりと微笑んだ。ジャガイモを鼻にねじ込む笑みだった。

全力で断ろう、とウェインは思った。

「まず、タルム大使には礼を言わせてもらおう。何はともあれ、私のために骨を折ってくれたわけだからな。だが私はナトラ王家に連なる者だ。大使が見出したのがどのような女性かは知らないが、

妃とするにはそれなりに厳しい条件があるぞ」
脅しつけるような口調でウェインは言う。
しかしテオルドは尻込(しりご)みする事なく頷いた。
「もちろん、承知しております。その上で、何と言いますか……問題はないかと」
「ふむ……」
ウェインはテオルドの様子を観察する。
問題ないというからには、見初(みそ)められるに足る自信があるのだろう。
しかしそれにしては何か妙だ。先日の会談の時のテオルドを思い起こせば、条件に合いそうな女性を見つけて会談に臨めたとなれば、さぞや意気

込みを露(あら)わにしてもいいだろうに、今日の彼はどこかそわそわしている。

（見つけた女性は条件的には悪くないが、何か問題を抱えてる……といったところか？）

脳裏でアタリをつけながらウェインは口を開いた。

「タルム大使、先ほどから何やら落ち着きがないが、もしや貴殿が見つけてきた女性に何かしら懸念(けねん)すべきことがあるのかな？」

「い、いえ！　まさかそのようなことはございません！」

テオルドは慌てて声を張り上げた。

「容姿は端麗で気性もまさしく淑女の鑑。それでいて、凡百の私でも解るほどに鋭い英知を持つ御方です。摂政殿下と響き合うことは間違いないと確信しております。おりますが……」

テオルドが言葉尻を濁した。

相手は容姿と気立てがよくて頭も良い。にも拘わらず、テオルドがそのような反応をするということは――

「では、出自の方はどうだ？」

「――」

テオルドの肩が僅かに揺れた。どんぴしゃだ、とウェインは思った。

恐らくはニニムの調査通り、有力貴族へのツテがなかったのだろう。そして家格の低い没落貴族辺りからどうにか引っ張り出してきた、というところか。

そういうことならば断るのは簡単だ。ウェインは悠然（ゆうぜん）と告げた。

「先ほどの言を繰り返すが、私はナトラの王族だ。大使が見出したのがどのような女性かは知らないが、前提としてそれなりの家格の娘でなくては、相手にすることはできないぞ」

身分の壁という正当な理由をウェインは並べる。こうなっては向こうは手を引くしかあるまい。勝

利を確信し、去り行くジャガイモの姿を脳裏に浮かべていると、テオルドが口を開いた。

「それが、そこも問題ないのです」

「えっ？」

予想外の返答にウェインは眼を瞬(しばたた)かせた。

「ただ何と言いましょうか、お相手の身分に注視すべき点があるのは確かでありまして……」

「……どういうことかな？　問題ないというからには、男爵や子爵ということはなさそうだが、どこかの有名な伯爵家のご令嬢でも見つけてきたのか？」

「……」

テオルドは押し黙った。

しかしその沈黙は図星（ずぼし）によるものではないとウエインは見抜く。

ではなにゆえ黙るのか。そこまで考えて、ウェインは気づいた。

先ほどからのテオルドの落ち着かない様子は、自らに課した条件を達成できなかったことからの不安や焦燥（しょうそう）ではない。

手に余る大成果を得てしまい、慌てふためいている匹夫のそれであると。

「タルム大使。もしやと思うが……伯爵より上か？」

「……はい」
「……侯爵か？」
「……いえ、さらに」
「……公爵？」
「……その一つ、上でして」
「……待て、それはつまり」
頬（ほお）をひきつらせるウェインにテオルドは頷き、緊張と不安でないまぜになりながら言った。
「此度（こたび）の摂政殿下との縁談に名乗りをあげたのは、我がアースワルド帝国第二皇女……ロウェルミナ・アースワルド皇女殿下であらせられます――」

かくして、この予想だにしない縁談話により、冬を前にしたナトラに新たな熱風が巻き起こる。

後の世において賢王大戦（けんおうたいせん）と呼ばれるこの時代。

そのキーマンの一人であるウェイン・サレマ・アルバレストの、第二幕が始まろうとしていた。

◆第二章◆

王侯貴族にとって、結婚というのは政治的な駆け引きの一つである。

なぜ、と疑問に思う人もいるだろう。確かに結婚は人生においてイベントだ。しかし結婚することで両者の間に物理的な束縛が生じるわけではなく、結婚したという事実を当事者とその周囲が共有するだけでしかない。それがどうして政治の問題になるのかと。

だがそれこそが大事なのだ。その事実の共有が

状況を変える。変える理由になってくれる。険悪だった両家でも、子供同士が結婚すれば握手する理由になる。そうなれば当面の争いはないだろうと民達は安心する。すると農業や商売に専念することができ、経済が活発になる――冗談のような話だが、王侯貴族の結婚ともなればこのようなことが事実として起こり得るのだ。

これはひとえに、多くの人々が結婚は一大事であるという認識を持つがゆえだ。それこそが結婚にこうした実利を生じさせ、ひいては政略結婚などという概念すら作りだしたのである。

――ゆえに、降ってわいたウェインとアースワ

ルド帝国皇女との縁談話のために、ウェインを筆頭として重臣総出による会合が行われることになったのは、ごく当たり前のことだった。

「結構なことではありませんか」

会合の様子は、概(おおむ)ね今回の件を好意的に捉(とら)えるものだった。

「帝国の皇女となれば、我らがウェイン殿下のお相手として申し分ありません。これが成立すれば我が国と帝国との同盟はより強固となり、さらなる繁栄が約束されましょうぞ」

「事はそう単純ではあるまい」

もちろん中には苦言(くげん)を呈(てい)する者もいる。

「皇帝を失った今の帝国は炎の中にある。我らは独立した同盟国という立場であるからこそ距離を置いていられるが、皇族と婚姻を結べばそう言ってはおられん」

その言い分には一理ある。が、周囲を説き伏せられるほどの力はない。

「今回の件に関係なく、帝国の騒動に巻き込まれる可能性は十分にあろう。ならばこそ、ここで縁を結んでおくべきではないか？」

「然（しか）り。荒れているといっても帝国の権威は健在だ。西のカバリヌも油断できぬ今、せめて東側とは良い関係を築くべきだろう」

「しかしだな、帝国との国力差を見ろ。下手に関係を強固にすればそのまま飲み込まれてしまいかねんぞ」

「そのようなことを言って、貴殿は自分の娘を殿下の正妃（せいひ）に仕立て上げたいだけでは？」

「なにをっ！」

「まあまあ、落ち着け。言い争いをする場ではないぞ」

このような具合で会合は続き、やがて家臣の一人が部屋の隅に控えていたニニムに目を向ける。

「ニニム殿、皇女殿下が自らこちらへ足を運ぶというのは本当なのだな？」

ニニムは頷(うなず)くと、書類を手に一歩前に出た。

「縁談の申し込みと並行して、帝国よりナトラが冬入りする前に使節団を派遣したいとう要望が届きました。名目は両国の同盟関係の確認と強化のためとなっておりますが、使節団の代表はロウェルミナ皇女殿下となっております。これは実質的に、両殿下が互いの人となりを確認しあう見合いになるものかと」

家臣達は眼を見合わせる。

「凄(すさ)まじい行動力、というべきでしょうか」

「いやあこれは暴走だろう」

「向こうの臣下は諌(いさ)めなかったのか……」

皇女との婚姻が正式に結ばれた後ならばともかく、今はまだ話し合いの段階だ。なのに兵士に守られた宮殿から外に出て、顔も知らない他国の王族の元に足を運ぶなど、薄衣（うすぎぬ）一枚で夜の森に入るようなものである。

揺らいでいるとはいえ帝国の権威は健在であり、ならば不埒（ふらち）な真似（まね）を働けるわけがないと考えているのかもしれないが――見目麗（みめうるわ）しい女性を前にして、健康な男に魔（ま）が差すということはありふれた出来事だ。婚姻の前に手籠（てご）めにされる危険性は誰（だれ）しも想像がつくだろう。

そう、想像がつくはずなのだ。帝国側とて。だが、

ロウェルミナ皇女は来るという。

「ふうむ……殿下は如何(いかが)思われますか？」

重臣たちの注目が上座(かみざ)で黙(もく)したままのウェインに集まる。

「そうだな……」

ウェインは家臣たち一人一人と視線を合わせた後、おどけるように肩を竦(すく)めた。

「皇女殿下を迎える前に、宮殿の外壁のひび割れを隠しておくべきだろうな」

会議室に家臣達の笑いが響いた。

「いや仰(おっしゃ)る通り、多少は見栄を張りませんとな」「塗装費用をどこから捻出(ねんしゅつ)する？」「いっそのこと雪を

白粉(おしろい)代わりにでもしてみるか」「それはいいな、春になれば勝手に消えてくれるだろう」

ウェインの言葉に乗って、しばし冗談交じりの会話が家臣達の間に飛び交う。

それが収まった頃、再びウェインは口を開いた。

「此度(こたび)の件、突然のことに皆驚いたことだろう。実を言うと私も同じでな、明日にでも間違いでしたと連絡が来るのではないかと思ってる」

家臣達の間に再び忍び笑いがこぼれた。

だが、とウェインは続けた。

「間違いでないとするのなら、前向きに検討(けんとう)したいと思っている」

一堂の顔が引き締まった。あくまでもウェイン個人の意思表明だが、当事者にして君主代行である彼の言葉の影響力は、家臣達をそのつもりにさせて余りある。

「帝国の騒乱に巻き込まれる懸念(けねん)は確かにある。だがやはり、それを踏まえても皇族と結べるのは大きな利だ。この機を逃す手はない」

そう言い切ってから、とはいえ、とウェインは苦笑する。

「実際に婚姻に漕(こ)ぎつけられるかはまだ解らないのだがな」

「なんの、殿下よりも賢智と仁徳に溢(あふ)れた御方な

ど他(ほか)におりませぬ」

「いかにも。皇女殿下が来訪された暁(あかつき)には、殿下をお選びになったことは間違いなかったと確信されることでしょう」

一様に頷く家臣達に、ウェインは相好(そうごう)を崩(くず)した。

「では、そのためにも皇女殿下を迎える準備を万全にしよう。皆協力してくれ」

「「はは っ！」」

かくして、皇女殿下来訪に備えて準備が始まったわけである。

◆
◇
◆

――で。

「超断りてええええええええ！」

執務室に戻ったウェインは、例のごとく頭を抱えていた。

「いやもう百％罠（ひゃくパーわな）じゃん！　どう考えても俺（おれ）のところに皇女の縁談が来るとかおかしいわ！　国力差を考えろっつーの！」

たとえば二つの伯爵家があるとしよう。

制度上において両家の家格は同じだ。しかし、各々の家が持ちうる財力や武力の差によって、力の強い方の家が格上として扱われることは珍しく

ないことである。

それは王家であっても同じことだ。

国内唯一無二の貴種（きしゅ）。国民の頂点に立つ血統。

されど、その価値は属する国の国力に大いに影響される。国力差が天地ほどであれば、王家の価値も同じほどに違いが出るだろう。

そしてナトラと帝国はまさしくその天地なのだ。

常識的に考えれば、皇女が嫁（とつ）ぐ先としてナトラ王国は分不相応（ぶんふそうおう）なのである。

しかし現実として縁談は舞い込んだ。

「つまり、それをするだけの政治的な理由が向こうにあるってことよね」

ニニムの言葉にウェインは呻(うめ)きながら応(こた)える。
「そうだな、そう考えるのが自然だ……ちなみにニニムはその理由は何だと思う？」
「皇子たちの派閥争いの一環だと思うわ」
現在、帝国は三人の皇子達による跡目(あとめ)争いが行われている。今のところ武力行使にまでは至っていないが、収束する気配はなく、内乱は時間の問題とまで言われていた。
「皇女は恐らく三つの派閥のどれかに付いたのよ。そして派閥を少しでも強化したい皇子は、ナトラを組み込むべく皇女を差し向けたってところじゃない？」

「ああ、そんなところだろう」
ウェインは頷き、言った。
「――と、思わせるのが向こうの罠だ」
ニニムは困惑を顔に浮かべた。
「罠って……じゃあ違う理由があるってこと？」
「ああ。ついでに言えば十中八九、向こうは俺と結婚する気が無い」
驚きに眼を剝（む）くニニムを目の端に捉えながら、ウェインは苦々し気に言った。
「ニニムも思っただろ、結婚が決まる前に皇女が直接こっちに来るなんてありえないって」
「確かにそこは疑問に感じたわね」

「じゃあなぜ向こうはそうしたか？　それは冬入り前にナトラに来たい理由があるからだ。そのために使節団派遣という名目を用意し、さらに裏の目的として俺と皇女の見合いをセッティングをした。ここまでされれば、どうあってもナトラ（うち）は来訪を断れない」

「……」

ニニムは腕を組んで考え込んだ。ウェインの言葉通り、どちらか片方ならばともかく、二つの理由を重ねられれば断ることは不可能だ。そんなことをすれば同盟関係は粉々に砕け散るだろう。

「それでいて縁談自体は確定してないのがポイ

ントだ。ナトラを派閥争いに組み込むのが目的なら、見合いなんてまだるっこしいことをしてないで、強引に押し付ければいい。国力差からいっても突っぱねられるわけないしな」

ウェインは続けた。

「なのにそうしていない。皇女自ら外国に赴くなんてリスクを背負ってるくせに、いざ来訪した後、人間性が合わなかっただのなんだの、理由をつけてご破算にできるギリギリのラインに立ってる。どうだ、作為を感じてこないか？」

ニニムは思わず唸った。

こうして並べられてみると、ウェインの言葉には真実味がある。

しかしそれだと一つ疑問が生じる。
「……そうまでしてナトラに来る本当の目的っていうのは？」
ウェインはにっと笑った。
「――俺にもさっぱり解らん！」
じと目になるニニムにウェインは言った。
「仕方ないだろ、色々考えてはいるんだけど本当に解らないんだ。冬入り前を指定したってことは、かなり急ぎの理由があるはずなんだけどな」
ウェインは頬杖（ほおづえ）をつきながらぼやいた。
「それでいて結婚が端（はな）から有り得ないなら、供応の準備をするために予算をひねり出すのが馬鹿（ばか）ら

しい。なので俺としては来訪を超絶お断りしたいんだが」

「立場的に出来ない」

「そういうことだ」

忌々(いまいま)し気(げ)にウェインは舌打ちした。

「ったく、これ仕向けたやつ絶対性格悪いぞ。たださえ戦争でヤバいってのにどこから予算引っ張り出せってんだ」

不機嫌そうにウェインは天井(てんじょう)を仰(あお)いだ。

「他の家臣にこれを伝えなくていいの？」

「何人かに話は通すつもりだが、大半は歓迎の準備に集中させる。相手の目的がなんであれ、帝国

の正式な使節団に無礼を働くわけにはいかないからな。つーか表で歓迎しながら裏で真意探るなんて腹芸、うちの家臣達にできないし」

「そんなことは……まあ、無きにしも非ずだけど」

ニニムとしては嫌いではないが、ナトラの家臣達はなんというか――良くも悪くも朴訥（ぼくとつ）な部分がある。

「ちなみにだけど、ウェインの考えすぎって可能性は？」

「ある。が、その場合は何で皇女様が直接乗り込んでくるのかって疑問が解決されない」

「それは……」

ニニムはしばし考えて、ポンと手を叩(たた)いた。

「たとえばそう、戦争にも内政にも活躍するウェインのイケメンぶりに惚(ほ)れこんでつい押しかけ……ごめんなさい、ありえないことを口にするところだったわ」

「できれば最後まで言い切って欲しかったんですけどねニニムさん！　一応俺にも傷つく心っていうものがあるんですが！」

「ああ、誤解しないで。ウェインはナトラ王国の若き王太子にして摂政で、先のマーデンとの戦では陣頭に立ちナトラ軍を戦勝に導いた、私も含めてナトラの臣民に敬愛される立派な――フツメン

だから」
「そこまで言ったならイケメンの範疇（はんちゅう）に入れてくれよ！」
「王太子殿下の第一の臣として、偽（いつわ）りを口にすることなど恐れ多く」
「ちょくちょく偽ってるだろうが！　どの口で言いやがる！」
「この口よ」
悪びれる様子もなく、むに、とニニムは自分の口端を指で釣り上げた。
ウェインはむむむと唸り声を上げた後、言った。
「……いいだろう、こうなったら俺にも考えがあ

る！」

「考えって？」

「ニニムの意見を採用！　皇女様は俺のイケメンぶりに惚(ほ)れこんだという方向でいく！」

「ええ……」

呆(あき)れと困惑の顔をニニムは浮かべる。

「そう、振り返ってみると最近の俺はどうにも運が悪い。ここぞという時に皇帝は死ぬし金山は空だしマーデンは滅ぶし！」

「ウェインの運が悪いのは、以前からだと思うけど」

「やかましい！　ともかくこういう不運が続いた

ってことは、そろそろ揺り戻しが来てもいいはずだ！　そう、何の裏もなく皇女様に惚れられて悠々自適の生活を送るような幸運が！」

「――てい」

「うぐっ」

ニニムの手刀がウェインの脇腹（わきばら）に突き刺さった。

「落ち着いた？」

「落ち着かされた……」

脇腹を撫（な）でさするウェインにニニムは言った。

「とりあえず、帝国と予定の調整を詰めながら探りを入れてみるわ。皇女様の目的がどこにあるのかは、もう少し情報を集めてから改めて考えまし

よう」

「そうだな。俺の方はどこから予算引っ張ってくるか考えとくわ」

方針が纏(まと)まり、ニニムは踵(きびす)を返す。

その背中にウェインの言葉が投げかけられた。

「あー、ところでニニム」

「何かしら？」

「俺ってほんとにイケメンに入らない？」

ニニムはきょとんとした後、小さく笑って口端を指で釣り上げた。

「ええ、殿下は立派なフツメンですとも」

◆
◇
◆

古来より人の口に戸は立てられないものである。ましてそれが話題沸騰（ふっとう）中の王太子の婚姻ともなれば是非（ぜひ）もない。先の戦勝に次ぐこの一大事は、宮廷の人間は元より城下にまで瞬く間に知れ渡った。

幸いというべきか、多くの民はこれに歓迎の意を示した。帝国との間に培（つちか）ってきた同盟関係と、ウェインの持つ人気と期待の表れだろう。

「これで我が国と帝国の同盟はより強固となるな」

「病床の王もさぞ安心されることだろう」

「王太子殿下の御子（おこ）はどのような御名前になられるだろうな」

「ははは、それはまだ気が早いだろう」

などと、正式に婚姻が結ばれたわけでもないのにこの浮かれ具合である。

むしろこれらはまだ理性的な方だ。特に帝国の皇女という国民の誰一人として実体を知らない女性の存在は、様々な憶測と脚色を産んだ。

やれその声音（こわね）は宝石よりも美しい、やれその容姿（ようし）は神々に比するなどは序の口で、ウェインが帝国に留学していた過去を持ちだし、そこで二人が密（ひそ）かに逢瀬（おうせ）を重ねていたのではないかという話

まで飛び出してくる始末である。

もちろん所詮（しょせん）は戯言（ざれごと）であり、盛り上がりに水を差すこともないから放っておけというのがウェインの指示だ。二ムとしてもそこに異論はなかった。

なかったのだが――ここ最近、少しばかり事情が変わった。城下の方は問題ないのだが、宮廷で流れる噂話（うわさ）が妙な方向にねじれているのである。

その原因は二ムにあった。

二ムがウェインに重用されていることは隠しようもない事実だ。王太子の補佐官にして愛妾（あいしょう）であると宮廷の誰もが認識している。

それゆえ、ウェインが結婚したら彼女はどうな

るのか――という疑問が彼らの間に生じたのだ。

「まさか失意のまま王宮を去られてしまうのでは？」

「いや、補佐官殿が殿下の御傍（そば）を離れるとは……」

「しかし皇女の気性によっては妾（めかけ）を許さず、遠ざけようとするかもしれん」

「ううむ……補佐官殿のことだ、そうなっても滅多（めった）な行動は取らぬと思いたいが」

このような話が宮廷のそこかしこで囁（ささや）かれているのである。

これには二ムは困った顔になった。そして政務を補佐する傍（かたわ）ら、対処の方法を思案していたわ

けなのだが、
「というわけで、その辺りどうなのでしょうかニム様！」
「直接聞きに来ますかそれを……」
帝国との協議が片付き、廊下で一息ついていたところで、年若い女官たちにニムは捕まった。
「そりゃあ聞きますとも。みんなが気にしてることですからね」
「そうですよ。ウェイン殿下と皇女様とニム様の三角関係なんて、とびきりのネタですもの」
「三角関係を構築した覚えはありませんが……」
今や噂話にどれほどの尾ひれと背びれがついて

いるのだろうか。呆れと戸惑いを抱きながらニニムは女官たちに言った。

「では明言(めいげん)しておきますが、私は宮廷を去る気などありませんよ。それに殿下の結婚相手がどなたになろうとも、上手(うま)くやっていきますとも」

ニニムの偽らざる本音である。日々積み重なる政務の難しさを思えば。王侯貴族の箱入り娘の心を丸め込むのにいかほどの苦労があろうか。

「解ったらこれ以上妙な噂を広めたりしないように、他の者たちにも言っておきなさい。もしも殿下の耳に入ったら、どうなるか解らないでしょう」

これこそニニムの懸念(けねん)だった。

別に自分が噂されることを自体は構わない。だが、多くの人間がそうであるように、ウェインにも逆鱗（げきりん）がある。宮廷に流れているこの噂話は、そこに触れかねないものなのだ。

「ちぇー、解りましたよ」

「ニニム様お堅いなぁ」

「まあまあ、仕方ないわよ」

渋々（しぶしぶ）従う女官たちにニニムは内心でため息を吐いた。

ウェインと家臣達の間に立つことの多いニニムは、礼節を弁（わきま）えるべき相手にはできるだけ丁寧に、ざっくばらんな態度の方が受け入れられやすい相手には軽口を添えるなど、周囲との距離感に最大

限気を使っている。

おかげで女官たちとも円満な関係でいられるが、こういう事態に直面すると、もう少し威厳のある距離の方が良かったかと若干後悔をしてしまう。

とはいえあちらを立てればこちらが立たずというのは珍しくもないことだ。ニニムは素早く切り替えた。

「さて、私は仕事に戻ります。繰り返しますが、くれぐれも殿下の逆鱗には触れるようなことは避けるように。過去にそうした人間がどうなったか、知らないわけではないでしょう？　言っておきますが、私でも止められませんからね」

露骨に脅(おど)しつけられて、女官たちはバツが悪そうに頷いた。

それを確認してから、では、とニニムは踵を返した。

（これだけ釘(くぎ)を刺しておけば多少は噂も沈静化するでしょう）

半分ぐらいはそうあって欲しいという期待を込めての思いである。

（それにしてもこの盛り上がり……もしもウェインの言う通り罠で相手に結婚する気がないとなったら、みんながガッカリしそうね）

廊下を歩きながらニニムはウェインの推測を

脳裏(のうり)に浮かべる。

ニニムはウェインの思慮の深さを知っている。時として背筋が寒くなるほどの英知を垣間見(かいまみ)せる彼の発言は、そうそう軽んじられるものではない。

同時に、罠というのはさすがに穿(うが)ちすぎではないか、という思いも心の中にあった。相手の真の目的がウェイン自身も解らないと言っているからだろう。

（だけど、ウェインが間違いで、やっぱり派閥強化が目的なら……）

彼は家臣達に宣言した通り、迷うことなく皇女と結婚するだろう。政治の一環として。

解っていたことだ。彼はナトラの王族で、その伴侶の位置に特別な富も地位も持たない女が入りこめるわけがないことは。

「……」

ぺちん、とニニムは自らの頬を手で叩いた。

「さ、ウェインのところへ戻らなきゃ」

ニニムは廊下を歩く足を速めた。

そうして時折すれ違う家臣や衛兵たちと軽く挨拶や言葉を交わしつつ、ニニムは執務室へと続く道を進んでいき――

「ニニム」

不意に冷厳さを感じさせる声音に背後から呼ば

れ、ニニムは足を止めて振り向いた。

この宮廷でニニムを呼び捨てにする人物はそう多くない。国王と、王太子ウェインと、その妹姫のフラーニャと、そして――

「レヴァン様」

深く一礼をしながら、ニニムはその男性の名を口にした。

レヴァンと呼ばれたその男は、見るからに堅物（かたぶつ）といった様相だった。顔つきは厳めしく、歩く所作（しょさ）からも規律を滲（にじ）ませ、さながら鍛えられた鉄のようだ。

だがそれ以上に特徴的なのは、彼の髪と瞳（ひとみ）だろう。

その髪色は白く、瞳は真紅。すなわち彼がニニムと同じフラム人であることを物語っていた。

「歩きながらでいい。少し時間はあるか」

「構いません。ウェイン殿下の縁談の件でしょうか？」

「まさしく」

二人は並んで廊下を歩きながら言葉を交わす。

「縁談の話が陛下の耳にも届いてな。仔細（しさい）を知りたいと望んでおられる」

「そのようなことでしたら、呼びつけて頂ければ私が足を運びましたのに」

レヴァンは小さく鼻を鳴らした。

「ふっ、未来の族長殿にそのような無体（むたい）は働けぬさ」

するとニニムも苦笑を浮かべる。

「現族長のレヴァン様が何を仰るのやら」

古くから大陸――特に西側において差別階級であるフラム人。かつてその大陸を放浪した果てに、ナトラ王国に到達したフラム人の一団があった。

差別と偏見に襲われながらも、大陸各地を巡ることで深い見識（けんしき）を得たフラム人達を、当時の王は快く受け入れた。中でも一団を率いていたラーレイというフラム人は王の覚えめでたく、彼は王の補佐として終生（しゅうせい）仕えた。

それ以後もフラム人の子孫は優秀な人間を輩出(はいしゅつ)し、代々の王も彼らを取り立てた。

その過程で産まれた風習が三つある。一つは、王族一人一人に厳選されたフラム人が補佐として仕えるというもの。二つ目は、選ばれたフラム人はラーレイという名字を与えられるというもの。そして最後に、即位した王族の補佐がナトラに住むフラム人の長(おさ)になるというものである。

そしてこのレヴァン・ラーレイこそ、現ナトラ王の補佐を長年務めてきたフラム人であり、ナトラ王国に住むフラム人達の族長であった。

「それで、縁談は実際どうなのだ？」

「使者と話を詰めている限り、かなり本気のようです。縁談が決まる前に、ロウェルミナ皇女御自（おんみずか）らナトラ（ここ）を訪れることになりましたから」

「なんと。これは笑い話では片づけられぬな」

「ただウェイン殿下は、何か裏がある、と考えておられるようで……」

「ふむ……ロウェルミナ皇女について、手の者からの報告は？」

他の国がそうであるように、ナトラ王国にも諜報員（ちょうほういん）というものはいる。しかしナトラには、さらに大陸各地に散らばるフラム人のネットワークを利用した諜報網が存在する。以前はレヴァンが

管理していたが、今は二ムが任されていた。
「芳(かんば)しくありません。皇女は普段から宮廷の奥に籠(こも)り、儀式や夜会に出席した回数も数えるほどで、ろくに情報が出回っていないと」
さらに二ムは頭を振った。
「特に今の帝国の宮廷は三人の皇子の政治闘争で乱れ、皇女周辺を探るには相応の時間が必要という報告が」
「そうか……誰が箱入り娘に輿入(こしい)れ準備をそそのかしたのか気になるところだが」
「やはり皇女の裏で手を引く者がいると？」
「そう考えるのが自然だろう。……あるいはウ

ェイン殿下と皇女が顔見知りならば話は変わるが、そこはどうだ？」

ニニムは頭を振った。

「いえ、そのような噂こそ流れていますが、実際には」

ウェインとニニムは基本的に一緒に行動する。それは帝国留学中でも変わらなかった。もちろん今この時のように離れて動くこともあったが――その僅かな時間で皇女と会っていたとは考えられない。そもそもウェイン自身が知らないと言っている。

「そうか……時に殿下は縁談自体を拒否はされて

いないのだな？」
「はい。受け入れる方針で進めております」
「それならばよい。気が乗らぬとヘソを曲げられては惨事（さんじ）となっていただろうからな」
「……」
やはり他の人間もこの件は断れないと感じているのだ。そしてそのことに違和感を抱いていない。仕向けられた、というウェインの言葉がニニムの脳裏をよぎった。
（やっぱりウェインの言う通り、別の目的があるのかしら……）
ニニムが考え込んでいると、レヴァンは独白（どくはく）す

るように続けた。

「もっとも、あの殿下に限って有り得ないとは解っていたがな。殿下は若くして自らの感情を律し、物事を俯瞰（ふかん）することに長（た）けておられる。……陛下といい殿下といい、やはりナトラ王家の血筋は怪物（かいぶつ）だ」

二二ムは思考を中断して眉（まゆ）をひそめた。

「レヴァン様、さすがに怪物という表現は如何（いかが）なものかと」

「――いいや、これで正しい」

意外にも、強い口調でレヴァンは言い切った。

同時にレヴァンは足を止める。遅れて二二ムも

止まって振り向くと、彼はどこか遠くを見つめていた。

「ナトラ王国が建国されておよそ二百年。陛下は十四代目の国王であり、ウェイン殿下と同じように若かりし頃から英邁（えいまい）であられた。……だが、本来は有り得ないのだ。これほど代を重ねた王家が未（いま）だに権威と理性を保って国政を担っているなど」

「それは……」

確かに大陸の歴史を紐解（ひもと）いても、ナトラ王国ほど続いている国はそう多くない。まして才気の多寡（たか）こそあれ、代々の王がきちんと政治に参加し国を率いてきたとなれば、数えるほどであろう。

多くの場合、王朝が長く続くほどに王は政治に興味をなくし、快と悦に沈んでいく。そして次第に権威は薄れ、権力を奪われ、果ては滅亡という名の獣に国ごと噛み砕かれるのだ。

「権力は容易に人を堕落させる。血と汗を滲ませて国を興した初代ならばその誘惑に耐えうるだろう。国が未熟な二代目、三代目も自らを律しうるかもしれん。だが、それ以降は難関だ。国が盤石になれば過去の痛みは歴史になり、血と汗の跡は拭いさられる。残るのは辛苦も痛痒もなく権力を受け継ぐ王侯貴族達だ」

レヴァンは重苦しくため息を吐く。

「自ら摑み取ったものならばいざ知らず、幼い頃から当然のものとして与えられてどうして扱いを自制できる。さらに自我も情緒も定まらぬ時期から、子孫であるというだけで汝は特別である、汝は貴種であると呪いのように囁かれ続ける日常だ」

「歪むのは当然と？」

「そうだ。誤解を恐れずに言うのならばな、王族として人間である以上、歪むのが真っ当なのだ。あらゆる贅を許す権力を与えられて、なお堕落せずにいられる方こそ異常なのだよ」

ゆえに怪物。

歪まず、奢らず、溺れず、弛まず――当然のご

とく王としての責務を背負うナトラの歴代の王を、レヴァンはそう評したのだ。

「思えば開祖のサレマ王も異端の経歴を持つ御方……やはりその血に受け継がれるものがあるのだろう。我が祖ラーレイがナトラを選んだのはまさに慧眼（けいがん）であった。ナトラを支え続けることでいつか必ず我らが悲願も――」

「レヴァン様」

次第に熱を帯び始めたレヴァンの言葉を二二ムは遮（さえぎ）った。

我に返ったレヴァンは僅（わず）かに咳（せき）ばらいをし、息を整える。

「……ともあれ、話は解った。時間を取らせたな。私は陛下の元に戻る」

国王は現在、病のために宮廷の離れで療養しており、その離れの管理はレヴァンに一任されている。そのため最近の彼が宮廷の方に顔を出すことは稀（まれ）だ。

「お忙しいことは解っているが、ウェイン殿下にも近いうちに見舞いに来るよう伝えておいてくれ。フラーニャ殿下には毎日のように足を運んで頂けるが、たまには息子の顔も見たいと陛下は望まれておいでだ」

「承りました」

「ではな」
レヴァンは踵を返して離れへと向かって行った。
その後姿を見送った後、ニニムは嘆息（たんそく）を一つ。
「話、終わったな」
「うひゃあっ!?」
突然すぐ後ろから発した声に、ニニムは文字通り飛びあがった。
慌てて振り向いた彼女の目に映ったのは一人の少年だ。ニニムと同年代か、あるいはその少し下か。
どこか影の薄い面立ちだが、彼もまた白い髪に赤い瞳――すなわちフラム人であった。
「油断しすぎだ、ニニム。ウェインの護衛でもあ

るんだろ」

「……相手が貴方(あなた)じゃなければ気づいてたわ」

ニニムは乱れた呼吸を整えながら少年に言った。

「それよりナナキ、人が往来する場所で殿下のことを呼び捨てにするのをやめなさい」

「この辺りにいるのは俺たちだけだぞ」

「その慢心(まんしん)が失言(しっげん)を産むのよ」

「相変わらずニニムは面倒くさいな」

「貴方ね……まあいいわ」

このままでは話が進まないと考えたニニムは、若干頬をひきつらせながらも感情を封殺した。

「それより、私に何か用？　レヴァン様の前では

言えないこと？」

「いや、あいつが居る時に出なかったのはあいつが苦手なだけだ」

「……それじゃ、本題は？」

「フラーニャに会って欲しい」

「フラーニャ殿下に？」

ニニムは眼を瞬(しばたた)かせた。

フラーニャ・エルク・アルバレスト。ナトラ王国の王女である。

ウェインよりも二つほど年下であり、明るく心優しい彼女は王宮の誰しもから愛されている。

そしてこのナナキ・ラーレイこそが、彼女の護

衛として選抜されたフラム人だった。

「そういえば忙しくてしばらくお会いしてないわね……私を呼ぶように殿下が仰(おっしゃ)ったの？」

「いや、フラーニャがニニムを呼んだわけじゃない」

ナナキは首を横に振って言った。

「どうしてか知らないけど、最近フラーニャが落ち込んでるんだ。そしたら、ホリィがニニムと会わせると良いって」

ホリィというのは普段からフラーニャの世話をしている侍従だ。ナナキと違い、人の機微(きび)を感じ取ることに長けている。

その彼女が自分を呼ぶ理由をニニムはしばし考えて、あっ、と気が付いた。

「……なるほど、そういうことね」

それからナナキを見やる。

「フラーニャ殿下は今どこに？」

「今は私室で勉強している時間だ」

「それじゃあすぐに向かいましょう」

ニニムはナナキを伴って、フラーニャの私室へ向かった。

「大陸東南のヴェイユ湖周辺は、気候に恵まれた

肥沃（ひよく）な土地であり、古くからこの地を巡る争いが絶えませんでした」

しわがれた声が、滔々と室内に響く。

「六十年ほど前にこの争いに終止符を打ち、武力で一帯を平定した国ができました。それがアースワルド帝国になります」

声の主（あるじ）は老境の男性だ。名をクラディオス。元は大陸西部出身の法学者であり、幼いウェインの教師を務めたこともある賢人である。

若い頃より有能かつ公明正大で知られていたが、悪（あ）しと断ずれば王侯貴族であっても物怖（ものお）じせず批判することから、有力者に招かれては勘気（かんき）に触れて追放されるのを繰り返す

半生を送った。

その過程で刺客を放たれたことは一度や二度ではないが、彼は頭だけでなく剣の腕も一流であり、ことごとくを返(かえ)り討(う)ちにし続けた果てにナトラにたどり着く。

そしてナトラの水が合ったのが、あるいは歳(とし)を経てさすがに思うところがあったのか、誰であっても真正面から食って掛かる姿勢は鳴りを潜めるようになり、以後は有力者の子息の教師役として過ごすようになったという経歴を持つ。

「しかし武力による平定は多くの血を流し、禍根(かこん)を残しました。平定した国や部族に付け入る隙(すき)を

与えないために、帝国は強い国であることを内外に示し続けることを選び、武力によるさらなる拡大の道を辿ることになります」

そんなクラディオスの講義を受けている一人の少女。

まだ顔立ちに幼さが多く残る彼女がフラーニャだ。ナトラ王国の中興の祖たるエルクラッド王の名を字に与えられた、ナトラ王国王女である。

「帝国に吸収された国は大小様々です。代表的なところではバーノク、コドラフィ、トッドレラン、ファートなどがそうですね。それとナトラの東の国境に面しているガイラン州ですが、ここも元

はアントガダル王国という名の国でした。ただしこの国は他と違い君主自ら帝国に臣従を申し出て――」

そこで淀(よど)みなく続いていたクラディオスは言葉が止まる。

次に、小さな嘆息(たんそく)と共に刺すような声音が放たれた。

「フラーニャ殿下っ」

「ふあいっ!?」

ガタンと机を鳴らしてフラーニャは慌てて顔を上げ、さもきちんと聴いていましたという体(てい)で前を見る。だがそういった取り繕い方は、クラディ

オスからしてみれば何百何千回と見てきたものだ。
「どうやら、本日はお気持ちが別のものに向かっているようですね」
「あう……ごめんなさい」
ここで更なる言い逃れをせず謝れる辺りが、彼女の心根（こころね）の素直さを示していよう。しかし王族の教育者として、ここは苦言（くげん）を重ねる場面だ。
「殿下、王侯貴族というのはその所作（しょさ）や言動の多くに政治的な意味合いを宿すものです。容易に謝罪してはならないとは既にお教えしましたね？」
「あ、ごめっ……んん、も、もちろん覚えてるわ」
「結構です。……本来はこのような場面で気にす

る必要はありません。ですが公私の区別をつけられるようになるまでは、私的な場面でも気を引き締めて自分を慣らすのが一番ですので」

「解ってるわ。ありがとうクラディオス」

少女の感謝の言葉に老人は小さく微笑んだ。

「ともあれ、今日の授業はこれまでにしておきましょう」

「え、でも……」

「身が入らないまま受ける勉学ほど無為なものはありません。学ぶ時間が減ることを憂う気持ちがあるのならば、次の時間までにお抱えしているお悩みを解消しておくのがよろしいかと」

クラディオスの眼がフラーニャの背後に向かう。

「ちょうど、私よりも相応(ふさわ)しい導き手が到着したようですね」

フラーニャが振り向くと、出入り口の扉の前にニニムの姿があった。

「後は補佐官殿にお任せしましょう。フラーニャ殿下、それではまた」

クラディオスは広げていた教材を纏めると、それを持って部屋を辞した。

ニニムはフラーニャに歩み寄り、彼女の傍で膝(ひざ)を突いた。

「フラーニャ殿下のお心に影が差していると耳に

して、遅ればせながら参上致しました」
「ニニム……あのね」
「解っております。ウェイン殿下の縁談の件ですね？」
「……」
ニニムの指摘にフラーニャは小さく頷いた。
やはり、とニニムは内心で合点（がてん）する。フラーニャがウェインを敬愛していることは周知の事実だ。以前ウェインが帝国に留学する際にもフラーニャは深く落ち込んだことがある。
今回も、ウェインが結婚するということで、兄が遠くへ行ってしまうかもしれないと不安になっ

てしまったのだろう。

「御心配には及びませんよ、フラーニャ殿下。たとえウェイン殿下がご結婚なされたとしても、この国から出ていくということはありえません。あの御方はナトラ王国の王太子であられるのですから」

そこまで言ってから、ニニムはフラーニャの反応が鈍いことに気づく。

「フラーニャ殿下？」

「お兄様は結婚してもこの国にいる。それは解ってるの。……でもね、そうだとしても、きっとこれまで通りじゃいられないわ」

フラーニャの声は、絞り出すかのようだった。

「お父様が病気になって、お兄様が摂政になったと思ったら、今度はお兄様が結婚するかもしれなくなって……」

フラーニャは自分の手元に目を落とす。その瞳に映るのは何も掴んでいない小さな両手だ。

「周りがどんどん変わっていくのを感じるの。なのに、私だけが取り残されてるみたいで」

「……」

フラーニャが感じているものは決して被害妄想などではない。

ナトラは今、ウェインを中心として変革の時を

迎えようとしている。そのことに寂寥や不安を抱いている者は、きっとフラーニャだけではないだろう。

そんな彼女にかけるべき言葉は理ではない。ニムは言葉を自らの心に求め、言った。

「フラーニャ殿下が感じておられるように、確かに我が国は今、大きな変化の最中にあります。私とて、気を抜けばこの激流の中で溺れてしまうかもしれません」

ニムはフラーニャの手に自らの手を重ねた。

「ですが全（すべ）てが変わるわけではありません。たとえ周囲がどれほどの変貌をきたそうと、変わらず

に残るものが必ずあります」

「それは、例えば……？」

ニニムはにっこりと微笑んだ。

「ウェイン殿下とフラーニャ殿下が、お互いを大切に思っておられることです」

真正面から断言され、さすがにフラーニャは面映ゆげに頬を染めた。そんな彼女を微笑ましく思いながらニニムは続ける。

「仮に今回の縁談が纏まり、ウェイン殿下が妻帯（さいたい）なされたからといって、フラーニャ殿下を蔑（ないがし）ろにすることなどありえません。フラーニャ殿下がウェイン殿下を敬愛しておられるように、ウェイン殿下もまた

フラーニャ殿下を尊く思っております」
「……」
「フラーニャ殿下は、ウェイン殿下のことを信じられませんか？」
「信じたい、けど少し不安でもあるの……変だと思う？」
「いいえ、何もおかしくはありません。そして解決する方法も明確です」
ニニムはフラーニャの手を取った。
「ウェイン殿下に会いに行きましょう。そこで不安を打ち明け、多くの言葉を交わしましょう。今のフラーニャ殿下に必要なのは、何よりもウェイ

ン殿下とのお時間です」
「……お兄様のご迷惑にならないかしら」
「ウェイン殿下の御言葉をお借りするのならば、妹との会話を迷惑だと思うような兄は生まれる順番を間違えている、ですよ。――さあ」
ニニムに促され、フラーニャはおずおずと立ち上がった。そして恥ずかしそうに、姉に甘える妹のように言った。
「ニニムも一緒に行ってくれる？」
「もちろんです」
ニニムは柔らかく微笑むと、フラーニャと並んで歩きだした。

「――なるほど、話は解った」

執務室を訪れたフラーニャの言葉を、黙って聞いていたウェインは、やがて小さく頷いた。

「すまないなフラーニャ、俺のせいで随分寂(さび)しい思いをさせてしまったようだ」

「そんな、お兄様が謝ることじゃないわ」

ふるふると頭を振るフラーニャ。

その髪を優しく撫でながらウェインは言った。

「しかし、変化に置いていかれそうか」

ウェインは思案する。言葉を並べて一時的に慰(なぐさ)めることは簡単だが、それで解決することではあるまい。必要なのは心を支える柱だ。フラーニャが疎外感(そがいかん)や無力感に潰(つぶ)されないようにするための、柱を立てなくてはならない。

（……もう少し政権を安定させてからにしたかったが、仕方ないか）

ウェインはチラリとニニムを見る。ウェインがやろうとしていることを汲(く)み取った彼女は小さく頷いて同意を示した。

「よし、それならフラーニャ、少し俺の仕事を手伝ってみないか」

「お兄様のお仕事って……つまり、お父様の代役を？」

「そうだ。知っての通り、近く帝国の使節団がナトラを訪れる。彼らが滞在中、俺は応接にかかりきりになるだろう。だがその間、解決すべき他の議題や問題が待っていてくれるわけではない」

むしろ厄介（やっかい）な事柄というのは得てして重なるものだ。それを踏まえれば、ウェインとしては使えるのならば猫の手だろうと用意しておきたい。

「もちろんそうして俺の手が塞（ふさ）がっている間、ニムや家臣たちが代わって仕事をこなしてくれるだろう。だが場合によっては俺の承認や出席が求

められることもあるはずだ」

「それを、私が……？」

「そういうことだ」

ウェインは頷いた。

「言うまでもないが、今のフラーニャに複雑な国政を担う能力はない。ゆえに仕事を任せる場合、傍には信頼のおける重臣を置く。何か承認や発言を求められれば重臣の意見を聞き、それに従ってもらう。有り体に言えばお飾りだ」

しかし、と彼は続ける。

「権威や格式が重要視される場では、王族という飾りがいるだけで十分潤滑剤になりうる。そして

フラーニャ自身にとっても、そういった場所に参加して見聞きすることは大きな経験になるだろう。

どうだ、やってみるか？」

その問いかけは形式的なもので、ウェインは既に如何なる返事が来るかは解っていた。

なぜならば、フラーニャの顔に浮かぶ決然とした意志を目にしたのだから。

「――やるわ。ううん、是非ともやらせて、お兄様」

ウェインは満足げに頷いた。

「よくぞ言った、ではそのつもりで予定を立てるとしよう」

そしてウェインは締めくくるようにして告げた。

「フラーニャ、これだけは言っておこう。この世の中は、強い決意が必ずしも結果を約束してくれるわけではない。だが、前へ踏み出そうとする意思はとても尊いものだ。――兄として、その意思を持つお前のことを誇りに思う」

「――」

フラーニャは一瞬だけ驚いたような顔になり、そして満面の笑みを浮かべた。

◆
◇
◆

宮廷の廊下をニニムとフラーニャが並んで歩く。フラーニャの足取りは軽く、鼻歌さえ出てきそうだ。

「ニニム、聞いた？　お兄様が私のことを誇りに思うって言ってくれたわ」

「はい。私もフラーニャ様の御成長を目(ま)の当(あ)たりに出来たことを嬉(うれ)しく思います」

微笑みながらニニムは応じる。

「ニニム、私頑張るわ！　お兄様の期待を裏切らないよう、とっても頑張る！」

「私も微力ながらお手伝いいたします。ですが今はまだ気を張りすぎませぬように。本番は帝国の

使節団が到着してからですので」
ニニムからの指摘に、フラーニャは少しだけ我に返った。
「そうね、その通りだわ。私の仕事は使節団と帝国の皇女様が来てから――」
そこで不意にフラーニャの声が止まった。
彼女は何事か思案するように数秒ほど黙してから、傍らのニニムに目を向けた。
「……ねえニニム、一つ貴女に聞きたいことがあったの」
「何なりと」
「ニニムはお兄様の結婚のことをどう思ってる

の？」

「……」

来たか、という思いをニニムは抱いた。いつか必ず聞かれるであろうことは、容易に予測できたことだ。フラーニャの心から不安が取り除かれたことで、その問いかけを口にする余裕がうまれたのだろう。

そして端的に賛否を口にするのならば、間違いなく賛成である。

帝国側の思惑が不透明なのは事実。だがそれらを一旦（いったん）横に置いて、ウェインが皇女と結婚したとなれば、帝国とのこれ以上ないほど強い繋（つな）がりに

なり、ナトラ王国の強化に繋がるだろう。

――が、そんな一家臣としての言葉をフラーニャが求めているわけではないことは、考えるまでもない。

「私ね、お兄様はニニムと結婚すると思ってたの」

ニニムが答えを口にする前に、フラーニャは続けた。

「お兄様とニニムはいつも一緒で、仲が良くて、お互いを大事に思っているもの。……だから自然と、お兄様とニニムはいつか結婚するんだなって。それにそうすれば、ニニムは私の義姉（あね）にもなるから、私も嬉しいわ。でも……」

ウェインは皇女との縁談を受けた。
王は跡継ぎのために正妃以外にも女性を抱くものだが、皇女の性格によっては、側室や愛妾を許さない可能性もある。
「……フラーニャ殿下にそこまで慮(おもんぱか)って頂いたことを嬉しく思います」
ニニムは柔らかい声音で応じた上で、しかし、と続けた。
「私がウェイン殿下と結婚することはありません。たとえ今回の件がなくともです」
「それはどうして？」
「ウェイン殿下がナトラ王国王太子、ウェイン・

サレマ・アルバレストであり、私がフラム人のニム・ラーレイであるからです」

フラム人は大陸の西側において被差別人種だ。多くが奴隷（どれい）として扱われ、地域によっては蛇蝎（だかつ）のごとく忌（い）み嫌（きら）われている。西側と隣接しているナトラ王国の王太子がフラム人を妃（きさき）にすれば、大きな反発を招くことだろう。

「もしもウェイン殿下が私を妃とすると仰られることがあれば、私は恐れ多くも殿下を誑（たぶら）かした罰として、自らの首を切らねばなりません」

「そんな……ニムはそれでいいの？」

「はい」

ニニムは迷いなく言い切った。

ここで余計な希望を持たせるような言い方をしてはいけない。そう決意を持って口にしたニニムだったが、フラーニャが今にも泣きそうな顔になるのを見て一瞬にして決意は崩れた。

「あ、いえ、それほどの心持ちでいなくてはいけないという意味で、本当に自裁するというわけではなくてですね」

しどろもどろになりながらニニムは言った。

「その、フラーニャ殿下だけに打ち明けますが、妃になれないことが残念という思いも確かにあります。ですがそれ以上の栄誉を私は既に頂いてい

るのです」

「栄誉……？」

「――あの御方（おかた）の、心臓であること」

ニニムは空いている手を自らの胸元（むなもと）に当てた。

「ウェイン殿下はいずれ必ず妻帯なされます。それは一人かもしれませんし、あるいは二人、三人と娶（めと）るかもしれません。殿下は妃となった女性を愛し、子を作り、その子達もまた愛するでしょう」

ニニムは笑みを浮かべる。気づけば言葉に熱が籠（こも）っていた。

「ですが何人の妻を、何人の子を持とうと……太陽が一つであるように、月が一つであるよう

に、心臓もまた一つのみ。ウェイン殿下がその長き旅路（たびじ）を終える日まで、私だけが殿下の心臓であることを許されているのです」

「……なんだかよく解らないわ」

フラーニャはピンとこないようで、眉根（まゆね）を寄せる。

その反応で我に返ったニニムは、こほん、と咳ばらいをした。

「ま、まあ、夫婦になることが必ずしも男女の関係の完成系ではない、と知っておいて頂ければよいかと。さあ、今日のところはお部屋の方へ戻りましょう」

強引に話を引き戻し、ニニムはフラーニャを引

き連れて足を速めた。

そして時間は、皇女到着の日まで巡ることになる。

◆◇◆

時期はナトラ王国の短い秋が終わりを迎える頃。

早いところでは新雪も降り始め、さらに一か月も経てば、外は一面の銀世界が日常風景となるだろう。

「それじゃ、もう一度説明するわね」

遠からず雪に埋もれる景色を、執務室の窓越しに見つめるウェインの横で、ニニムが言った。

「ロウェルミナ・アースワルド第二皇女。崩御(ほうぎょ)した皇帝には三人の皇子と二人の皇女で計五人の子供がいるわけだけど、その末子(まっし)ね。公式記録によれば年齢は私達と同じ。普段は宮廷の奥にいて滅多に姿を現さず、顔を知らない家臣も少なくないそうよ。ただし本人自体は絶世(ぜっせい)の美少女で、稀(まれ)に夜会などに参加した際には多くの殿方(とのがた)を魅了(みりょう)する」って話」

「まるで人じゃなくて妖精(ようせい)か何かに聞こえるな」

「同感。でも実際に熱をあげてる貴族がいるから、夢幻(ゆめまぼろし)ってわけじゃなさそうよ。有名どころだとルービット伯爵とかアントガダル侯爵の子息がそう

ね」

「どっちもナトラまで噂が届くぐらい筋金入りの放蕩息子じゃんか。そんなのに惚れられるなんて皇女様も大変だな。――ニニム、やっぱこの服窮屈なんだけど」

「我慢しなさい。帝国の皇族を迎えるんだから相応の服装が必要でしょ」

襟元を指でいじるウェインの出で立ちは礼装であった。ニニムの言葉通り、本日到着する予定のロウェルミナ皇女を迎えるための準備である。

「それで、現在帝国は三人の皇子の三つの派閥による跡目争いの最中だけど……調べたところだと、

皇女はその政争から距離を取ってるみたい。だからこそ、今回の皇女の縁談は他の三派にとっても寝耳に水で、だいぶ慌ててるそうよ」

「この縁談は皇子たちの策略じゃない、と。ますます怪しくなってきたな……ちなみにどこかの派閥が止めることはしなかったのか？」

「止めようと画策はしたみたいだけど、止める権限を持つのが皇帝だけなのよね。今は空位となれば限界があるわ」

「それで誰も皇女様の出立を止められず、今日ここに到着するわけだ」

「冬入り前に到着したいからって、向こうからか

なりスケジュールを急（せ）かされたけど、本音は跡目争いが決着して誰かが皇帝になれば動けなくなるからでしょうね」

「皇女の意図がどうあれ、タイミングは今しかなかったってわけか。しかし帝国がまだ落ち着かないとはなぁ……」

皇帝崩御からもう半年近く経つ。だというのに、未だ次の皇帝が決まっていないことには、さすがのウェインも驚きである。外国人のウェインがそう思うのだから、帝国領の民心はさぞ焦（あせ）りと不安で一杯だろう。

「派閥の力が絶妙に拮抗（きっこう）しちゃってるのよね。従

属して属州となった地域も、三皇子をバラバラに支持してるし」

「各派閥共に武器の調達も始めてるって話だったな？」

「ええ、このままだと内乱一直線よ。皇子の内の誰かが折れて残るどちらかに付けばすぐにでも決着するでしょうけど、まあ玉座（ぎょくざ）を目前にして背を向けられるわけがないわね」

「他にやれる奴（やつ）がいるなら任せればいいと思うんだけどな」

「そう思えるのはウェインぐらいよ」

そんなものかね、とウェインは肩をすくめる。

「何にせよ、帝国の混迷はまだ続きそうか……」
そうぼやくように口にしたウェインが、ふと苦笑をこぼした。その理由が解らずニニムは小首を傾げる。
「どうかした？」
「いや、となるとさぞかしあいつらも苦労してるだろうな、と思ってな」
「あいつらって……」
「士官学校の三人だよ」
ああ、とニニムは得心する。
ウェインとニニムは二年ほど帝国に留学した際、帝国の士官学校に身分を偽って通っていた。

父王が病に倒れたことで卒業間近で退学してナトラに戻ることになったが、当然そこでも知己（ちき）を得ており、中でも毎日のように一緒に過ごしていた人物が三人いる。

それぞれの名を、グレン、ストラング、ロワという。

「順当に行ってればグレンは帝国軍入り、ストラングは故郷の属州に戻って官僚として働いてるはずだから……そうね、どちらも帝国の跡目争いがどうなるかで気が気でないでしょうね」

「じゃあロワはどうだ？」

「あの子も貴族なんだから当然……と言いたいけ

ど、出身が田舎（いなか）の下級貴族で卒業したら家に戻るって話だったし、三人の中じゃ一番無縁かもしれないわね」

そこでニニムはくすりと笑った。

「案外、帝国の事情なんてそっちのけで、ウェインと同じように縁談とかで右往左往（うおうさおう）してるんじゃない？」

「ロワに縁談～？　あんな面倒くさい奴を嫁に欲しがる男なんているのかよ」

「あれでも学校じゃ結構人気者だったのよ？　かなりの美人だし、あの子は周囲に本性を隠すのが上手かったもの。ま、いつも問題児達（わたしたち）と行動を共

にしてたから、近づこうとする人はいなかったけれど」

「その防波堤が無くなった今、男たちはホイホイ騙される、と。見る目がないのは自業自得だが、あいつを嫁にする男には同情したくなるな」

ウェインの言い草にニニムは嘆息する。

「またそんな憎まれ口を言って……私から言わせてもらうと、貴方とロワって結構似た者同士よ？」

「俺とロワが似てる？　どの辺がだよ」

「猫被るのが得意なところ、自分が一番だと思ってるところ、びっくりするような行動を取るところ、自分のやることに他人を巻き込むところ、それに」

「ちょっと待て、つまりニニムは俺が猫被るのが得意で他人を巻き込みたがる大胆自信過剰野郎だと思ってるってことか？」

「何一つとして間違っていないと思うけど？」

「そんなことは……あー……」

ウェインは自分の行いを脳裏で振り返った。

無い、と言い切る言葉は口から出てこなかった。

その時、執務室の扉が叩かれた。現れたのは王宮で働く官吏だ。

「殿下、ロウェルミナ皇女の使節団が帝国よりご到着しました」

ウェインとニニムは眼を見合わせた。

「いよいよだな」
「はい。参りましょう、殿下」
ウェインは二ムを伴って部屋を出た。
向かう先は宮殿の玄関口だ。耳をすませば、遠くからざわめきが感じられる。
やがて二人は玄関口に到着する。大きな広間となっているその空間に、ずらりと並ぶ見慣れない一堂。帝国の使節団である。
その中心に立つのは、ドレスを纏い、薄布（ヴェール）で顔を隠した一人の少女だ。
「――遠路はるばる、ナトラ王国へようこそ参られた」

広間に踏み入り、声をあげると同時に、使節団の視線がウェインに向かった。

警戒や値踏み、中には若輩（じゃくはい）と侮（あなど）る眼差（まなざ）しもある。

それら混ざりあい、圧力となってウェインに突き刺さる。凡人（ぼんじん）ならば気後（きおく）れしてしまうだろう。

しかしウェインは重圧をそよ風のごとく受け流しながら、ゆっくりとした足取りで中心の少女の前に立った。

「病床の父に代わってご挨拶（あいさつ）申し上げる。私がこの国で摂政を務めているウェイン・サレマ・アルバレストである」

「……ロウェルミナ・アースワルドです」

凛(りん)とした声音(こわね)が少女から発せられた。

玉(ぎょく)を転がすようなとは、まさに彼女の声のことを言うのだろう。固唾(かたず)を飲んで見守っている周囲の官吏たちも、思わず感嘆の吐息(といき)を漏(も)らすほどだ。

だが。

（……うん？）

目の前でその声を浴びたウェインは、全く別の反応をした。

いや、美しい声であることは間違いない。しかしそれはそれとしてーーなんだか、聞き覚えがあるような。

「どうかなさいましたか？　ウェイン殿下」

「ああいや、失礼を。あまりに美しいお声に心が彼方へ飛んでしまったようだ。……しかし不思議と聞き覚えがある。もしやどこかでお会いしたことが？」

言いつつも、皇女と会った記憶など記憶の棚をひっくり返しても出てこない。

恐らくは勘違いで、当然彼女の方も否定（ひてい）する――そのはずだった。

「――あら、意外と早く気づかれましたね」

「えっ？」

間抜けな声を漏らすウェインの前で、皇女は薄布（ヴェール）を取る。

露(あら)わになったのは美しい少女の顔だ。

その顔に、ウェインと彼の背後に控えるニニムは見覚えがあった。

「お久しぶりですね、ウェイン」

ウェインにだけ聞こえる声で囁くと、ロウェルミナ・アースワルドことロワ・フェルビスは、にっこりと微笑んだ。

◆第三章◆

「ぬあああああ！　なぜだ!?　なぜ勝てん!?」

開かれた教室に叫び声が響く。

そこにいるのは三人の少年と一人の少女だ。

四人は一つの大きな机を囲んでおり、その机には地形を表す記号が描かれ、兵士を模(も)したいくつもの駒(こま)が置かれていた。これらは机上(きじょう)で軍事演習を行うための教材である。

「これで三十二戦三十二敗……誇りある帝国軍人の系譜を継ぐ俺(おれ)が、まさかこのような醜態(しゅうたい)をおお

おおおお……！」

先ほどから喚いているのは四人の中でも一際大柄な少年で、名をグレンという。

「ダメだよグレン、さっきから同じ方法で絡められてばかりじゃないか」

嘆息しながら声をかけるのは、グレンとは正反対の線の細い少年――ストラング。

「力押しで負けたのなら、別の戦い方を考えなくちゃ。自分のやり方を貫くといえば聞こえはいいけど、そこに進歩がないのなら怠慢と同じさ。まして、君の拘りに付き合って死ぬのは何千何万の兵士だよ」

「ええい、解っている！　俺を仲間の命すら数えられぬ獣と笑うのかストラング！」
「いや、獣だって三十回も失敗すれば学習するから、今の君はそれ以下だね」
二人の会話を聞いていた三人目の少年――ウェインが噴き出した。
「ははっ、ボロクソだなグレン。ご自慢の血脈は飾りだったか？」
「ウェイン貴様ぁ！　俺はともかく我が一族を侮辱するのは許さんぞ！」
「おいおい、一番泥を塗ってる自分を差し置いて俺に八つ当たりはよくないぜ」

「ぬぐっ……おのれ、俺を辱(はずかし)めるのがそんなに楽しいのか！」

「超楽しいな！」

「貴様という奴(やつ)はあああああ！」

三人の少年たちが織(お)り成(な)す喧騒(けんそう)。それを一歩離れたところから、ニニムが微笑みながら眺めている。それが帝国士官学校におけるこの四人の日常的な光景だった。

「かくなる上は決闘だ！　ウェイン、表に出ろ！」

「えぇー、机上演習じゃ勝てないからお得意の実戦でぶちのめすって、軍人の誇り的にどうかと思うんですけどぉー？」

するとストラングが口を挟む。
「いやいやウェイン、自分の不得意な戦いを回避して、得意な戦いで相手を打倒するのは戦術の基本だよ。それに誇りというのは勝利の上にしか芽生えないものさ」
「お、そうくるか。だが、これが戦術っていうのなら、俺が素直に応じる義理はないわけだが？」
「確かにその通りだね」
ストラングは頷（うなず）き、大げさに頭を振った。
「まあ相手がグレンじゃ、ウェインがビビる気持ちも解るよ」
「は？」

「なにせほとんどの科目でトップの成績を持つ君が、初めて土をつけられた相手なわけだしね」

「はぁ？」

「いや仕方ない仕方ない、自分の不得意を回避して負けないようにするのが戦術だものね」

「はぁーん!?」

ウェインは叫んだ。

「なに言ってんだこの野郎！　俺がビビるわけねーだろ！　俺がビビってるってどこ情報だよ！　グレンなんて今の俺なら一発でぶちのめせるわ！」

「ほざいたなウェイン！　貴様のナマクラ剣術など百年かかっても俺に届かんわ！」

「届きますぅー！　前はちょっと油断しただけで本気出せば超余裕ですぅー！」

「ウェイン」

その時、静かに見守っていたニニムが声を投げた。

「なんだよニニム、まさかどうせ負けるから辞めろなんて言わないだろうな？」

「負けて鼻っ柱が折れてくれた方がありがたいから、その理由で止めることはないわね」

「じゃあどうしたんだよ？」

「後ろ」

ニニムに指で示され、ウェイン達はその方角へ目を向ける。

すると教室の入り口近くに、一人の少女が立っていた。

見覚えはあった。自分たちと同じ学校の生徒だ。しかし関(かか)わりはなかった。それはこの場にいた全員に共通することだ。

「何か用か？」

全員の疑問をウェインが代弁して問いかける。

少女は皆の視線を受け止めながら答えた。

「貴方(あなた)たちに興味があるので、見学しても構いませんか？」

ウェインたちは顔を見合わせた。

「見学たって、別に興味を引くようなものはない

と思うけどな」

「そんなことはありません」

少女は軽(かろ)やかな足取りでウェインの前に立った。

「学校きっての問題児の集まりという噂(うわさ)は伊達(だて)ではありませんね。今のやり取りだけでも、貴方たちがとても面白(おもしろ)い人たちだと解りましたよ」

「面白い、ね」

ウェインは唇(くちびる)をゆがめた。

「初対面の人間を面白いなんて評価する奴は、性格が腐ってるクソ野郎か、自分が格上だと勘違いした馬鹿(ばか)野郎のどっちかだと思うんだが、あんたはどう思う？」

ウェインの口撃を受けて、しかし少女は怯(ひる)むどころか微笑んだ。

「全くもって同意します。ただし付け加えるのなら、本当に格上の場合がありますけれど」

「……なるほど。あんた、面白いな」

ウェインはにっと笑い返した。そして手を彼女に差し出す。

「ウェインだ。しがない平民の出さ」

「ロワ・フェルビス。しがない田舎(いなか)貴族の一人娘です」

ウェイン・サレマ・アルバレストとロウェルミナ・アースワルド。

二人の王族の日々は、偽りの立場を挟み、このような形で始まったのだった。

◆◇◆

帝国使節団を持て成すために開かれた晩餐会は、終始和やかな雰囲気で進んだ。

元よりナトラ王国とアースワルド帝国は友好関係にある国であり、国民感情に摩擦は少ない。来訪の目的も王子と皇女の縁談の話し合いという目出度いものだ。余計な騒動を起こすまいとする意識は晩餐会に出席する全員にあった。

もちろんそれだけでなく、ホスト側であるナトラの尽力も大きい。些細な非礼も無いようにと、晩餐会に参加する人員、振る舞う料理、果ては食器やテーブルクロスのデザインまで、短い時間と少ない予算を駆使して準備したのである。

特に料理に関しては、ウェインとニニムの意見が大きく取り入れられていた。

「驚きました。まさかこの地で帝国の料理を食べられるなんて」

主賓の席に座り、そう微笑むのはロウェルミナ皇女。

応じるのは対面に座るウェインである。

「長旅に疲れると、故郷の味が恋しくなるもので しょう。今宵(こよい)に限って言えば、ナトラの料理よりも食べ慣れた帝国料理がロウェルミナ皇女の口に合うと思ったのですよ」

「お心遣い、感謝いたしますウェイン王子」

こうしてトップ同士が仲睦(なかむつ)まじげに言葉を交わしているのも、晩餐会の空気を和らげている一因だ。

おかげで周囲の席でも話は大いに弾んでいた。

「いや噂には聞いていましたが、ロウェルミナ皇女は真にお美しいですな」

「それを言うのならば、ウェイン王子も噂通りに闊達(かったつ)な御方ですよ。国王陛下の名代としての見事

な振る舞いには感服いたします」

「お二人も話が合うご様子。縁談が纏まればさぞお似合いの夫婦となられるでしょうな」

「然り。……それはそうと、我らの疲労を気遣っての帝国料理、見事な味わいではありますが少し残念でもあります。異国の食事を楽しみにしていたのですが」

「おお、ご安心を。そう仰る方もおられると思って、ナトラの郷土料理も用意しておりますとも。すぐに持ってこさせましょう」

このような調子で、晩餐会は順調である。

ただし、それらはあくまでも表向きの話だ。

（さーて、どうしたもんかな）

ロウェルミナと言葉を交わしながら、ウェインは思慮を巡らせる。

思い出すのは、晩餐会に至る前のことである。

「千%（せんパー）罠（わな）じゃんかよおおおおおおおお！」

執務室の椅子（いす）に深く腰掛け、世界の終わりが近いことを感じ取ったかのような表情で、ウェインは慟哭（どうこく）した。

「今の状況、全部夢オチってことでどうにかなりませんかね二二ムさん!?」

「ならないわね」

「ならないよなあああああああ！」

ウェインは頭を抱えたまま机に突っ伏した。

横で二ムも難しい顔をする。

「まさかロワが皇女様だったなんてね……あのメンバーの背後関係は調べていたけど、偽装された情報を掴まされたのは私の失態だわ」

突然の再会から後、ウェインは平静を装いながらロウェルミナ皇女を筆頭とした使節団を王宮に受け入れた。現在彼女らは用意しておいた部屋に通され、そこでひとまず休息を得ているところだ。

そしてこの後に、交流のための晩餐会を予定し

ており、そこで改めてウェインがロウェルミナ皇女を歓待する手はずとなっている。

なっているのだが。

「なぁーにが田舎貴族出身だよ！　帝国最高の血筋じゃねーか！　高貴な血だっていうんなら隠さず普通に学校通えっつーの！」

「ウェイン、自分にも刺さってるわよその言葉」

ニニムが冷静に横やりを入れるも、気にせずウェインはうめき声をあげる。

「どうしてこうなった……俺はただ帝国の皇女様と縁談を纏めて悠々自適の生活を送りたかっただけなのに……」

「そこについてはまだ不可能じゃないでしょ。皇女が縁談のためにナトラを訪れたのは変わらないわけだもの。――ただ皇女の正体がロワというだけで」

「その正体がロワってのが一番の問題なんですがね！」

ウェインの叫びは切実だった。

「ニニムだって覚えてるだろ。ロワが士官学校で俺たちのグループに入ってから、どんなに危ない橋を渡ることになったか」

「さすがに忘れようもないわよ。村人を動員して山賊討伐（とうばつ）、汚職まみれの官僚の弾劾。悪徳商人の

密輸品を強奪（ごうだつ）して売りさばく……思えば色々したものね」

「ほとんどがロワの企画でな！」

仲間になって以来、ロワは介入できそうな問題を見つけては、ウェインたちに提示していた。当時はどういう経緯で見つけてくるのか不思議だったが、今にして思えば皇女としての立場を利用して各地の情報収集などを行っていたのだろう。

「どう考えても危ないってのに、グレンとストラングなんかも簡単に乗せられるしさ！　おかげで何度退学になりかけたか」

「ちなみに一番ノリノリで加わってたのはウェイ

ンだけど」

「……」

ウェインは眼を逸らした。

ニニムは両手で彼の顔を摑み、自分に目を向けさせた。

「いやだってほら、いけ好かない貴族の持ってる絵を全部贋作にすり替えて大恥かかせようとか提案されたらさ！　面白そうすぎるじゃん！　やるわ！」

「そして毎度後始末に私が苦労させられたのよね。思いだしたら腹が立ってきたわ」

「よし、話を戻そう」

ウェインは強引（ごういん）に切り替えた。

「ともかく、ともかくだ。ロワは呼吸をするように悪だくみをする人間だ。普通に結婚するつもりでここに来るわけがない。必ず何か企（たくら）んでる」

「その点について異論はないわ。ウェインの仮説が正しかったわけね」

ニニムはウェインの頬（ほお）を引っ張りながら言った。

「現状を整理すると、新しく解ったことは相手がロワってだけで、依然として目的は不透明なままよ。探りを入れて、向こうの思惑を少しでも摑む必要があるわね」

「使節団が逗留する期間はどれぐらいだっけ？」

「三週間を予定してるわ」
「この微妙な長さ、絶対なんか仕掛けてくるわ……」
うんざりとするウェイン。
ニニムも深い思慮を横顔に滲(にじ)ませながら言った。
「何かしら思惑があってのことでしょうね。ウェインがホストとして持て成すイベントは結構あるから、接触することは難しくないはずよ」
「ロワの腹の内を探ることは、天地をひっくり返すより難しそうだけどな……」
「少し先の未来では、料理で一杯になってることは間違いないでしょうけどね」

「それで□の滑りが良くなることを期待するか」
ニニムは肩をすくめた。
「失言は期待するものではなく引き出すものよ。さ、そろそろ時間ね」
ウェインは頷き、ニニムと共に会場に向かうべく立ち上がった。

そして今、こうして□ウェルミナの前に座っていわけである。
（とにかくこっちから仕掛けるしかないよな）
□ウェルミナの態度からして、少なくとも公式

の場面では士官学校のノリは出さない方針だろう。ウェインとしてもそこに不満はない。ゆえに、王太子として切りこんだ。

「時にロウェルミナ皇女、此度（こたび）の来訪は皇女の発案で？」

「ええ。嫁入り前の皇族が非常識なと笑われるかもしれませんが、ウェイン王子に直（じか）にお会いしてみたかったのです」

「笑うなどとんでもない。貴女のような美しい人と言葉を交わせることは、一人の男として光栄の極（きわ）みです。……しかし、恥ずかしながら私は所詮（しょせん）辺境の王族。どうして直に会いたいなどと？」

「まあ。それは謙遜（けんそん）というものですよウェイン王子」

ロウェルミナは微笑を湛えながら言った。

「病床のお父上に代わって国を率いて、ついこの間はマーデン国との戦いでも勝利した王子の勇名は、遥（はる）か帝都にまで届いていますもの。一人の皇族として、一人の女として、そのような王子様がいると聞けば興味を抱くものです」

「となれば、ロウェルミナ皇女に失望されていないか気になるところですね。どうでしょう、私は帝国で評判通りの男でしょうか？」

「そうですね……評判通りとはいかないかも

しれません」

ロウェルミナは悪戯(いたずら)っぽく言った。

「私の目には、評判よりもずっと素敵な御方に映っていますから」

「これはこれは、一本取られましたね」

ウェインは照れを苦笑で誤魔化(ごまか)す。その仕草がまたロウェルミナの淡い微笑を引き出した。

「お兄様たちからは止められましたが、やはりこうしてウェイン王子の元を訪れて正解でした」

「ああ、やはり周囲からは反対を？」

「それはもう。ですがウェイン王子がお妃を探していると聞いたので、いてもたってもいられず

……実を言うと、ついてきてくれた使節団の大半はお兄様たちが貸してくれた者たちなのです。本当はもっと少ない人数で十分だと言ったのですけれど、危ないから連れて行くようにと強く言われてしまって。過保護だと思いませんか？」

ウェインは困ったように答えた。

「残念ですが私も妹を持つ一人の兄として、ここは皇子の肩を持たざるをえませんね」

「そういえばウェイン王子にも妹君がいらっしゃいましたね」

「自慢の妹ですよ。明日にでも紹介しましょう」

そう口にしながらウェインはロウェルミナの言

葉を脳裏(のうり)で反芻(はんすう)する。

今回の件を端的に纏めるのならば、彼女の暴走が全(すべ)ての原因というところに帰結する、

ロウェルミナの持つ異国の王子への憧(あこが)れが、思春期特有の衝動と皇女という立場とで絡み合(あ)い、ついには外遊という名目で、使節団を連れて押しかけるにまで至らせてしまったのだ。

（――というカバーストーリーで押し通すわけだ）

当然ながら、ウェインは彼女の言葉を一ミリ足りとも信じていなかった。

ただし唯一、使節団の大半が皇子達の部下という点は別だ。皇族とはいえ女子で末子ともなれば、

自分の手駒（てごま）は少ないだろう。

（そして、それをあえて口にしたってことは……）

ウェインが思考を巡らせている内にも二人の会話は進む。

「それにしてもナトラの冬は聞きしに勝る寒さですね」

「さぞ驚かれたでしょう。なにせナトラにあって帝国にないものといえば、険しい山と厳しい冬ぐらいなものですから。とはいえ、まだ冬の入り口ではありますが」

「あの寒さで、ですか？」

「風で折れた木の影が、凍り付いて動かなかった

とまで言われるのがナトラの真冬ですよ」

さすがのロウェルミナもこれには困ったような顔になった。

その表情を見て、ウェインの脳裏に浮かぶものがあった。

「そうだ、よろしければナトラの衣装をお贈りしますよ。帝国のものは丈夫な作りで意匠も見事ですが、この地の寒さでは少々心許（こころもと）ないでしょう」

「お心遣いありがとうございます。仰る通り持ち込んだ衣服では肌寒さが抑えられず、難儀していたところですので」

そう口にしてから、一転してロウェルミナは悪

戯っぽく片目を閉じた。

「もちろん、ウェイン王子の眼で私に似合う衣服を選んで頂けるのですよね？」

「おっと、そう問われては男として否(いな)とは言えませんね。これは気合を入れる必要がありそうだ」

「ふふ。期待してお待ちしています」

それから二人は取り留めのない会話を交わし続けた。

晩餐会がウェインの挨拶(あいさつ)とともに締めくくられたのは、夜も更けた頃合(ころあい)いだった。

◆
◇
◆

国外の賓客を持て成すのが目的なだけに、ロウエルミナにあてがわれた貴賓室は、帝国皇女である彼女の眼で以(もっ)てしても「見事」と感じる完成度だった。

決して煌びやかではない。しかし掃除は隅々まで行き届き、飾られている美術品は品位のある年代物だ。窓から差し込む星明りは淡く幻想的で、外を覗(のぞ)けば揺らめく焚火(たきび)が点々と夜闇(やみ)を彩(いろど)っている。

滞在中、この部屋で過ごす時間は静かだが心地よいものとなるだろう。ロウエルミナがそう考え

ていると、扉がノックされた。どうぞ、と返事をすると現れたのは近侍の一人だ。

「お休みのところ失礼します。今しがたウェイン王子の名でロウェルミナ殿下にお届け物が」

そう言って近習は扉の外に置かれた箱を示した。人が入れるような大きさで、それが三つある。

「確認したところ中身は衣装のようです」

「ああ、もう届きましたか。部屋の中に運んでください」

「かしこまりました」

近侍が他(ほか)の従者を呼び、箱を部屋に運び入れる。

「何着か試しにお召し替えいたしますか？」

「いえ、それは明日でいいでしょう。今は下がってください」

「はっ」

人払いをすませ、再びロウェルミナは部屋に一人になる。

しかし彼女は口を閉じることなく、運び込まれた衣装箱に向かって言った。

「――さて、出てきて構いませんよ」

がたん、と衣装箱が揺れた。

そして独りでに箱の蓋（ふた）が内部より持ち上げられた。

「ぷはっ」

何着もの衣服を押しのけて、箱の中から現れたのは一人の少年――ウェインだった。

「せっかく驚かそうと思ったのに、なーんでバレるかな」

次いで、もう一つ衣装箱の蓋が持ちあがる。そこにはニニムの姿があった。

「こんな露骨なの、バレるに決まってるでしょ」

「それなら次はロープを使って窓から侵入ルートで行くか」

「じゃあ私はロープを切る係をするわ」

「ちょっとニニムさん殺意高くない？」

ウェインとニニムが言葉を交わしていると、そ

ここに混ざるようにしてロウェルミナの笑い声が届いた。

「ふふ。そのやり取り、まるで学校に通っていた頃のようですね」

「なんてことだ、ロウェルミナ皇女に笑われてしまったぞ二二ム」

「道化を演じるだけで皇女殿下の笑顔を得られるのであれば、安い買い物かと臣は愚考いたします」

「なるほど、一理ある」

一層ロウェルミナの笑いが深くなった。

そして落ち着きを取り戻した後、ロウェルミナ

の視線がニニムへ向かった。

「ウェインには先に挨拶しましたけど、ニニムにはまだでしたね。お久しぶりですニニム。貴女が変わらずウェインの隣にいることがとても嬉(うれ)しいです」

「そちらも息災なようで何よりよ、ロワ。それともロウェルミナ皇女殿下とお呼びした方がよろしいかしら？」

「そんな水臭い。私達は親友ではありませんか」

ロウェルミナはニニムの両手を握った。

「変わらずロワのままでお願いします」

「じゃあ私的な場所ではそうさせてもらうわね」

ロウェルミナは頷き、改めて二人を見る。
「それにしても、二人とも変わりませんね」
「変わったさ。たとえばそう、俺は身長が伸びて一層イケメンになったし二ムは胸の代わりに体重がちょっと増えた。……待て二ム、拳（こぶし）を降ろせ。今のはちょっとした会話のジャブだ」
「だったら次はストレートの出番よね？」
「……ロワ、ヘルプ！」
「え？　うーん……ウェイン、私はどこか変わりましたか？」
「尻（しり）が大きくなった気がする」
「二ム、全力でやっていいです」

「オーケー」

「あれ!?　俺の巧みな弁舌が通用しない!?」

ウェインが自業自得の危機に陥（おちい）っていると、遠慮がちに部屋の扉が開かれた。

「ロウェルミナ殿下？　何やらお声が――てっ!?」

現れたのは先ほど衣装箱を部屋に持ち込んだ近侍であり、当然ながらウェインとニニムの姿を認めるや否や双眸（そうぼう）が驚きに見開かれる。

しかし驚きの表情をしたのはウェインたちの方もだった。

「ブランデル大使？」

ウェインとの外交交渉に破れたことで解任され

た、前ナトラ駐留大使であるフィシュ・ブランデル。扉の向こう側に立っていた近侍は、まさにその人だった。

「丁度良かった。フィシュ、外で見張りをしておいてください。誰(だれ)か来たら既に私は床に就いたと」

「はっ、いえ、ですが、摂政殿下が」

「フィシュ」

狼狽(ろうばい)するフィシュにロウェルミナは強い声と眼差(まなざ)しを向ける。

フィシュは喉元(のどもと)まで出かかっていた二の句を飲み込み、恭(うやうや)しく頭を垂れた。

「……かしこまりました。扉の前で控えております

すので、何かあればすぐにお声をおかけください」

「ええ、お願いします」

フィシュの姿が扉の向こう側に消え、ロウェルミナはウェインを見た。

「驚きましたか？」

「驚いた」

ウェインは頷いた。

「だがこれで腑(ふ)に落ちた。タルム大使からどうやって皇女のところまで縁談話が上がったのか謎(なぞ)だったが、なるほど、ブランデル大使……元大使経由だったわけか」

「ええ。外交部署から私の傍(そば)に移ってもらいました。

誰かさんのおかげで閑職に追いやられて燻ってたものですから、なんとか口説けましたよ」

「お礼はいつでも受け付けるよ」

「さっきの失言を忘れてあげます」

「わあ嬉しい」

「あ、私は忘れないから」

「わあ悲しい」

ニニムの拳がウェインの頬にめり込んだ。

「さて、このまま話を続ける前に、ひとまず座りましょう」

「そうだな、そうしよう。ニニム」

ニニムは自分たちが入っていなかった三つ目の

衣装箱の元へ行くと、その中を探る。しばらくして出てきたのはワインとワイングラスだった。

「用意がいいですね。銘柄は？」

「貴族の絵画をすり替えた時についでにワインも幾つかすり替えたろ？　その時のあれ」

「……確か運搬中に割れたって言ってませんでした？」

「今夜飲み終わった後に割れば結果は同じだな」

「……そういうところ、本当に変わりませんね」

三人は一つのテーブルを囲んで席に着いた。

それぞれの前にグラスが置かれ、そこにワインが注（そそ）がれる。

「それじゃ、乾杯するか」
「何に対して？」
ウェインはにっと笑った。
「もちろん俺たちの再会にだよ」
涼やかな音色（ねいろ）が部屋に響き渡った。

◆
◇
◆

「しかしロワが皇女様なぁ」
口火を切ったのはウェインだった。
「俺と二ムの身分について最初から知ってたのか？」

「もちろんです」

ロウェルミナは頷いた。

「あくまで表向きは平民というだけで、そこまで徹底して隠蔽されていたわけではありませんからね」

「まあ王太子としても帝国に留学してたわけだしな。動向を調査されてれば当然バレるか。面倒だから名前も同じのまま通ってたし」

もっとも、ウェイン達が国に戻った後、彼が在籍していた記録は抹消されたわけだが、さすがのウェインもそこまでは知る由(よし)もない。

「逆に私の方がバレないかと不安でしたよ。ナトラの諜報

網は深く広いとされていますからね」

むう、とニニムが唸(うな)る。主人の傍に素性を偽った人間がいて、それを暴(あば)くことができなかったのだから、彼女としては痛恨である。

「実は二人が本当の素性を話してくれれば、私も打ち明けようとは思ってたんです。だからー度ニニムに尋ねたことがあるんですよ。貴女達は本当に平民ですか？　って」

「確かに聞かれたことがあるわね」

「ええ。でも返事は『平民よ』でした」

ロウェルミナの顔がニニムに向かった。

「ーねえニニム・ラーレイ、どうして親友の私

に嘘を吐いたの？」

瞬間、心胆まで凍り付くような凄みのある眼差しをロウェルミナは放った。

半端な返事をすれば首を切り落とす――そんな意思が伝わるようだった。

が、ニニムに動揺はない。

「まさか、私は嘘なんて吐いてないわ」

王太子の傍に身を置く者として、その程度の重圧など日常茶飯事だ。

「ただ、間違えただけよ」

ニニムは傲然と言い放った。

「親友の間違いなんだから、許してくれるわよね？

ロウェルミナ・アースワルド皇女殿下」
二人のにらみ合いは数秒続いた。
その後、ロウェルミナが相好を崩した
「もちろんですよニニム。――貴女のそういうところ、本当に大好きです。抱きしめていいですか？」
「私は貴女のその、遊べる相手と見るや絡もうとするところ、どうにかしたた方がいいと思ってるけどね。……あと、返事をする前に抱き付くのやめなさい」
「性分ですので」
むぎゅー、とニニムに抱き付くロウェルミナを

見ながらウェインは肩をすくめた。
「厄介な性格の皇族がいたもんだな」
あんたが言うな、というニニムの視線をウェインはそよ風のように受け流した。
「そうだ、お礼をまだ言っていませんでしたね。私の意図に気づいてそちらから接触してくれて助かりました」
「ああ、晩餐会のあれな」
晩餐会にて彼女が口にした、使節団の多くが兄たちの部下という情報。あれは転じれば常に兄達の監視の目があり、秘密裏に接触することが難しいので、そちらからアクションを仕掛けて欲しい

というものだった。

その意図を汲んだからこそ、ウェインは二重底になっている衣装箱を用意させ、ニニムと共にロウェルミナの部屋に潜入したのである。

「別に礼はいらないさ。ただこうして呼んだからには話してくれるんだろう？　縁談なんて建前を用意してまでナトラに来た、本当の目的を」

「ええ、もちろんです」

ロウェルミナは頷き、言った。

「ウェイン、率直に提案しましょう。――私と一緒に、帝国を奪りませんか？」

深い沈黙が場に満ちた。
三者の視線が複雑に絡み合い、静寂の中で火花を散らす。
やがて口を開いたのはウェインだ。
「それは、三人の皇子たちを押しのけて、ロワが帝位につくってことでいいのか？」
「その通りです」
「……随分と無茶なことを言うな」
「あら、そうでしょうか？」
とぼけたように聞き返すロウェルミナに向かって、ウェインは頭を振る。

「ナトラの国力は知ってるだろ？　逆さにひっくり返しても帝国とやりあう力なんて出てこないぞ」
「確かに帝国が全力を出せば。この国は簡単に消し飛ぶでしょうね」
ですが、とロウェルミナは続けた。
「それも全力を出せたらの話です。アースワルド帝国の内情は聞き及んでいるでしょう？　三人の兄弟が帝位を巡って骨肉の争いを繰り広げ、とても全力を出せる状況ではないと」
「……」
ウェインは答えなかったが、その表情が肯定であることを雄弁に語っていた。

「なぜそうなったのか、順を追ってお話ししましょう。きっかけは、今は亡き我が父にしてアースワルド皇帝陛下が病に倒れたことです」

ロウェルミナは言った。

「意識が混濁し、立ち上がるどころかまともに喋(しゃべ)ることすら覚束(おぼつか)ないような重病でした。当然、政務など以ての外(ほか)。ゆえに代理を立てるのが自然な成り行きなのですが、陛下は後継者を指名していなかったため、宮廷は大いに荒れました」

そこで口を開いたのは二ムだ。

「……前から気になっていたのだけど、後継者を指名しなかった理由は何なの？　噂なら色々耳に

入ってきてるけれど、いまいちどれが本当か解らないのよね」

「そうですね、私も直接訊ねたわけではないので、私見が含まれることを承知した上で聞いてもらいたいのですが……ひとえに、陛下が即位されるまでの経緯にその理由があったのではないかと」

二二ムは首を傾げた。

「というと？」

「陛下には多くの兄弟がいましたが、陛下の継承順位は決して高いものではありませんでした。しかし帝位を望まれた陛下は、先帝に自らの能力を示し、見事後継者として指名されたわけです。そ

して陛下は常々、苦境があってこそ人は自らを高められると仰られていました」

するとウェインが鼻を鳴らした。

「なるほどな。要は自分の成功体験が忘れられず、息子にも押し付けたってことか」

「有り体に言えばそういうことですね」

ロウェルミナは苦笑を浮かべる。

「内心では長男を後継者に、とは思っていたでしょう。だというのに長男は立場に溺(おぼ)れ、何度諫(いさ)められても自らを磨くことをしませんでした。ゆえに陛下は指名を明言しないことで、長男を発奮させようとしていたのかと」

「だがそうなる前に自分が病気でぶっ倒れた」
「ええ。そこで長男が目を覚まし、宮廷を纏め、野心を持つ次男、三男を抑え込めていれば話は違ったのでしょうけれど。実際はここぞとばかりに長男の権力をそぎ落とそうと次男三男は暗躍し、長男は対処に追われて宮廷の掌握などとてもとても」
「でも、その後で皇帝は一度目覚めたのよね？」
ニニムの言葉にロウェルミナは頷く。病に倒れた皇帝が快復しつつあるというのは、ナトラにも届いた情報だ。
「その知らせを聞いて、宮廷はホッと一息吐きましたよ。

陛下の快復もそうですが、どうあれ後継者争いに決着はつくだろうと。事実、私も含めて全ての子息がすぐに陛下に呼ばれました」

ですが、とロウェルミナは頭を振る。

「待っていたのは陛下の叱責でした。陛下はろくに宮廷を纏められない長男にも、暗躍こそすれど未だに兄を追い落とせていない次男と三男にも深い失望を抱いたのです。そして自らが政務に復帰することと、後継者については今は値する人物がいないと宣言されました」

二二ムはため息吐いた。

「馬鹿馬鹿しい話ね。後継者を指名して混乱を収

めるチャンスがあったのに、一時の感情でそれをふいにし、挙句今度こそ病没して三兄弟の争いを本格化させるだなんて……帝国の臣民には同情するわ」

ウェインは肩をすくめる。

「皇帝の気持ちは解らないでもないけどな。急激に拡大した帝国を纏めるには強いリーダーが不可欠だ。なのに諸外国の相手どころか、宮廷内でぐだついてるようじゃ、とても任せられないって思うのも仕方ない。――ま、それはそれとして誰でもいいからさっさと帝位につけよって思うけど」

「ですよね。私もそう思います」

なので、とロウェルミナは手をあげた。
「私がつこうと思うので、協力してくれませんか？
という話に戻るわけです」
「……ニニム」
「帝国法に、皇帝の女児は帝位を継げないとは記載されていないわね。継承権はちゃんとあるわ。けれど現実的には今までの皇帝は全員男性だし、これからもそうであるという意識は根強いでしょうね」
「ええ、私を後押ししてくれる有力者は帝国国内に一人もいません。誰もが三兄弟の内の誰かにすり寄って、私は眼中に無しですよ。おかげでこう

して旧知の貴方たちを訪ねなくてはならないわけです。――最高に面白い状況だと思いませんか？」

「超思う」

「ウェーイーンー」

迷わず頷いたウェインに二ムは尖(とが)った声と視線を突きさした。

「解ってるって。学校にいた頃なら参加してただろうけど、いかんせん今はナトラの王太子だ。それを踏まえると、そう簡単に頷ける提案じゃないな」

「ダメですか？　今なら未来の女帝の夫になれますよ？」

「はっはっは、そりゃ罰ゲームだ痛え！」
蹴り飛ばされた脛をさするウェインをしり目に、ロワは言った。
「まあ、元より一度の話し合いで頷いてもらえるとは思っていません。随分と話し込んでしまいましたし、今日のところはお開きにしましょうか」
「へえ、ということは用意してるのか？　俺を協力させるための手札を」
「もちろん。北の最果てに無手で来るほど私は酔狂ではありませんから」
ウェインはにっと笑った。
「いいね、明日から楽しみにしてるぜロワ」

ロウェルミナは悠然と微笑んだ。
「貴方の度肝を抜いてさしあげますよ、ウェイン」
ニニムはため息混じりに言った。
「やっぱり貴方たちって、結構似た者同士よね……」

◆◇◆

部屋の中の密会が始まってから、どれほど時間が経ただろうか。
扉の前で番をしながら、フィシュ・ブランデルは落ち着きなく体を小刻みに動かす。

ロウェルミナがウェインやニニムと学友同士であったことは、彼女も聞き及んでいる。彼らの関係が非常に良好であったこともだ。

しかしそれはあくまで学生時代のこと。今の彼らはそれぞれ別の立場を背負っている。かつての友情が今も通用するとは限らないのである。彼らが年頃（としごろ）の男女であることも加えると心配はさらに倍だ。

（何か変事を感じればすぐさま飛び込むのよ……）

フィシュは自らにそう言い聞かせる。もちろんフィシュは元々は外交官で、ハッキリ言って武芸の心得は全くない。ロウェルミナの近侍になるに

あたって、護衛としての役目もあるだろうと護身術の一つでも習おうとしたが、収穫といえば自らの運動神経のなさを自覚できたことである。

特にこの胸。外交官時代は武器にもなりえたこの豊かな乳房が、動き回ろうとするとやたら揺れるわ、すると痛いわで、果てしなく邪魔なのだ。

（いっそ小さくなってくれないかしら）

などと、部屋の中にいる補佐官が耳にすれば舌打ちしそうなことを考えていると、不意に背後の扉が開く気配を感じた。

即座に首を巡らせたフィシュの目に映るのは、今まさに部屋から出ようとするウェインとニニム、

そして二人を見送るロウェルミナの姿だ。
「大変実りある時間でした、ロウェルミナ皇女」
「こちらこそ、有意義に過ごさせて頂きました」
ウェインは慇懃な慇懃な仕草でロウェルミナの手を取る。
「叶（かな）うことならばもっと語り明かしたいところですが、もう星々も眠る時間です。今宵はこれにて」
「ええ、また明日お会いするのを楽しみにしています。部屋にお戻りになられる最中、誰かに見とがめられないようお気をつけて」
「ご安心を。この宮殿の構造について、私より熟知しているものはおりませんので」

ウェインはロウェルミナの手を離し、ちらりとフィシュを見た。

「ブランデル殿もまたいずれ」

「あっ……は、はい」

フィシュは慌てて一礼する。元大使とはいえ今は一介の侍従でしかない。本来は王太子が直接声をかけるような身分ではないのだが、それをするのがこのウェインという少年の人柄であり、器なのだろう。

そしてウェインは二人を伴って去って行った。その背中を見送ったフィシュにロウェルミナが声をかける。

「フィシュ、私たちが話している間に何か問題はありましたか？」
「ございません」
「そうですか。では中へ」
「はっ」
フィシュは念のため周囲を確認してから部屋に入る。
「殿下、如何でしたか事の運びの方は」
「上々でした」
ロウェルミナは言った。
「予定していた通り、私の目的が帝位にあるという筋書を提示することができましたよ」

「お見事です。ならば今後も……」

「ええ、筋書きに沿って話し合いを続けます。―私の、本当の目的のために」

フィシュの横顔に緊張が走った。

ロウェルミナが口にした、本当の目的というものの重さを知るがゆえのことだ。

「……ウェイン王子は気づくでしょうか？」

それは問いの形ではあったが、同時にロウェルミナの返答を聞くまでもなく、フィシュの胸中には一つの答えが浮かび上がっていた。

そして恐らくは、同じ答えをロウェルミナも導き出していたのだろう。彼女は悠然と微笑みを浮

かべ――

「――ブラフだな」

人気のない宮廷の廊下を歩いていたウェインは、おもむろにそう言った。

表向きはウェインとの縁談の話し合いというロウェルミナの来訪。

その本当の目的は、帝位を手にするための協力を取り付けるためのもの。

だが、それすらも偽り。

彼女には秘した三つ目の目的があることを、ウ

エインは看破していた。

「根拠は？」

隣を歩くニニムに動揺はない。問い返しつつも、彼女もまたそう感じていたからだ。

「帝国国内に協力者がいないってのがありえん。なにせ継承権持ちの未婚の皇女様だぞ。この混乱に乗じて取り入ってくる輩は山ほどいるはずだ」

「使いものになりそうなのが居なかったのかもしれないわ。まともな人材なら三人の皇子のどれかに与して栄達を求めるでしょう」

「それで協力を求めた先がナトラってか？　それこそ無意味だ。帝国に対して武力の面でも政治の

面でも遠すぎる」

この時代、誰が君主になるかでいざこざが起きることは珍しくない。そしていざこざが話し合いで解決できなければ、持ち上がるのは武力による解決である。

ナトラは帝国の同盟国でしかなく、帝国の政治に干渉する力はほとんど無い。ロウェルミナが皇帝にいいと思うよ、などと働きかけたところで実現は困難だろう。

さりとて、武力で無理やり三人の皇子を黙らせられるかというと、これも無理筋だ。ナトラ王国とアースワルド帝国の国力差はもはや言うまでも

なく、仮に皇子たちの手で帝国の国力が三分割されようと歯が立たない。

ロワに限って、それに気づいていないということは有り得ないだろう。

「でもそうだとするなら、ここに何をしに来たのか一層謎になるわね」

「そうだな。だが、あの話し合いでも手がかりはあった」

ウェインはにっと笑った。

「任せとけ。俺が全部暴いてみせるさ」

◆第四章◆

「――皆さんは、帝国をどう思いますか？」
それは士官学校での一幕だ。
教室の一角で仲間たちと過ごす他愛（たあい）のない時間。
そこでロワはおもむろに、四人に向けて問いを発した。
「どう思うねえ」
ウェインたちは軽く視線を投げかけあうと、グレンが口火を切った。
「俺（おれ）はもちろん誇りに思っているぞ。我らがアー

スワルド帝国は素晴らしい国だ。軍人として国に尽くせることはまさしく誉れだな！」

「まだ軍人になれると決まったわけじゃないけどな」

「うぐっ」

ウェインの横やりにグレンは唸(うな)った。

「た、確かにまだ決まったわけではないが、俺の成績ならば」

「武術以外全部俺に負けてる成績がなんだって？」

「……どらっしゃあああああ！」

「うおおおおおおおい!?　いきなり殴りかかるのは反則だろ!?」

「やかましい！　そこに直れ！」
ウェインとグレンが机と椅子（いす）を巻き込みながら取っ組み合いを始める中、ロワは視線をストランングに向けた。
「ストランングはどうです？」
「属州出身の僕にそれを聞くかい？」
ストランングは苦笑を浮かべる。属州とはすなわち帝国と戦い、そして敗れた国の成れ果てである。そこの民が帝国に向ける感情が複雑であることは容易（よういい）に想像できる。
「……まあ、凄い国だとは思ってるよ。次々国を征服して、人と文化を取り込んで、あっという間

に大陸東部の覇者だ。なかなか出来ることじゃない」

「ということにしないと、負けた国が何だったんだってことになるしな」

「お前は余計なことを言わんと気がすまんのか!?」

「隙(すき)あらば煽(あお)るのが俺の使命だ」

「とっとと捨ててしまえそんな思い込み！」

ロワはウェインたちのやり取りにくすくす笑いながら二ニムを見た。

「では二ニムは？」

「そうね……フラム人として言わせてもらうなら、呼吸がしやすい国だと思うわ」

帝国は多民族国家であり、能力を重視している。ゆえに人種差別は比較的穏やかで、たとえ属州出身であったり西側で被差別人種であっても、能力さえあれば出世は可能だ。

「そういえば西側はフラム人への差別と偏見が凄いらしいね」

「気に入らんな。帝国が大陸西部へ進撃すれば、そんな価値観など消し飛ばすものを」

そう口にしてから、グレンはウェインを見た。

「……おいウェイン、ニームのことは煽らんのか」

「は？　他人を煽るとか最低なんですけど？　どうして俺がそんなことをしなきゃならないんです

かねグレンくん？」
「お前という奴は……！」
「うーんこの露骨な身びいき」
憤激するグレンと苦笑するストラングを横目に、
では最後に、とロワは言った。
「ウェインは帝国をどう思っていますか？」
「使える」
ウェインの返答は端的だった。
「使えるとは……どういう意味だ？」
「そのまんまだよ。好きでもないし嫌いでもない。ただこの国は俺にとって使い道がある。それだけ」
ウェインは肩をすくめた。

「国と民の関係なんて、割に合わないと思ったら他所に移るぐらいでいいのさ。国への忠義とか無償の献身とか、面倒くさいだけだって」

「ぬう……」

「なんともウェインらしいね」

「こういう考え方も許してくれる懐（ふところ）の深さには、それなりに感心してるけどな」

そう言った後、ウェインはロワを見た。

「それよりも、ロワの方こそ帝国をどう思ってるんだよ」

「私ですか？　もちろん好きですよ」

ロワの返事に迷いはなかった。

「私にとって生まれた国、育った国ですからね。ただ――だからこそ、もどかしいと思うこともありますが」

「へえ、例えばどんなことに？」

「そうですね……」

そこでロワは悪戯（いたずら）っぽく言った。

「ウェインが未（いま）だに逮捕されないこととかでしょうか」

「全くの同意だな」

「そこは否定（ひてい）できないね」

「一度くらい痛い目みてもいいと思うわ」

「君たちちょっとひどくなーい!?」

仲間たちが騒ぐ様子を眺めながら、ロワはくすくす笑った。

その心の深奥に、誰(だれ)も知らない激情を燻らせながら。

◆◇◆

「全っ然わかんねえ……」

帝国使節団が到着してからしばらく。

ウェインは執務室で一人、頭を抱えていた。

「いやもうマジ腹の内読めないわ……何しに来たんだロワの奴……」

あの夜の秘密の会合以来、ウェインはロウェルミナの動向をつぶさに観察し、その目的を探ってきた。国賓であるロウェルミナをもてなすのにウェイン以上の相手はいないため、自然と行動を共にすることが多く、観察自体は難しくなかった。

だが、見えてこない。見識を広めるという名目でナトラの方々を巡っているが、そこに不審な動きはなく、本当に観光しているだけなのだ。

「間違いなく裏があるはずなんだがなぁ……」

うーむ、と悩ましい気に腕を組んで考え込んでいると、執務室の扉が叩(たた)かれた。

「お兄様、今いいかしら？」

現れたのは妹のフラーニャだった。ウェインはすぐさま背筋を伸ばし、爽(さわ)やかな笑みを浮かべる。

「ああ、フラーニャか。どうだった？　会議の方は」

「とっても疲れたわ……お兄様は毎日あんなのに参加してるのね」

ふにゃあ、と疲労が込められた吐息(といき)がフラーニャの口から洩れる。

事前に話し合った通り、帝国使節団の応対にかかりきりなウェインに代わって、フラーニャはいくつかの仕事を任されていた。今日の会議もその一つだ。

「慣れない内は仕方ないさ。俺も最初の頃は肩が凝って仕方なかったからな」

歩み寄ってきたフラーニャの髪を梳(す)くように撫(な)でる。フラーニャは目を細めた。

「使節団が帰国すればまたいつも通りに戻る。フラーニャに俺の代わりをさせるのも出来るだけ少なくするから、辛抱してくれ」

ウェインとしては気遣っての言葉だったが、しかしフラーニャは唇を尖(とが)らせた。

「お兄様、そんなに私は頼りないの？」

ウィンは眼を瞬かせ、それから得心して言った。

「いやすまない、今のは俺が悪かった。――良く

やってくれたフラーニャ。また必要な時に大事な仕事を頼みたいが、いいか？」

フラーニャは顔をほころばせた。

「もちろんよ、私に任せてお兄様」

むぎゅ、とフラーニャはウェインに抱き付いた。

「妹の成長を感じて、兄としては嬉(うれ)しい限りだな」

彼女の髪を撫でながらウェインが言うと、フラーニャは意気込みを露(あら)わにする。

「まだまだよ。お兄様に追いつくためには、もっと頑張らないと」

「はは、まあそう焦(あせ)らなくても大丈夫だ。ニニムとも相談しながら、少しずつフラーニャに任せら

れることを増やしていこう」

フラーニャは頷(うなず)き、そこではたと気づいた。

「そういえばお兄様、ニニムはどこに？」

「ん？　ああ、ニニムならいま――」

ナトラ王国において、湯に浸かる文化は庶民にまで浸透しているものだ。

理由は王国民が殊更綺麗(きれい)好きだから――というよりも、その厳しい気候にあった。湯に浸かることを寒さへの対抗手段としているのである。

幸いにもナトラの水源は豊富で、水を大量に使

いやすい国だ。観光地とするには足りないが、温泉が湧き出る場所もある。そのため大きめの街には必ず大浴場があり、真冬ともなれば、そこでのんびり過ごすことが王国民にとって最大の娯楽になる。

当然、それらはナトラの上流階級においても通じるものだ。

「……何度来ても、ここは素晴らしいですね」

そこは貴人をもてなすために造られた、王宮の大浴場の一つだ。

何十人だろうと同時に入れるだろうそこは、帝国の使節団が到着して以来、一人だけが利用する

専用の場所となっていた。

その一人とはもちろん、今まさに湯船に浸かっているロウェルミナである。

「特に外の冷たさがあるからでしょうか。帝国のそれよりも一層温(ぬく)もりを感じます」

「お気に召して頂き光栄です、皇女殿下」

応じるのはニニムの声だ。しかしその響きには困惑が混じる。

「ですがその……」

「どうかしましたか？」

「……なにゆえ私も湯を共にしているのでしょうか」

言葉通り、ニニムもまた服を脱ぎ、ロウェルミナの横で湯に浸かっていた。

ロウェルミナに請われて断り切れず応じることになったが、一国の皇女が他国の家臣と共に入浴するなど前代未聞である。

「あら、学校にいた頃にも何度か一緒に入ったでしょう？」

「しかし今はお互いに立場が違います」

「そんなものは、服と一緒に脱ぎ捨てたことにしましょう」

無茶言うなという顔になったニニムに、遠慮なくロウェルミナは無茶を言う。

「ですから、もっと砕けた言葉遣いになっていいのですよ？」

「……」

ニニムは若干頬（ほお）をひきつらせながら横を見た。

「あのぅ、殿下」

すると彼女の視線の先から、恐る恐る声が届く。

「補佐官殿と旧交を温めるのでしたら、私は外した方が良いのではと……」

声の主（あるじ）はロウェルミナの近侍であるフィシュだった。

当然彼女も服を脱いで湯に浸かっており、普段は衣服の下に収められている豊かな胸元（むなもと）も惜しげ

もなく晒(さら)されている。

「いけませんよフィシュ。それでは私が他国の方と二人きりになってしまうではありませんか。何かがあった時、困るでしょう？」

「既に殿下は何度もその他国の方と密室に籠(こも)られておられますが」

「忘れました」

「そもそもそんな立場は脱ぎ捨てたという話では？」

「もっと未来に目を向けましょう」

「「……」」

しれっと言い放つロウェルミナを前に、フィシ

ュとニニムは視線を交わし、お互いの背負う気苦労を理解した。

「……今この時だけ、ということでいいかしら」

近侍たるフィシュの前でニニムは言葉を砕く。

「ええ、異存はないわ」

フィシュが手を差し出す。ニニムはその手を握り返した。それぞれ別の国に属する二人の間に、今この時ばかりは友情が芽生えた。

「あら、私だけ仲間外れですか？　そんなことをされると私は泣きますよ」

「やめなさい、笑い事じゃすまないから」

「なら楽しいお話しをしましょう。フィシュ、何

かありませんか？」

「はっ……それでは単純な興味で恐縮ですが……お二人が士官学校の同輩であることは聞き及んでおりますが、そこでどのような日々を送られていたのでしょう」

ニニムとロウェルミナは顔を見合わせる。

「そうですね、私とウェインとニニムの他に、グレンとストラングという二人を加えた五人でいつも行動していましたよ。皆学校では人気者でした」

「厄介者の間違いでしょ。全員成績は良かったから見逃されてたけど」

「そういう側面があったのは否めませんね。です

が人気があったのも確かですよ。特にニニムなんて決闘騒ぎ以降、女子からも尊敬されていましたね」

「決闘……？」

目を瞬かせるフィシュの横でニニムは息を吐いた。

「私がフラム人なのを理由に侮辱してきた人がいたのよ。だから決闘を挑んで叩きのめした。それだけ」

「それだけだなんて。あの凛々しい姿に魅了された殿方がどれほどいたことでしょうか。届く恋文が多すぎて、お断りの返事を書くのに難儀してい

たことは知っていますよ？」
ニニムは思わず苦い顔を浮かべるが、しかし彼女もやられっ放しではない。
「それを言うなら、ロワもそうでしょ。求愛してくる貴族が後を絶たないって噂（うわさ）はこっちにも届いてるわよ。確か熱心なのはアントガダルやルービットだっけ？」
「……割と本心から困っているのですけれどね、その二人には」
ロウェルミナはため息を吐いた。
「出席した夜会で作法が解らず苦慮していらしたので、それとなく手助けをしたら、手紙やプレ

ゼントが送られてくるようになったのですけれど……どれも趣味が悪くて……」

「珍しいわね。ロワがそこまで言うなんて」

「今度手紙を見せてあげましょうか？　自分が皇女の夫に相応（ふさわ）しい完璧（かんぺき）な人間か主張する裏で、いかに私のことを自分を飾る宝石としか見ていないかが滲（にじ）んでくる内容ですよ。そこに悪趣味で稚拙な金銀細工を添えられれば、ニニムだって同じ気持ちになるでしょうね」

「それはまた……ご愁傷様」

ロウェルミナは柄にもなく祈るような口ぶりで呟（つぶや）いた。

「今回、私がここに来たことで諦(あきら)めてくれると嬉しいのですけれど」

しかしフィシュは無情にも頭を振った。

「私の所感ですと、あの手の輩は一度執着するとなかなか諦めないものです。それこどろか、更なる情念を燃やしているかもしれませんね」

「ですって、ロワ」

「……フィシュ、貴女の赤裸々な恋愛体験を吐きなさい。今すぐ」

見事に藪蛇(やぶへび)を突いた形になったフィシュをいじりながら、ニニム達はその後も長く話し続けた。

「――というわけで、今頃ニニムはロウェルミナと湯船に浸かってる最中だな」

「むう」

事情を聞いたフラーニャは、小動物のように唸った。

「ずるいわ。私だって最近はニニムとお風呂に入れてないのに……！」

ただでさえ横合いから兄を攫おうとしている――フラーニャにはそう見える――ロウェルミナに対する好感度は低いというのに、ニニムまで持っていこうとは何たる傲慢か。もうごめんなさいをす

るまで決して許すまいとフラーニャは心に誓った。
「まあそう膨れるな」
フラーニャの頬をつつきながらウェインは言った。
「ニニムにはフラーニャとの時間を作るよう、俺の方からも言っておくさ」
「本当？　じゃあその時はお兄様も一緒にお風呂に入りましょ」
「俺もか？　うーん、さすがにもうそんな年齢でもないだろう」
「大丈夫よお兄様、私は気にしないわ」
「解った解った、考えておこう」

考えておくだけで実行する気はないという、政治家の十八番ともいえる受け答えをした後、ウェインは素早く話題を変えた。

「ところでフラーニャ、勉強の方はどうだ？　捗ってるか？」

「あうっ」

その反応だけでウェインは得心し、笑いながら言った

「なに、焦ることはないさ。クラディオスは不真面目（まじめ）は許さないが未熟には寛容だ。学ぶ意思さえ持ち続ければ必ず進歩できる」

「でもこの前、つい他の事に気を取られて授業を

聞いてなかったの。きっと怒ってるわ」

申し訳なさそうに言うフラーニャの頭を、気にするな、とウェインは撫でる。

「その程度で怒るようなら、俺の教師をしていた時期に憤死してるさ。だがそうだな……過ぎた時間を惜しく思っているのなら、今から補習を受けてみるか？　他ならぬフラーニャのためなら、短い時間だが俺が講師をしてもいいぞ」

フラーニャの眼が驚きに染まり、それから喜びを得た。

「是非ともお願いするわ、お兄様」

「よしよし、それじゃあクラディオスの授業は今

どの辺りになる？」

「ええっと、今は帝国について学んでるわ。帝国がどんどん大きくなって、色んな国を征服してそれで、帝国に吸収された国の中でも主要なのがいくつかあるって」

「その辺りか。そうだな、バーノク、コドラフィ、トッドレラン……どの国にも滅亡までに逸話があるが、全部やるには時間が足りないか。となれば……アントガダルの話をしよう」

ウェインは机の上の羽ペンを取ると、同じく机上にあった書類から不要なものを一枚取り出し、その余白にペンを走らせた。描くのは大陸東部の

地図だ。

「我らがナトラ王国は大陸中央部の北端に位置し、西側は今は亡きマーデン国、東側は帝国領のガイラン州と隣接してる。ちなみにフラーニャ、ガイラン州の特産品を知ってるか？」

「織物よね。とっても質が良いって聞いたことがあるわ」

「そう、特に鏡染めと呼ばれる染め方を用いた織物は不思議な光沢があってな。歴代のアースワルド帝国の皇帝も愛用してる。希少なせいで滅多(めった)に出回らないけどな」

ナトラ(うち)にも卸してくれればな、とぼやきながら

ウェインは続けた。

「このガイラン州は元々アントガダル王国という名の国でな。俺たちが生まれる少し前に帝国に併合されたんだが……そこに至るまでの経緯で、当時のアントガダル王は大陸屈指の食わせ者という評価を得た」

「どういうこと？」

「その頃の帝国は南部にあったバーノクやコドラフィといった国を打ち破り、大きく躍進しようとしていた。だが出る杭は打たれるのが世の常だ。残る大陸東部の国々の間に危機感が生まれ、団結して帝国討つべしという機運が高まり、ついには

対帝国連合が組まれた」

ウェインは連合に参加した国々の名を地図に書き連ねていく。中にアントガダルの名前もあった。そして帝国領を黒く塗りつぶすことで、いかに大陸東部で連合に参加した国が多いかを示す。

「連合の出現で、帝国は一転して窮地に追いこまれた。ジリジリと領地を削られ、あるいはこの状況が続いていれば帝国は滅んでいたかもしれない」

だが、とウェインは言った。

「連合に加わっていたアントガダル王が、突如として帝国に臣従を表明することで、事態は大きく変わった」

「えっ、自分から臣従したの？」
「そうとも。そしてこの地図の位置から解るように、アントガダルは北東に位置し、帝国は南東に位置する。アントガダルはナトラと同じ規模の小国だが、それでも帝国を南に押し込むようにして重圧をかけていた連合は、背中に剣を突きたてられることになる。――さて、フラーニャが連合国ならここからどうする？」
アントガダルの領地を黒く塗りつぶしながらウインは問いかける。
フラーニャはしばし考えた後、言った。
「まずはアントガダルを集中して倒しにいくと思

うわ」

「そう、それが理想だ。しかし、それをさせないのがアンドガダル王の手腕だ。巧みな外交で連合の足並みを乱れさせて時間を稼ぎ、その間に帝国は連合に所属している国を各個撃破していった」

帝国の進撃を示すように地図が黒く塗りつぶされていく。地図は僅(わず)かな余白を残すばかりで、ほとんどが黒に染まった。

「ついに連合は瓦解し、大陸東部における帝国の覇権は揺るぎないものとなった。そして主要な国の王族は処刑ないし、地方に封じられたわけだが……アントガダル王だけは帝国に侯爵の地位で迎

えられ、さらに直轄領まで安堵(あんど)された。これこそが、アントガダル王が食わせ者と呼ばれるようになった経緯というわけだ」

ウェインの話を聞き終えたフラーニャは、はふう、と大きく息を吐いた。

「連合を裏切って王位を捨てるだなんて……アントガダル王はどうしてそんなことをしたの？」

「連合が勝っても群雄割拠の時代に戻るだけで、アントガダルはいずれすり潰(つぶ)される。それならいっそ帝国を勝たせて、帝国の中で地位を得る方が利があると考えた――と回顧録には書いてあるな」

もっとも、それが全(すべ)てとは限らないことを、ウ

エインは知っているが。

「回顧録？　そんなのがあるのね」

「アントガダル王が晩年に書いたものだ。僅か三十部しか作られてない貴重な品でな。俺の書斎にあるから、興味が沸いたなら読んでみるといい」

フラーニャは頷き、それから小首を傾げた。

「……あれ、お兄様、晩年っていうことは」

「ああ、アントガダル王は既に亡くなってる。臣従する前からかなりの老齢だったしな。今はその息子が二代目のアントガダル侯爵だ。まあ息子といっても、俺たちより年上の子供がいるような年齢なんだが」

「その二代目も凄い人なの？」

「俺も直に人となりを確認したわけではないが――粗野で横暴、文政を怠り芸術を解さず、さりとて軍事に明るいわけでもない。そして親から容姿（ようし）と野心を受け継ぐ過程で、勇気と叡智を取りこぼしたともっぱらの評判だ」

フラーニャは微妙な顔になった。

「他にもガイラン州総督と仲が悪いことで有名だな。まあ、州の半分もの領地を持っている侯爵家と、権限を与えられ中央から派遣された代官である州総督。水が合うはずもないが――」

その時、執務室の扉が叩かれた。

「失礼しますーーああ、フラーニャ殿下もおいでしたか」

「あっ、ニニム」

部屋に入ってきたニニムを見るや否や、フラーニャは彼女に駆け寄って飛びついた。

「お兄様から聞いたわ。皇女様と湯浴みをしていたんですってね」

「ええ、今しがたようやく解放されまして……フラーニャ殿下、何故(なぜ)不機嫌そうなお顔に？」

ウェインは笑いながら言った。

「優しい姉が他所の人間に取られたと、我らが妹はご立腹なのさ」

「なるほど、……そういうことでしたら、近々時間を作ってフラーニャ殿下とも湯浴みいたしましょう」

「本当？　約束よ、ニニム」

「もちろんですとも」

円満に話し合いが解決したところでウェインが言った。

「ところでニニム、ロウェルミナ皇女は？」

「お部屋に戻られました」

「何か収穫はあったか？」

「詳細は後ほどお話ししますが、残念ながらこれといったものは……」

ふうむ、とウェインは腕を組んだ。

早くロウェルミナの目的を掴(つか)みたいが、なかなかに厳しい状況だ。

「ねえ聞いて二二ム、今ね、お兄様からアントガダルが帝国に臣従するまでのお話しを聞いてたのよ」

「それはようございました。ウェイン殿下の口上にもさぞ熱が入ったことでしょう。殿下は常々アントガダル王を規範とすべき君主と考えておいですから」

「そうなの？　お兄様」

「ん？　ああ、あくまで個人的にだけどな」

時流を読み、自分が最も高く売れるタイミングで大国に身売りをする。

つまるところウェインの理想的な売国ムーヴをこなしたのがアントガダル王なのだ。

これを知った当時、「上手（うま）くやりがってこん畜生」という気持ちで一杯になったウェインだが、嫉妬（しっと）に駆られて自分の目的に先人がいたという事実を逃す彼ではない。あの手この手でアントガダル王やその周辺について調べ上げ、回顧録を入手してまで研究に励んだ過去がある。現アンドガダル侯爵について詳しいのもそれが理由だ。

「連合に参加していた国々からは蛇蝎のごとく嫌

われているが、その手腕は一流だ。学ぶべきところがあるのならば、その人物の経歴なんて些細（ささい）なものさ」

「さすがお兄様だわ」

フラーニャは尊敬の念を隠すことなく眼差（まなざ）しに乗せる。

「そのアントガダルの二代目の人も、お兄様みたいになればよかったのに。すごいお父様がいるのに、もったいないわね」

「ああ、今のアントガダル侯についても聞いたのですね？」

ニニムは苦笑しながら言った。

「傑物が二代続くのはそうないことですから、そこは仕方のないことかと。特に自ら王位を捨てられる王族など、大陸を見回してもどれほどいるか。アントガダル侯も、本来ならば一国の王になられた身。帝国の家臣に甘んじていることを不満に思っているという噂は、しばしば届きます」

もっとも、その自ら王位を捨てられる王族が、すぐ傍（そば）にいるウェインなのだが。

（しっかしアントガダルか……）

自らがフラーニャに語ったこと思い返しながら、ウェインは脳裏（のうり）に明滅するものを感じていた。

（何か噛（か）み合（あ）いそうな、合わなさそうな……）

むう、と心の中で唸る。欲している答えがすぐ間近にあるが、靄に包まれて見ることができない。そんな感覚。どうにか靄を払おうと、頭の中にある情報の断片を繋ぎ合わせるも、どうしても上手く行かない。

足りない。何かが足りない。その何かさえあれば、何かさえ起これば――

（――いやいやいや！）

危うく馬鹿なことを望むところだった。

ただでさえ使節団の歓待で手が一杯なのだ。そこに加えて何か起こればなど、間違っても望んでいい状況ではない。

（そうだ、考えてみればむしろ何事も起きなければいいんだ。それならロワがどんな思惑を抱いてようが構わない。そう、俺が望むべきは真実とかじゃなくて平穏！　安泰！　天下泰平！　だからーー）

「殿下、失礼いたします！」

その時、部屋の中に官吏が飛び込んできた。

「今しがたラークルム様より伝令が届きました！

ーー派遣された地域において、乱の兆しがありとのことです！」

「……」

だから、頼むから変なことが起きませんように。

ウェインが抱こうとしたその願いは、しかしそ

の前に潰えることとなった。

◆◇◆

ナトラ王国はお隣のアースワルド帝国と同じく、多民族国家である。

ただし、同じ多民族でもそうなった経緯は大きく違う。

戦争によって強引（ごういん）に人種や民族を飲み込んでいったのが帝国だが、ナトラ王国は東西の外国から人や民族が自主的に流れ着いた結果、多民族国家となったのである。

しかし、それほどまでにナトラが魅力的な国なのかといえば、そんなことはない。気候は厳しく、領地は開墾に向かない荒地だらけ。産業や娯楽も乏しい。住みやすいとはお世辞にも言えない国だ。

ではなぜそんな国に人が集まるのかといえば――集まる人間の多くが、他に行く場所がないからである。

例えば、罪を犯したことによって。例えば、思想や人種による弾圧をされたことによって。他にも戦火によって、悪政によって、疫病によって――そういった様々な理由で故郷を追われ、されど他所の国にも馴染(なじ)むことができず、流れに流れて

最後にたどり着く場所が、東西に道が開かれ、その厳しい気候と立地ゆえにひっそりと暮らせる、このナトラ王国なのである。

いわば国家規模のスラム街みたいなもの――とはウェインの弁だ。

さて、そんな流れ着いた民であるが、多くが前述の通り体制側にろくな思い出を持たない少数派（マイノリティ）である。

そのため、そんな彼らが王国に対して抱く感情というのは、

「私達を受け入れてくださってありがとうございます！　王国のために尽くします！」

などという美談めいたものではなく、

「いつか返り咲いてやる……」

「私達のことは放っておいてくれ……」

「こんな国にまで良いように使われるぐらいなら、いっそ……」

というような、大変後ろ暗いものだった。

排斥されてきた苦い経験が、彼らを他者に対して寛容にさせるということはなかった。むしろより排他的にさせているのが現実であり――それゆえに、ナトラでは村や部族間での諍いは少なくない。

もっとも、そもそもが貧乏で小規模な集団ばかりだ。血で血を洗うような戦いに発展することは

なく、国側が察知した時には、勝手に決着をつけているのが大半だった。

――大半だったのだが。

「こちらの制止を無視して戦争準備か……」

天幕にて報告書を読み終えたウェインは、呻くようにそう言った。

「申し訳ありません。このようなことになるとは」

ウェインの前で頭を下げるのはラークルムだ。

「構わん。俺の判断ミスだ」

発端はトリト河の流路工事である。

王家の直轄地に流れるこの河は、たびたび氾濫を起こしていた。そのため国王の指揮の元、新た

に水路を作ることで本流の水量を減らし、それでいて水源まで遠かった地域に分流を通すという工事が始められた。

ウェインが摂政として立った後も工事は続けられ、先日ようやく完了したわけだが、ここにきて問題が生まれる。新たに分流が通った地域を巡って、付近に住む部族が対立したのだ。

派遣した代官の説得もむなしく、対立は深まるばかり。しかしこの時点でウェインに動揺はなかった。前述の通り、国民同士の諍いは珍しくないが、その武装は貧弱だ。訓練された部隊を差し向ければ楽に収められると考えていたからだ。

事実、一旦はそれで収まった。そして武力を背景に、代官が改めて根強い交渉を続けていたのだが――ここにきて、予想外の展開になる。

「――まさか、対立してる二つの部族に大量の武器が流れるとはな」

武力という後ろ盾があってこそ、部族との交渉のテーブルにつくことができていた。その前提が崩れ去ったのだ。

「武器の出所については解っていないんだったな？」

「はっ、出入りしている商人から購入したとのことですが、その商人がどこから武器を取り寄せた

のかまでは」

「そうか……まあいい」

気になるところだが、二の次だ。まずはこの対立を収めなくてはならない。

「時に殿下、その、一つお尋ねしたいのですが」

おずおずと切り出すラークルムにウェインは視線を向けた。

「なんだ？」

「あちらに座られている御方は……」

ラークルムが示したのは天幕の隅だ。

そこに座って優雅な微笑を湛えているのは一人の少女――ウェルミナ・アースワルドだった。

「私のことはお気になさらず。ただの見学ですので」

「だ、そうだ」

「はあ……」

「それよりもラークルム、呼んできてもらいたい兵士が何人かいる」

それでいいのか、という困惑顔のラークルムに指示を出しながら、ウェインは内心でため息を吐いた。

（まったく、本当に何でこうなったんだろうな）

苦々しくぼやきながら、ウェインはここに至るまでの経緯を脳裏に浮かべた。

乱の兆しがあり――

その報告を受けたウェインは大いに頭を悩ませた。

事態が事態だけに、自分が現地に向かって確認するべきなのは間違いない。

しかし今、王宮には帝国の皇女たるロウェルミナが滞在しているのだ。賓客である彼女を放っておくわけにもいかない。

（二ムを派遣するしかないか……いや即行解決できるなら俺がこっそり行くことも……）

などとウェインは考えを巡らせていたのだが、そこにロウェルミナが顔を出す。

「何やら困ったことが起きたそうですね」

どうやって知った――とは思わなかった。機密の塊である他国の王宮に滞在しているのだ。使節団の人員を使って情報収集を密にしていても不思議ではない。

むしろこの一件がロウェルミナ側の仕込みの可能性すらある。そう考えたウェインは、一つ揺さぶりを試みた。

「なに、大したことでは。私自ら現地に向かってすぐさま解決してきますとも」

まさかの賓客を放り出す宣言。ここでロウェルミナが引き留めに走るか。あるいは快く送り出すか。彼女の反応でこの件にどれだけ絡(から)んでいるか見定めようとし――

「そうですか。では、私もご一緒しますね」

「は？」

これにはウェインはおろか使節団の面々までも慌てた。たとえ他の皇族の派閥に属していようとも、戦場になるかもしれない危険な場所に皇女を同行させるなど、許容できることではない。彼らはどうにかロウェルミナに思いとどまってもらおうと、近侍のフィシュを筆頭に言葉の限りを尽くして説

得を試みた、が。

「この使節団の目的は、ナトラとの同盟関係を継続するに足るか見定めること。そして戦乱の気配が色濃くなる大陸において、実質的な指導者であるウェイン王子の軍の采配（さいはい）をこの目で確認することは、大きな意義があります」

「いやしかし危険で……」

「何を心配することがありますか。この国の摂政たるウェイン王子の隣にいるのですよ。この国でここより安全な場所は他にありません」

皇女にここまで断言されては、ウェインも使節団の面々も黙りこくるしかない。

「というわけで、よろしくお願いしますね？　ウェイン」

こうしてウェインはロウェルミナを引き連れて、ラークルムの元へ急行することになったのだった。

「……で、どういうつもりなんだよ」

天幕で二人きりになったところで、ウェインはロウェルミナに問いかけた。

隣に二ムの姿はない。彼女には王宮に残って政務を回してもらっている。

「どうもこうも、出発前に言った通りですよ。同

盟関係の継続のために、ウェインの能力を確認するのが目的です」

「そういう建前（たてまえ）はいらん」

にべもなく切り捨てられるも、ロウェルミナの余裕は崩れない。

「でしたらそうですね、軍を指揮するウェインの凛々しく勇ましい姿を見たかったから、というのではどうでしょう？」

「……」

解ってはいたが、まともに答える気はないようだ。

ロウェルミナはくすくす笑いながら言った。

「まあまあ、私のことは良いではありませんか。

それよりウェイン、この対立をどう収めつもりです？」

「……どうもこうもないだろ」

報告書によれば、この地で対立しているのはヘーノイという部族と、エシオという部族だ。

以前から両勢力は小規模な諍いを起こしていたが、新たな水源を巡って対立は激化。両勢力の最大動員数は百人前後であり、そのほぼ全員に武器は行き渡っているという。

対してこちらが派遣した兵力は二百人。人数だけならば、両勢力を合わせたものとほぼ互角だ。

が、互角なのはあくまでも人数の面だけだ。

「普通に戦うだけで簡単に鎮圧はできる。なにせ兵の質が段違いだからな」

相手はろくな訓練も詰んでいない烏合(うごう)の衆。たとえ武器を持っていたとしても、高度な戦術を駆使する指揮官とその意に沿って動ける正規兵が揃(そろ)っていれば、相手にもならない。

「そうでしょうね、ましてや指揮するのがウェインであれば万が一も有り得ないでしょう。ですが――それでも多少の血は流れます」

ロウェルミナの指摘は正しい。いかに優れた人間が指揮しようとも、命のやり取りである以上、

味方の損害がゼロというのは非現実的だ。

だが。

「安易にそれを良しとしないのが、私の知るウェイン・サレマ・アルバレストです。……練っているのでしょう？　普通ではない、味方を誰一人として死なせない作戦を」

問いの形を取っているが、彼女の瞳（ひとみ）には確信が宿っている。その双眸（そうぼう）で見定めようとしているのだ。ウェインがいかなる奇抜な采配でこの難事を片づけるのかを。

その眼差しを真っ向から受け止めながら、ウェインは言った。

「……悪いがそいつは勘違いだな、ロワ」
ウェインは一息を挟み、にっと笑った。
「俺はこの戦で、敵も含めて誰一人として死なせる気はない」
ロウェルミナは驚いたように目を見開いた後、一転して笑顔になった。それはさながら、憧(あこが)れている人物の輝きを目(ま)の当(あ)たりにした子供のようだった。
「殿下、入ります！」
声を張り上げながら現れたのはラークルムだ。
その背後には四人の兵士達が従っている。
「指名された兵を連れて参りました」

「ご苦労」
ウェインは四人を見る。
「ヘーノイのトレイスとラランダ。エシオのカルディアとゾルトだな」
「「はっ！」」
名前を呼ばれた四人は、姿勢を正しながら一斉に声をあげた。ウェインは続ける。
「現状については認識しているな？」
「はっ……私達の出身地でこのようなことが起きたことは、真に申し訳なく」
「構わん、お前たちの責任ではない。それよりも、今も部族との繋がりはあるか？」

「はい。折を見ては帰郷していますので……」
「私もです。しかし恐れながら、私達の言葉で皆を説得することは……」
彼らは自分たちのツテを利用して交渉に乗りだすつもりだと考えたのだろう。しかしウェインの計画は全く別のものだった。
「俺がお前たちに期待していることは、そういうことではない。……お前たち、故郷の皆に死んでほしくないと思っているか？」
これには四人は思わず目を見合わせた。
そして一人がおずおずと答える。
「……もちろんです。恐れ多くもこのような事態

を引き起こしてしまいましたが、私にとって彼らは幼い頃より多くの時を過ごした同胞です」

「ならば、そのために自らの命を賭(か)けられるか？」

再び、四人は眼を見合わせた。

そして彼らは頷き合い、答えた。

「「賭けられます」」

ウェインはにっと笑った。

「よくぞ言った。それではこれよりお前たちに任を言い渡す。ラークルム、悪いがお前には少し泥を被ってもらうぞ」

ラークルムは恭(うやうや)しく答えた。

「殿下の御為とあれば、いかなる泥でも喜んで浴

びましょう」

そしてウェインが兵達に策を授(さず)ける様を、ロウエルミナは楽しげに見つめていた。

◆◇◆

ヘーノイという部族は、元々は大陸の西側から流れてきた民が寄り集まってできたものだ。日々生き残るのに精いっぱいな彼らの歴史が紙などに保存されていることもなく、口伝などに依存しているため、多くが不正確だったり抜け落ちている。

そのためいつからエシオという部族と険悪な関

係になったのか、ヘーノイの誰一人として知ることはない。エシオ側も同じだろう。ただ、エシオは東から流れてきた民によって構成されており、ならば対立するのも当然か、という認識だけが両者の間に共通していた。

そしてこういう明確に対立している相手がいると、身内の結束というのは固くなるものだ。

「おお、トレイス！　戻ってきたのか！」

部族の中核をなしている村に顔を出したトレイスを、彼らは迷うことなく歓迎した。

「丁度良かった、今俺たちはエシオの連中と戦争をしようとしててな」

「確か都で軍に入ったんだろう？　お前がいれば百人力だ」

「安心しろ、武器ならちゃんとある。俺たちが負けることはない」

村人たちが次々と声をかけてくる中で、トレイスは緊張した面持ちで言った。

「皆聞いてくれ、それどころじゃないんだ」

彼の言葉とそのただならぬ様子に、一堂は声をつぐむ。

「すぐ近くに王国軍が来ているのは知ってるだろ？　俺はその軍にいたんだ」

ざわめきが周囲に広がった。

それはすぐさま不信へと変わる。彼らにとってみれば、調停のために現地に来ている王国軍は目障(めざわ)りな第三者だ。まして武器を手に入れた彼らはかつてないほど強気になっている。

「まさか俺たちを裏切るってのか？」

「違う、そうじゃない！」

誰かが口にした言葉に、トレイスは声を張り上げた。

「俺は王国軍の兵士だが、ヘーノイの人間であることを忘れたことはない。今、王国軍を率いているのはラークルムという男なんだが、こいつがとんでもない作戦を立てたから、急いで皆に報(しら)せに

来たんだ」

トレイスは一拍挟んだ後、言った。

「あいつは、川の堤を破壊するつもりだ……！」

驚きと困惑がさざ波のように広がった。

堤とはすなわち堤防だ。新たに掘った水路から水害が生じないよう敷設されたものであり、当然ながらこれが破壊されれば付近一帯の土地は使い物にならなくなる。復旧するにしても多くの時間と人員を必要とするだろう。

「ど、どういうことだ！　なんでそんなことを⁉」

その問いは当然のものだ。そもそも流路工事が王家主導で行われていたことを思えば、とても理

解できる所業ではない。

「派遣されている王国軍の任務はこの地の鎮圧だ。けど、摂政を務めておられる王太子殿下からは極力流血を避けるように言われている。だがラークルムの奴は問題を早く片付けたがってる。だから堤を破壊し、それを俺たちヘーノイとエシオの仕業（しわざ）にすることで、俺たちを討伐（とうばつ）する大義名分を得ようとしてるんだよ……！」

一堂が絶句した。無論、全員がトレイスの言葉をそのまま信じたわけではない。だが、自分たちが王国軍の手を焼かせている自覚は彼らにはある。ゆえにヘーノイとエシオの土地を巡る争いを、根

本からひっくり返すようなその蛮行が、ただの妄言であるとは誰一人として断言できなかった。

「ど……どうする、そんなことになったら」

「そ、そうだ、その王太子殿下に知らせれば」

「馬鹿言え、途中で揉(も)み消(け)されるに決まってるし、届いたとしても信じてもらえるわけがない！　仮に信じてもらえるとしても、届くまでに時間がかかりすぎる！」

「時間……そうだトレイス！　いつだ！　いつ王国軍は堤を破壊するつもりなんだ!?」

トレイスは横顔に不安を湛えながら言った。

「解らない。皆に知らせるために急いで抜け出し

てきたんだ。ただ、ラークルムが一刻も早く事態を解決しようとしてるのなら、もしかしたら――今夜にも」

最悪の予想が一堂の背筋を震わせた。エシオとの長年の対立に決着をつけ、流域を支配して繁栄するはずが、手に入るはずの土地を失い、さらにはあらぬ罪を着せられて王国軍に討伐される未来へと変わる。とても許容できることではなかった。

「どうすればいいんだ……！　こんなことになるなんて！」

「い、今からエシオと話し合って和解するのはどうだ!?」

「ふざけるな！　今更奴らと和解などできるものか！」

「ならば他にどんな方法がある！」

そこでトレイスは再び声を張り上げる。

「落ち着け！　俺たちが言い争っている間に王国軍は動いてるかもしれないんだぞ！」

「そうだ、まずは王国軍だ！」

「堤を破壊するというのなら、それを止めなくては！」

「戦える者を全員集めろ！　堤の近くに陣を張るんだ！　そして奴らを迎え撃つ！」

部族の人員たちが慌ただしく動き始める。

その準備に手を貸すトレイスが、小さく安堵の息を吐いたことに気づく者は、誰一人としていなかった。

◆◇◆

元よりエシオと戦う準備を進めていただけあって、ヘーノイはすぐさま人とモノを用意して出発することができた。

人数は百人弱。全員が武器を手にしている。彼らが向かう先はトレイスがもたらした情報によって判明した、堤の破壊予定地点である。

一刻も早く現地に到着して王国軍を迎え撃つ用意を整えなくてはならない。その思いが自然と彼らを速足にしていた。

しかし突如としてその足が止まる。

「お、おいあれ、エシオの連中だぞ！」

小高い丘の向こう側から現れたのは、彼らと同じく武器を持った百人ほどの集団だった。向こうは向こうで、こちらを発見して驚いたようで、足を止めて様子を伺（うかが）っている。

「ど、どうする……やるか!?」

武器を持つ手を固く握りしめる彼らに向かって、行軍に参加しているトレイスが口を開く。

「待て！　ここでエシオと戦ったら、どうやって王国軍を止めるんだ!?」

「そうだ！　堤を破壊させないことが第一だろう！」

「……よし、皆急ぐぞ！　ただし、エシオがこちらに襲い掛かってきたら迎え撃つ！　警戒を怠るな！」

代表格の男の指示により、ヘーノイの一団は堤へ向かって再び歩き出した。

するとエシオの一団も、ヘーノイとの距離を維持しながら堤の方へ向かって進軍を始める。

「なんだあいつら……まさかあいつらも堤に向か

ってるのか？」

「多分そうだろう。あいつらも知ったんだ、王国軍が堤を狙(ねら)ってることを」

そして両部族の一団は、予定していた地点へ到着する。幸いにもまだ王国軍の姿はなく、堤も無事だった。しかしまだ最悪の事態に間に合っただけにすぎない。彼らは王国軍を迎え撃つための準備を始める。

それは極(きわ)めて奇妙な光景だった。対立していた二つの部族が、互いに警戒心を抱きつつも、同じ目的のために行動しているのだ。

「……こんなものか」

やがて日が暮れ始めた頃、両部族は簡易ながらも防陣を敷き終える。

「全員疲れているだろう。交代で見張りを立てて、他の者は休もう」

「ああ、だが油断はしないようにな。いつ王国軍が攻めてくるか解らん」

不測の事態に対するこまでの彼らの行動は、控えめに見ても及第点と言えるだろう。王国軍が来れば決死の覚悟で戦いを挑む覚悟が、それを支えていたことは間違いなかった。

しかし彼らは知らなかった。

いつ攻めてくるかも解らない敵のために、心身

の状態を維持し続けることの難しさを。

「敵来ないな……」

「ああ……くそっ、来るなら来いよ……！」

「おい、今何か物音がしなかったか？」

「さっきも同じこと言ってただろ。気のせいだ」

「お前らいつまで喋（しゃべ）ってるんだ。いい加減寝ろよ……！」

警戒を怠らないことは大事だが、気を張りつめ過ぎれば余計な負担になるものだ。さらに訓練されていない人間は、極度の緊張に見舞われると脱力や睡眠が出来なくなる。

満足な睡眠を取らなかった時の体の重さと、心

の荒みようは、誰しも一度は経験があるだろう。結局日が沈んでから夜明けまでの間に王国軍が攻めてくることはなく、にも拘わらず彼らの多くは一睡もできなかった。

「……おいトレイス、どうなってる！」

「王国軍がここを狙ってるんじゃなかったのか苛立(いらだ)ちからトレイスに向かって声を張り上げるよ！」

も、どこか力がない。隣のエシオの一団もそれは同じようで、倦怠感が漂っているのが傍目(はため)にも明らかだ。

それもそうだろう。慣れない武器を持ち、一睡

もせずにいたのだ。手は小刻みに震え、心はささくれ立ち、一団は一戦も交えることなく大きく疲弊してしまっていた。

「ここを狙ってるのは間違いない。いつか必ず攻めてくるはずだ」

「それがいつなのかを聞いて――」

「お、おい待て！　この音……」

それは馬蹄が地を蹴(け)る音だった。

しかも一つや二つではない。数十の馬がこちらに向かってきている。

「来た、来たぞ！　皆、武器を構えろ！」

慌てて陣形を整える一団の前に、悠然と王国軍

は姿を現した。

「あ、あれが……！」

一堂は息をのんだ。

武具を身に着け、一糸乱れぬ統制の取れた動きを見せる王国軍は、さながら巨大な一匹の竜のようだった。同じ人間の集団にも拘わらず、バラバラに動き、隊列を整えることすら覚束(おぼつか)ないヘーノイの一団とは雲泥の差であった。

「あいつらと、今から戦うのか……」

震える声音(こわね)で誰かが口にするが、実際は戦いにすらならないだろう。ヘーノイの一団は心身共に疲弊し、王国軍の威容を目の当たりにして士気は

地に落ちてしまっている。未だに誰も逃亡しようとしていないことが既に奇跡であり、開戦すればその奇跡もろとも王国軍に踏み砕かれる。

そんな最悪の未来を一団が脳裏に浮かべる中、居並ぶ王国軍から一人の騎兵が前に歩み出た。

「ヘーノイとエシオに告ぐ！　我らはナトラ王国軍である！　この地での騒乱は許されることではない！　全員、武器を捨てて投降せよ！」

騎兵の降伏勧告が高々と響き渡る。

もしもこれが前日のことだったならば、ヘーノイもエシオも反感を露わにし、自らを奮い立たせていたことだろう。しかし今の彼らには強がりを

口にする余裕さえなかった。

しかしそれでも、彼らはその場にとどまり続ける。堤を破壊されることがどれほど重大か解っているからだ。

だからこそ、次の騎兵の言葉に誰しも心を揺さぶられた。

「聞け！　前任の隊長は罷免され、今我らの部隊を指揮しておられるのは、王都より来訪された王太子殿下である！　殿下は投降した者は全て助命し、さらにヘーノイとエシオの両部族と改めて話し合うと仰せだ！」

ざわめきがヘーノイのみならずエシオの一団に

も広がる。

「王太子殿下が指揮してるだって……？」

「王太子って確か、マーデンの三万の兵を打ち破ったっていう戦上手の……」

「そうだ。だがそれ以上に、他国の民すら慈しむ心優しい御方という話だ」

「俺も聞いたことがある……じゃあ、ほんとなのか？　武器を捨てれば俺たちと話し合うって」

彼らの中に希望と葛藤が芽生える。

もしも彼らがもう少し冷静でいられたのならば、あるいは今の状況の不自然さに気づけたかもしれない。突然の同胞の帰還と、もたらされる堤の破

壊計画という重要な情報。それを阻(はば)むために現場へ向かい、極度の疲労を背負わされて敵軍と対峙(たいじ)し、進退窮まったところで伸びる救いの手。出来事の全てを俯瞰できる者がいれば、作為の道筋がありありと見えることだろう。

だが、彼らがそれに気づくことはなかった。気づけないように、心と思考を弱らせることまでもが計画に織り込まれていたからだ。

「繰り返す！　武器を捨てて投降せよ！　王太子殿下は無用な流血をお望みではない！」

煽るように騎兵は声を張り上げ続ける。

そしてヘーノイの一人が武器を地に落とした。

それを皮切りに、周囲の者も次々と武器を手放し、その流れはエシオの方にも伝播（でんぱ）する。

ついには全ての人間が武器を捨て、新たな水源を巡る争いは、一切（いっさい）の血を流すことなく決着することとなった。

◆
◇
◆

「お見事、という他にありませんね」

ウェインの計画のすべてを把握していたロウェルミナは、賞賛を惜しまなかった。

「ありもしない作戦をでっちあげ、間者を送り込み、

敵軍を踊らせる……言葉にすれば単純ですが、成就させるのは容易ではありません。さすがウェインですね」

「マーデンの戦いでの俺の評判がなければ、もう少し拗れてたかもしれないけどな」

二人がいるのは天幕の中だ。外では王国軍と投降した部族たちが食事の真っ最中である。

部族たちにまで食事を振る舞っているのは、疲弊した彼らを労わる(ねぎら)ためにという名目だが、もちろんウェインには別の意図がある。

「しかもこれを機に、対立していた部族を融和させるつもりとは。相変わらず色々考えるものですね、

ウェイン」

「そうでもしなきゃ立ち行かないのが、貧乏国家の辛い(つら)ところさ」

そう、たとえ今回は丸く収まったとしても、根本的にヘーノイとエシオの対立構造を解消しなくてはまた同じような問題は起こりうる。そこでウェインは二つの部族を一つにまとめ上げ、この地を安定させるつもりなのだ。

「殿下、失礼します！」

現れたのはラークルムと、ヘーノイとエシオの部族に送り込んだ四人の兵士だった。

「お呼びにより参上いたしました」

「ああ、全員楽にしてくれ。……レイス、ランダ、カルディア、ゾルト、危険な任務をよくぞこなした。お前たちの尽力があってこそのこの結果だ。後ほど褒賞を取らす」

「「はは―っ！」」

王太子直々に賛辞と褒賞を与えられるなど、一兵士が望める中で最高位の栄誉だ。ウェインに向かって深く敬礼をしながらも、彼らの頬は喜びに緩(ゆる)んでいた。

「ラークルム、お前にはすまないことをしたな」

「多少の悪名を背負った方が睨(にら)みも利(き)くというものです。まして私が指揮していたのでは流血は免れず、私への憎悪

は今の比ではなかったでしょう。それを思えば、何のこともありません」

そうは言っても、結局功績を立てる機会を横取りしてしまったのだ。いずれ埋め合わせをしなくては、と思いつつ、ウェインは再び四人に目を向けた。

「時にお前たち、確か独身だったな？」

「え？　はあ、まあ私はそうですが……」

一人が戸惑いつつも頷き、残る三人も追随する。

「恋人や想い人はいるか？」

全員首を横に振るが、戸惑いは一層色濃くなる。

そんな彼らにウェインは爆弾を投げ込んだ。

「そうかそうか、それなら話は早い。――お前たち、相手の部族の娘を娶るというのはどうだ」

「「はっ!?」」

異口同音に狼狽（ろうばい）する四人にウェインは続ける。

「俺としてはまたこのような事態に陥（おちい）らないよう、これをきっかけに両部族の融和を進めるつもりだ。それには縁戚関係になるのが手っ取り早いだろう。お前たちにはその先駆者になってもらいたい、というわけだ」

「いえ、あの、その」

「同胞のために命を賭けると言っただろう？」

ウェインはトレイスの肩に手を置いた。

「ならば、人生の墓場に片足を突っ込むぐらい訳もあるまい」

驚きと、戸惑いと、何よりそれとこれとは話は別である――という感情が四人の顔に浮かんだ。

ウェインは軽く笑いながら言った。

「まあ、無理にとは言わん。だが王家に残る記録では、両部族が友好を築いていた時期もある。手を取りあえるはずもない、などというのは偏見にすぎんことは知っておけ。――全員下がっていいぞ」

ウェインの指示でラークルムと四人の兵士は天

幕から出て行った。
その足音が遠ざかったところで、事態を見守っていたロウェルミナが口を開いた。
「ウェイン、両部族に友好的な時期があったというのは本当ですか？」
「もちろんだとも。俺が王宮に戻ったらそういう資料が出てくることは間違いない」
「なるほど、とんだ詐欺師がいたものですね」
「為政者が馬鹿正直でいるだけで国が豊かになるというのなら、舌の二枚や三枚、喜んで切り落とすんだがな」
苦笑しながらウェインは立ち上がる。

「さて、これから部族の長と会談だ。悪いが他国の人間にこれは見せられん」

「十分楽しませて頂きましたし、大人しくしていますよ。ですが一人は寂し(さび)いので、早く戻ってきてくださいね」

「それじゃあ交渉が上手くいくことを祈っておいてくれ」

ウェインは手を振って天幕の外へ出る。向かう先は部族の長が待っている場所――ではなかった。

「お待ちしておりました」

少し離れた場所に設営された天幕にいたのは、先に出ていたラークルムだ。そして彼の背後には、

束ねられた無数の武器があった。

「これらが部族が手にしていた武器になります」

「ご苦労」

今回の騒動の発端は河川工事だが、拗れた原因はこの武器にある。武器さえなければ最初に派遣した王国軍の武威で解決されていたのだ。

では武器は一体どこから来たのか？　それを今から調べるわけだが、その情報は重要であり、厳密に管理する必要がある。ロウェルミナに偽りを口にして距離を取ったのもそれが理由だった。

「私の見たところ、作りは新しいものです。ナトラ製ではなさそうですが……」

仮に外国の品物だとすれば、それがどうして北方のナトラに流れ着いたのかが問題だ。こんな辺境で武器を大量に売ろうとしても、買い叩かれる（か）に決まっている。

逆に言えば、買い叩かれても構わないぐらいに武器が余っている国があるということにもなる。そして大量の武器を用意するということは、戦争準備の可能性が高い。

などとラークルムが脳裏で推理を走らせていると、ウェインは苦々しく言った。

「……まずいな」

「殿下……？」

思いがけない主君の様子にラークルムは動揺を抱く。しかしそれもつかの間、ウェインはすぐさま気を取り直してラークルムに言った。

「ラークルム、筆と文を用意しろ。二ニムに伝達を送る。それと部隊を撤退させる準備も始めろ。武器を取り上げて心も折った。当面は武威がなくても代官に交渉は任せられる」

「はーーはっ！」

すぐさま応じるラークルムを横目に、ウェインは彼方を見やる。

その先には、ロウェルミナが待つ天幕があった。

「ーーやってくれたな、ロウェルミナ」

◆◇◆

ロウェルミナは帝国が好きだ。

いくつもの国家、民族、文化、思想、信仰が混ざり合い、雑多で混沌とした帝国が大好きだ。

だから帝国に尽くそうと思った。帝国を支えるのだと夢を見た。そのために貪欲（どんよく）に学び続けた。

そうすれば報われることを疑うことはしなかった。

幼稚な夢が崩れたのは、とある会席でのことだ。

皇帝が長男に政治について問いかけ、長男は答えられなかった。皇帝は不機嫌になり、場の空気が

重苦しくなったところで、同席していたロウェルミナが正答を口にしたのだ。

皇帝はロウェルミナを褒めた。周りの家臣達もさすがは皇女様と彼女を称(たた)えた。長男は顔を真(ま)っ赤(か)にして恥じ入っていたが、彼女は気にしなかった。彼女にとって重要なのは、一刻も早く自分が帝国の柱になることだった。

しかしその日以来、彼女の周囲は変化した。政治について学んでいた時間は詩や踊りを学ぶ時間にあてられ、国政に通じる家臣たちも遠ざけられた。さらに出入りを許されていた朝政の場からも締め出されとなれば、何者かの意思が働いていること

は明白だった。

最初は恥をかかせてしまった長男の仕業かと思ったが、そうではなかった。全ては皇帝が指示したことだったのだ。

皇帝は父親としてロウェルミナを愛していた。だが、後継者として彼女を扱うつもりは一切無かった。

なぜならばロウェルミナが女だからだ。帝国は身分を問わない実力主義を掲げる国だが、それでも女は飾り立てて心地よい声を奏(かな)でさせるのが一番で、まして国政を担わせるものではない――それが皇帝の意思だった。

しかしロウェルミナが本当に身を震わせたのはその後だ。

皇帝の意思が固いとみたロウェルミナは、家臣を通して働きかけようとした。しかし誰一人として取り合ってくれる者がいないのである。

それは皇帝の勘気に触れることを恐れて――ではない。多少の差異はあれど、家臣達は誰しもが皇帝と同じように、女人（にょにん）が政に関（かか）わるべきではないと考えていた。さらには女人たる宮女すらも「それが当然」と考えて疑わないのである。

そして恐るべきことに、彼らに悪意はないのだ。全くの善意と常識から、ロウェルミナが聡明であ

ることを認めながらも、彼女が政治に口出するなどという不幸がないように、彼女を政治中枢から遠ざけたのだ。

その衝撃を、どう言葉に表せばいいのだろうか。

一人や二人ではない。もっと多くの、宮廷はおろか国内の大半の人間が共有している常識という名の壁。その存在を知ったロウェルミナに、出来ることなど何もなかった。

それからロウェルミナは宮殿の奥に籠るようになった。

そこで蔵書を手にとっては、どうせ何を学ぼうと無意味なのだという虚無感がページをめくる手

を止める息苦しい日々を過ごした。周囲に当たり散らしたこともある。なぜ女に生まれたのかと嘆いたことも。けれど過ぎるのは時間ばかりで何一つ解決はせず――そんな妹の姿をみかねた姉が提案をする。気分を変えるために士官学校に通ってはどうかと。

姉の提案にロウェルミナは頷いた。そして姉と相談し、将来の嫁ぎ先を見定めるという名目を立てた。もちろん皇族の婚姻は本人が決めるものではないが――皇帝としても愛娘がふさぎ込んでいる状況には苦慮していたのだろう。姉の口添えもあり、了承された。

入学の際には身分を偽った。色々と理由をつけたが、本当のところはこう思ったのだ。自分がロウェルミナでなくなれば、この息苦しさから逃れられるかもしれない、と。

そしてロウェルミナは――出会った。

「ウェイン、最後の絵が届いたよ」

ストラングによって部屋に運び込まれたのは一枚の絵画だ。著名な芸術家のものであり、その名を知る人間にとっては、思わず額縁を取る手が震えかねないほどの価値がある。

だというのに、ストラングやウェインの手つきはどこか雑だ。

それもそのはず。これらの絵画は全て贋作である。

「いいね、想像以上の出来栄えだ」

「ああ、既に出来上がってる贋作も含めて、相当目が肥えた人間でなければ見抜けないだろうね」

「しかしよく集められたなストラング」

「絵描きにはツテがあってね。グレン、そっちはどう？」

「屋敷への侵入経路と、万が一の逃走経路は準備できている」

応(こた)えるグレンの顔は渋い。

「が、しかしだな、本当にやるのか？　相手は帝国貴族だぞ」

「おいおいおい、そいつは今更だぜグレン。ターゲットの貴族がいかに領民から搾取してきたかはお前も知ってるだろ？」

「まあそれは承知しているが……」

「何も暗殺しようとかそんな話じゃあない。ただあいつが不当に得た金で、不要に集めてきた絵画を、ストラングの持ってきた絵とこっそり交換するだけだ。誰も傷ついたりしないって」

「そうだよグレン。そして見る目のない人間の元から、正しく価値を理解できる人へと絵は渡り、

その代金を搾取されてきた領民に配る。完璧なる正義の作戦さ！」

「正義、正義か……そうだな、そう言われるとそんな気がしてきたぞ！」

「うーん相変わらずちょろいなこいつ」

「そうだねぇ。悪い友人なんかに騙（だま）されそうで心配だよ」

「二人とも何か言ったか？」

「いや何も」

ウェインとストラングが異口同音に首を振ったところで、部屋に二ムが顔を出した。

「商談が纏（まと）まったわ。これで手に入れた絵画を西

へ流す手はずは整ったわね」
「おっし、じゃあそろそろブツを回収しに行くか」
メンバーは次々と部屋を出ていく。ウェインもまた絵画を手に向かおうとして、ふと振り向いた。
「どうしたロワ、ボケっとして」
声をかけられたことで、部屋の端で微動だにせずいたロウェルミナは僅かに顔を動かした。
「……少し観察していただけです」
「観察？　何をだ？」
「貴方ですよ」
ウェインは目を瞬かせ、ふっと気障ったらしく笑った。

「ついに俺のイケメンぶりに気づいてしまったわけだな」
「いえ、そういうのはありません」
「無いのか」
「ありません」
「二度も言うのか……」
「ありません」
「三度目はいらなくない!?」
イケてると思うんだけどなあ、と自らの顔を手でこねるウェインを見ながら、ロウェルミナは重い吐息と共に言った。
「なんというか、ウェインって何の悩みもなさそ

うで羨ましいなと思いまして」
「なに、喧嘩？　もしかしてさっきから喧嘩売られてる？」
「そうではなく、本心からの言葉ですよ。――私は貴方が羨ましい」
物憂げに口にするロウェルミナを見て、ウェインは「そうか」と小さく頷いて、
「じゃ、そういうことで」
「待ちなさい」
踵を返したウェインの襟首をロウェルミナはひっ掴んだ。
「普通ここは私の悩みを聞く場面でしょう」

「いいや、こんな絶対面倒くさそうな案件に俺は意地でも関わらんぞ……！」

「貴族の絵画を掠(かす)めとろうなんて大胆な計画をしてるのに、何を器の小さいことを……」

「おいおいおい、いいかロワ、俺は自分が特別だと思い込んでる馬鹿の横っ面を張り倒して『ざまあああああああああ！』と笑うためならそこそこ頑張れるが、年頃(としごろ)の女子のお悩み相談とか聞いてるこっちも困りそうなことは是が非でも遠慮する男だ！」

「胸を張って言うことではないでしょう！」

「自らの行いに一片も恥じ入ることがなければ、

人は自然と背筋を伸ばすものさ」
そう言って芝居がかった仕草で髪を払うウェインだが、ロウェルミナの手は一向に襟首から離れない。ウェインは仕方なく続けた。
「……というかそういうのはニニムにしろニニムに。女同士だし、そっちの方がいいだろう」
「ニニムではダメです。ウェインでなくては」
「何でだよ」
「何でもです」
しばし二人は視線をぶつけ合う。
やがて折れたのはウェインの方だった。
「ああもう、解ったよ、じゃあ言ってみろ。適当

に相槌(あいづち)ぐらいは打ってやる」

「……悩みというのは、私の家のことです」

「はいきたー！　面倒くさい案件第一位お家事情ぅー！」

茶化(ちゃか)すような物言いにロウェルミナは思わず彼を睨むが、ウェインはどこ吹く風で言った。

「どうせあれだろ？　自分はもっと大きなことがしたいのに、親兄弟から女としての役目以外許してもらえなくてうんざりしてるとかだろ？」

ロウェルミナはギョッとした。

「ど、どうして……」

もしや皇女であることがバレたのかと思ったが、

続くウェインの言葉はそうではなかった。

「学校上位の成績。相手が男でも物怖じせず、自らが対等であると主張するような普段の態度。他にも色々あるが、その辺を纏めるれば普通に予想がつくぞこんなの」

つくわけがない。以前から感じてはいたが、尋常（じんじょう）ではない洞察力だ。

「で、その上でどうすればいいかとか聞くつもりなら、俺は真面目な答えと冗談めかした答えを用意してある。どっちがいい？」

「真面目な方です」

ロウェルミナは迷わなかった。

ならばとウェインは言った。

「戦争を仕掛けろ」

「……は？」

全く予想外の返答にロウェルミナは眼を瞬かせる。

その反応は承知していたのだろう。ウェインは続けた。

「いいか、ロワが今直面してるのは家の問題じゃあない。帝国――いや、大陸が長年積み重ねてきた男尊女卑の思想と文化だ。その重みと厚みがどれほどか、俺でも想像がつかん」

しかし、とウェインは言う。

「それはあくまで人による人のための産物だ。言語やマナーといった、人間相手にしか通用しない局所的な法則（ローカルルール）の一つでしかない」

「……そんな風に考えたことなんて、一度もありませんでした」

ウェインの言は理解できる。生命が老いることや物を投げれば落ちることが絶対の法則だとすれば、なるほど確かに人の定めた思想や文化は局所的な法則でしかない。国の都合、人の都合で変えられるものであり、事実として変わってきた歴史がある。

（だからといって、自分の手で変えればいいなど

とどうして考えられるのですか……？）

ロウェルミナはウェインの正体を知っている。高度な教育を受けていることも。しかしそれならばロウェルミナも条件は同等だ。だというのに彼女はウェインのように割り切った考え方をすることができなかった。

ロウェルミナが悪いのではない。大半の人間が彼女と同じ価値観を抱いている。これに当たり前のように否と言えるウェインが異常なのだ。

「かつて人は手づかみで物を食べていたが、今はナイフやフォークを用いるのが常識になった。なぜか？　昔の誰かがそうすることを広め、民に受

け入られ、文化として定着したからだ。その結果、手づかみで食べる思想と文化は滅ぼされた。同じことは、男尊女卑にも言える」

「……変えられると？　人の手で」

ウェインは躊躇(ためら)うことなく頷いた。

「本来思想や文化に善悪はない。あるのはただ強弱だけだ。弱い人が負けるように、弱い国が滅びるように、弱い思想と文化もまた淘汰される。だからロワ、お前が今の社会に蔓延る思想に否と言いたいのなら、自分の思想を強くして戦争を挑む他にない」

「強くしろ……と言われましても、どうすれば」

「思想の強さは共有する人数に依存する。同じように不満を持っている人間を探して仲間にしろ。言語化して普及に励め。感情論を振りかざして民衆の共感を手にし、弁舌を駆使して識者を言いくるめろ」

ウェインの返答に淀(よど)みは無く、だからこそロウエルミナは戦慄(せんりつ)を禁じ得ない。本当に彼は同い年なのだろうか。悠久の時を生きた賢者か何かなのでは、とすら感じてしまう。

「そして思想の争いにおける勝利とは、正義になることだ。今現在正しいと言われている思想がいかに強大で、自分勝手に他の思想を押し潰そうと

してくるか、ロワ自身も知ってるだろ？　それができるのはその思想が正義だからこそだ。潰されないためには、自らの思想を正義の座に据える他にない」

「……無茶を言いますね、貴方は」

ロウェルミナの今の正直な気持ちとしては、ウェインの言葉をかみ砕いて整理するので精いっぱいで、どうやって実行に移すかなどとはとても考えが及ばない。しかしそれでも、彼の口にしていることが容易ならざる道であることは理解できる。

「場合によっては死に至るでしょう、ウェインの方法は」

「だがやらなければ今の社会に屈することになる。それはすなわち魂の死だ。そう考えれば気が楽だろ？　肉体が死ぬか魂が死ぬか、好きな方を選べばいいのさ」

「全く気楽になれませんよ……」

ロウェルミナは嘆息（たんそく）しながら頭を振った。ウェインの言うことは無茶苦茶だ。実現はとてもではないが現実的ではない。

しかしそう思う一方で、彼女はどこか心が軽くなったのを感じていた。

たとえ現実的ではなくとも、壁に挑むための道筋はある。その事実を知れただけでも、ロウェル

ミナにとって大きな変化だったのだ。

「……ねえ、ウェイン」

出てきた声音は、自分でも驚くほど柔らかく、そして期待に満ちていた。

「もしも私が戦いを選んだら……協力してくれますか？」

「え、やだよ」

ロウェルミナはウェインの脛を蹴り飛ばした。

「痛ぇっ！　何しやがる！」

「普通！　ここは！　頷くところでしょう！」

「馬鹿言うな！　俺は俺でやることがあるんだよ！」

「やることってなんですか⁉」
「色々あるんだよ色々！……まあ実際のところかなり面倒だから、途中でトンズラする可能性の方が高いけど」
「だったら今すぐ諦めて私に協力してください！」
「お前さっきから無茶苦茶言ってるぞ⁉」
「それはお互い様でしょう！」
二人は喚きながらしばし言い争いを繰り広げた。
そして時間がすぎ、互いに頭が冷えたところでロウェルミナは大きく息を吐いた。
「――確かにウェインの言う通り、これは私の問題でした。

私がどうにかするのが当然ですね」
考えてみれば、アドバイスを貰(もら)った上で、さらに手助けを求めるなど厚かましすぎる。
まして向こうはこちらが知っていることに気づいていないが、ウェインはナトラの王太子。彼の立場を思えば頷けるはずもない。馬鹿なことを言ってしまったと、ロウェルミナは反省した。
「ありがとうございます、ウェイン。貴方のおかげで、方針が見えてきました。私の方で色々と考えてみようと思います」
「そいつは良かった。俺も応援ぐらいはするさ」
深々と一礼するロウェルミナに、ウェインがそ

う応じたところで、部屋の外からニニムの声が届いた。

「ウェイン！　ロワ！　何してるの、もう準備できたわよ！」

「っと、話し込んじゃったな」

「ですね。行きましょう、ウェイン」

二人は揃って部屋から廊下に出た。

そしてしばらく歩いていた時のことだ。躊躇いがちにウェインが声をあげた。

「あー……まああれだ、ロワ」

「なんでしょう？」

「必要だと思うなら、俺たちを好きに巻き込めば

いいんじゃないか」

ロウェルミナは思わず足を止めた。ウェインは何事も無かったように歩き続ける。ロウェルミナは慌てて駆け寄った。

「……巻き込まれてくれると？」

ほのかな期待を込めてロウェルミナは問いかける。

「いや、俺は全力で回避する」

期待はこの野郎という感情に変わった。

しかし続くウェインの言葉で、ロウェルミナは彼の真意を得る。

「だから、そっちも全力で巻き込んでこいよ。そ

れで俺が逃げられなかったのならーーまあ、少しは協力することになるかもな」

「……」

今度はロウェルミナは足を止めなかった。

ウェインの横を並んで歩きながら、彼女はたっぷりと間を置いた後、小さく言った。

「ウェインって変な人ですね」

「ロワにだけは言われたくないな」

「では似た者同士ということで」

ロウェルミナは小さく笑った。つられるようにウェインも笑みを浮かべた。

そして二人は並び歩いて、仲間の元へ向かった。

◆
◇
◆

「――ん」

顔に当たる日差(ひざ)しの感触に、ロウェルミナは閉じていた瞼(まぶた)を開いた。

「おはようございます、ロウェルミナ殿下」

挨拶(あいさつ)はフィシュのものだった。ナトラに到着してから、朝は彼女に起こしてもらっている。

ロウェルミナが寝ていたのはあてがわれている王宮の寝室だ。部族争いを治めた後、ロウェルミナはウェイン共々速やかに王宮に戻っていた。

「おはようフィシュ……あふ」
「よく眠られましたか？」
「ええ、懐かしい夢を見ましたよ」
「ご様子からして、良い夢だったようですね」
「そうですね……私にとって、とても大事な記憶です」
もっとも、そう思っているのは自分だけだろう。
なにせあの後貴族の屋敷に忍び込んだところ、予想外の出来事が二つ三つと重なり、てんやわんやの大騒ぎになったのだ。事前に繰り広げた雑談のことなど、ウェインの頭から吹き飛んでいるに違いない。

「フィシュ、今日は特に予定は入っていませんね？」

軽く伸びをしながら確認のために問いかける。

ナトラに到着してから連日会食や各地の訪問、さらには戦場について行くなどしていたが、今日は何もなかったはずだ。

が、返事は記憶と違うものだ。

「そのことなのですが、摂政殿下からお茶のお誘いがございます」

「ウェイン王子から、ですか」

その名前を意識した途端、まだ眠っていた脳が動き出す。

「如何なさいますか？」
「喜んで、と伝えてください」
「かしこまりました」
ウェインのことだ、間違ってもただ雑談するためだけに誘ったりはすまい。
性懲りもなく探りを入れるつもりなのか、あるいは別の意図があるのか。
（何にせよ、受けて立ちましょう）
ロウェルミナは不敵な笑みを浮かべると、ベッドから起き上がった。

その日のナトラ王国は、この季節には珍しく空が晴れ渡り、穏やかな陽気が差し込んでいた。

開かれた窓から吹き込む風も、普段ならばとても浴びてはいられないが、今日ばかりは陽(ひ)とお茶の温もりと合わせることで心地よいものとなる。

「この国に来て多くの驚きがありましたが、ナトラの紅茶の味わいはまさにその一つですね」

席に着き、白磁の器に注(そそ)がれた紅茶を悠然と喫(きっ)するのはロウェルミナだ。

「風味は豊潤で、濁りのない透き通った紅色も見事です。これならば帝国の方でも需要はあるでしょうに、なぜ流通していないのです？」

「原料の茶葉が山岳地帯にしか生えないものでな」
応じるのは彼女の対面の席に着くウェインだ。
「色々試してはいるが、なかなか量産の目途が立たない。おかげでほとんど国内で消費してる」
「それは実に惜しいですね」
「気に入ったなら土産に持っていくか？」
「是非お願いしましょう」
ロウェルミナは微笑み、紅茶を口にする。もしもこの場に芸術家か、それを志す者がいれば、その光景の完成された美しさに思わず筆を取ったことだろう。しかしこの部屋には彼女以外にウェインしかおらず、残念ながら彼はその類の人間では

なかった。

「もうじき帰国だな、ロワ」

「ええ、とても有意義でした」

帝国の使節団が到着してから、間もなく二週間が経過しようとしていた。ウェインの言葉通り、帰還の日はすぐそこだ。

「惜しむらくは、今日までウェインの口から帝国簒奪（さんだつ）に協力するという明言を引き出せなかったことですね」

「はっはっは」

ウェインは大いに笑い――切りこんだ。

「よく言うぜ、端からそんな気はなかったくせに」

場に僅かな間隙が生じた。
その合間でロウェルミナが浮かべたのは困惑の相だ。
「おかしなことを言いますね」
彼女は見るからに動揺していた。
まるで突然身に覚えのない嫌疑をかけられたかのような動揺だ。
「それ以外で、何のためにここに来たと？　貴方達と旧交を温めに？　もしくはただの観光？　あるいはナトラが奪った金山の確認ですか？」
「いいや違う。大きなリスクを負ってまでロワがナトラに来た理由は一つだ」

ウェインは射抜くような眼差しを向けた。

「――全ては、帝国を救うため。そうだろう？ロウェルミナ・アースワルド」

ロウェルミナの表情から動揺が消えた。そしてくすっと彼女は笑った。

「さすがはウェイン……と言いたいところですが、やはり解りませんね。なぜ私がナトラに来ることが帝国を救うことに繋がるのです？」

悪戯っぽく問いかけるロウェルミナに、ウェインは苦々しい面持ちになる。

「素直に白状するつもりはないってことだな」

いいだろう、とウェインは続けた。

「じゃあズバリ言ってやるよ。恐らく冬が開けた春頃、帝国によって征服されたかつての連合国を中心に、一斉蜂起が勃発する。お前は、それを阻止しに来たんだ」

「……それはそれは」

ロウェルミナは優雅に紅茶を一口飲んだ。

「どういう経緯を経て、その結論に至ったのか拝聴しても？」

「ヘーノイとエシオの部族が使っていた武器を見た時、ピンときた。あれは大陸の西側で造られたものであり、それがなぜナトラに流れてきたのかといえば、東への経由地点だからだ。――すなわ

ちあの武器は、内乱に備えて帝国で集められているものの一部に他ならない」

「……栄えある帝国が西側の武器を使うのは愉快な話ではありませんね。ですが、さほど不思議ではないでしょう。帝国で造られる武器は一級品ですが、それを三つの派閥で奪い合えば数も足りなくなります。苦肉の策で西の武器に手をつけるのは自然では？」

「ここまで平等に振り分けられてなければ、な」

ウェインは机の上に書類を放り投げた。

「手勢を総動員して調べ上げた。各地に集められている武器の量だ。どういうわけか、三人の皇子

からなる三つの派閥に均等に配分されている」

ロウェルミナは書類を手にし、小さく唸った。

「短期間でこれほど調べ上げるとは……やはりナトラの諜報網は侮れませんね」

ウェインは続ける。

「他にも占領地の身の振り方も調査した。縁故、恐喝、栄達……表向きは様々な理由でバラバラに三皇子につき、結果として派閥の力が拮抗したように見える。だが、武器の流れを含めてみれば明らかだ。この状況は間違いなく意図して作られている」

「……」

「派閥の力を拮抗させ、内乱の不安を煽る。次に内乱に備えるという名目で、大量の武器を占領地に行き届かせる。そして機を見て同時に各地で反乱を起こし、一気に帝国を撃滅する。そういうシナリオが今、大陸東部で動いている。そうだろう？

ロワ」

ウェインの言葉は雄弁で、真に迫る力強さが宿っていた。余人ならばその熱にほだされるようにして頷いてしまいかねない声音だった。

しかしロウェルミナはそれを跳ねのける。

「まだ足りませんね。貴方の仮説を認めたとして、ならばなぜ私はここに？　私が知っていたという

のならば、兄達に警告すればいいでしょう？」

「したんだろ。だが、取り合ってもらえなかった――いや、取り合った上で放置を選ばれたのか。これだけの仕掛けを完全に隠蔽することは困難だ。俺だったら、偽装した情報をあえて流し、相手を油断させる。恐らく三人の皇子の元には反乱の計画こそ届いてるが、その規模は実体よりかなり小規模に見積もられているはずだ。そして皇子たちはこの反乱を事前に潰すのではなく、他の二派を蹴落とす奇貨にしようと――と考えた」

ウェインは鼻を鳴らした。

「これも正確には、そう考えるように周囲から

誘導されたんだろうけどな。頼りの皇帝が病没し、後を継ぐのはパッとしない皇子たち。いっそ今から西側に通じて――と考える家臣は間違いなくいる」

ここで何よりロワの立場が響く。いかに能力主義を掲げる帝国とはいえ、やはり政治を主導するのは多くが男性で、女性が入る余地はほとんどない。そしてロワ自身、政治的な功績を持っているわけではない。

そんなロワがどれだけ兄達に帝国の危機を訴えようと、周囲の奸臣によって容易に塗ぬり潰されてしまうのだ。

「そして皇子たちが頼れないことを悟ったお前は、賭けに出た。それは反乱を計画している勢力の一つを先んじて決起させ、皇子たちの危機意識を煽り、同時に反乱の確たる証拠を掴むという手だ。その舞台に選ばれたのが――」

「ナトラと、ナトラに隣接するガイラン州――そこを本拠とするアントガダル侯です」

ロウェルミナは感嘆の吐息と眼差しをウェインに向けた。

「お見事ですよ、ウェイン。……やはり、貴方は辿(たど)り着きましたね」

「お褒めに預かり光栄だ、と言えばいいのか？」

「ご褒美にキスしてあげましょう」
「遠慮しとく」
それは残念、とロウェルミナは肩をすくめると、ゆっくりと語りだした。
「概ね貴方の言う通りです。三派の拮抗に違和感を覚え、フィシュにも協力してもらって調査し、計画を察知したのが夏頃でした。ですが兄達は説得できず、かといって自力で解決することもできない私は、自分を餌（えさ）にして計画の足並みを狂わせることを思いついたわけです」
「ロワの持ってる皇位継承権だな」
ロウェルミナは頷いた。

「西側の思惑では帝国を滅ぼした後、東側に進出するつもりでしょうが、反乱を起こそうとしている元連合国家にはまた別の思惑があります。彼らは自国の独立と栄達を願っていますが、西側を脅威にも思っています。ゆえに、帝国を倒し、独立を摑み取ったあと、西側の干渉を跳ねのけるために、スムーズに帝国の力を吸収する必要があるわけです」

「反乱が成功すれば、皇子たちは間違いなく全員殺される。既に国内の貴族と結婚している第一皇女も処刑の対象だろう。となると残るは末子で独身の第二皇女。これを確保できれば帝国の遺産を吸収しやすく……それどころか、自分

の国が第二の帝国を名乗ることも不可能じゃない」
「では、そんな私がろくな護衛もつけずに宮廷の外に出ていたら？」
「多少の無理があっても狙うだろうな」
とんでもない女だ、とウェインは思う。
理屈は解る。他に手段がないのだから、そうするしかないだろう。
しかしそれでもなお踏ん切りをつけられないのが人の性であり、ゆえにこの綱渡りを実行した彼女の胆力が尋常ではないことが解る。
「どこが一番私に喰<いついてくれるか、考えに考え抜き、アントガダル侯に決めました。ここも反

乱計画に加担しているようですが、かつて連合を裏切った過去のせいで立場は低いらしいので。私という駒(こま)は是が非でも欲しいところでしょう」

そこでロウェルミナはにっこりと微笑んだ。

「このタイミングで、ウェインが妃を探しているという話が届いた時はまさに渡りに船でしたよ。おかげでお隣のアントガダル侯の手が届く位置に身を置くことができましたから」

本格的な冬になる前にナトラを来訪したのは、アントガダル侯の軍が自分を確保しに動ける余地を作るがためだ。

しかも確保した後で真冬になれば、帝国軍が動

きにくくなり、春の一斉蜂起まで耐えられる――とアントガダル侯に思いこませる効果も見込んでいるに違いない。長めにとった滞在期間は、侯が軍を興すための時間稼ぎだろう。

ロウェルミナは優雅に語っているが、恐ろしいほど深く練られた計画である。

だからこそ、一つだけウェインには解せない箇所があった。

「……俺がお前をアントガダル侯に素直に引き渡すと言ったら、どうするつもりだ？」

「十中八九それはないと思っていました。そして実際にナトラに来たことで、絶対にそれはないと

確信しています」
「なぜだ？」
「ニニムの存在です」
予想外の返しに、ウェインは僅かに虚を突かれた様子になる。
そんな彼に向かってロウェルミナは思い出すように言った。
「学生時代、ニニムが他の生徒と決闘をしたことがありましたね」
「……それがどうかしたか？」
「周囲はフラム人であることを侮辱されたから、と考えていましたが、普段の物静かで冷静な彼女

を知っていると、どうにも違和感があります。ではなぜそうしたのか？――あれは、自分の手で決着をつけることで、侮辱した生徒に貴方が手出ししないようにするためだったのでは？」

「……」

ウェインは答えなかった。

しかし彼が纏う無言の圧力が何よりも雄弁に物語っていた。

「貴方とニニムの間には特別な絆（きずな）がある。それは何よりも優先されるものだと私は見ました。私を引き渡せば、計画が成就して西側の影響力の肥大化を招きます。特に東西の境目であるナトラは

西の干渉から逃れられないでしょう。――ゆえに、貴方はそうしない。フラム人が奴隷として扱われる西側にだけは、貴方は決して与さない」

「……俺の隣に変わらずニニムがいることがとても嬉しい、だったか」

ウェインは嘆息とともに髪をかき上げた。

「妙な言い回しだとは思ったが、なるほどな、そういう意味合いだったか」

「もちろん友人として正直な気持ちも含んではいましたよ」

ともあれ、とロウェルミナは言った。

「私の隠し事は以上です。私を手に入れるため、

もうじきアントガダル侯が軍を興してナトラに攻め入るでしょう。それをウェインに阻んでもらい、私は帝国を救います」

ロウェルミナを引き渡すことができない以上、アントガダル侯の軍とのぶつかり合いは不可避だろう。使節団の来訪は公式の行事として知れ渡っている。知らぬ存ぜぬを押し通すこともできない。

「……失望しましたか？　友人と言いながら帝国のために貴方達を利用する私に」

あるいは、聴覚に自信がある者ならば気づいただろうか。その問いかけを口にしたロウェルミナの声に、僅かな震えが宿っていることに。

どちらにせよウェインの返答は一つだった。

「まさか。それでこそ俺の知ってるロワ・フェルビスだ」

ウェインはにっと笑った。

「ただし、アントガダル軍は果たして本当に攻め入ってくるかな？」

ロウェルミナの眉（まゆ）が跳ねた。

「……なるほど、そちらも手は打ったわけですか」

考えてみれば、悠長にこのような答え合わせをしているのだ。既に対策は講じていると考えるのが自然である。

（ですが時間的にそう余裕はなかったはず……）

気づいたのが部族の争いを収めた後のはずだ。そこから今日までの時間で打てる手立てなど、たかが知れている。

そして事実、ウェインの一手は実に安易なものだった。

「なに、大したことはしてないさ。ちょっとアントガダル侯に手紙を出しただけだ」

「手紙……？」

「そう、我が国に滞在しているさる高貴な御方が、ナトラを出立した後にアントガダル侯の屋敷に赴くって手紙をな」

ロウェルミナは驚きと困惑を浮かべた。

「……なんですかそれは、その程度のことで」

「その程度ってのが良いんだよ。雑で、適当で、だから簡単に手に取れる。手に取ってしまう。ナトラに攻め入るのはロワがいるからだが、そのロワが労せずして手元に来るのならば、わざわざ争う必要はない――ってな。特にアントガダル侯はより楽な方へ流れる男だ」

「……」

ロウェルミナは猛然と考えを巡らせる。

間違いであったという手紙を送ればそれですむ――とはいかない。自分がここにいるのは公式行事の一環なのだ。使節団が帰国する日はすぐ間近

であり、恐らくは今から手紙を出しても届く前に出立することになるだろう。

自分がナトラに赴く時点で、かなり無理を言っているのも大きい。ここで滞在の延長を望んでも使節団の大半から反対を受けるだろう。そうなれば押し切るのは難しい。

――だが。

「なるほど、そんな手で封じられるとは想像していませんでした。全くの驚きですよ。――本当に、封じられているのなら、ですが」

そしてその可能性は決して高くないとロウェルミナは考える。

ロウェルミナはウェインが先代のアントガダル侯の調査のついでに、その息子である現アントガダル侯についても調べていることを知らない。だが、仮に知っていても同じように可能性は低いと考えていただろう。

ロウェルミナには自信があった。自分の計画の方が通るという自信が。

「今すぐそこの扉から慌ただしく二ムが現れて、敵軍の襲来を告げても驚きませんよ」

だが、自信を持つことにかけてはウェインもまた遅れを取らない。

「いいや、ないね」

ウェインは声高に言った。ガダル軍は絶対に動かない！」

「賭けてもいいぜ。アント

次の瞬間、バン、という音を立てて豪快に扉が開かれた。

「――殿下！」

慌ただしく現れたニニムは、ウェインとロウェルミナの前で傅いた。

「ご歓談のところ、申し訳ありません。至急、お伝えせねばならないことが……！」

唖然とするウェインにロウェルミナは勝ち誇った笑みを向けた。

「ええと、何でしたっけ。確かそう……賭けてもいい、でしたか？」

「……いや、いやいやいや待て待て待て待て、これは何かの間違いで」

「往生際が悪いですよウェイン。ですがまあ、取り立てるのは後にしてあげましょう。今は優先すべきことが別にありますから」

ロウェルミナはニニムに目を向ける。

「それでニニム、アントガダル軍は今どの位置に？」

私も無関係ではありませんから、聞く権利はあるでしょう」

当然の問いかけに、ニニムは眼を瞬かせた。

「――いえ、そのような軍勢の目撃情報は届いておりませんが」
「「はっ？」」
「両殿下にお伝えしなくてはならないことは、全くの別件です」
「「はあっ？」」
ニニムは一息。
「アントガダル侯のご子息、ゲラルト・アントガダル卿が、ただいま王宮にご到着されました！」
「「はあっ――!?」」
ウェインとロウェルミナは、揃って驚愕（きょうがく）の叫びをあげた。

◆第五章◆

当代のアントガダル侯、グリナッヘ・アントガダルにとって、アースワルド帝国侯爵という立場は、甚だ不本意なものだった。

（愚かな父だった……賢し気に振る舞うばかりで、王としての誇りを忘れ、王位を捨てるなどと）

そも、自分は本来アントガダル王家の直系であり、いずれはアントガダル王になっていた人間なのだ。それが先代のアントガダル王があろうことか帝国に臣従してしまい、侯爵家などという屈辱的な地

位に押し込まれてしまったのである。

（帝国に属して何を得られた。国土の半分を奪われ、連合国からは裏切り者と敵視され、帝国貴族からは新参者と侮られ、名ばかりの爵位を与えられただけで帝国の政治には関わ(かか)れずにいる）

全て(すべ)は父の蒔いた種である。その尻(しり)ぬぐいを馬鹿(ばか)馬鹿(ばか)しいことに自分がやらされているのだ。未来のアントガダル王になるはずだったこの自分が。

（そのまま連合に属して帝国を潰(つぶ)していれば、私の代でアントガダルはさらなる飛躍を遂げたはずだというのに）

というのが、グリナッへが常日頃(ひごろ)から抱いている持論なのである。

――得てして、親の心というのは子に届かないものだ。

アントガダル王は見抜いていた。我が子の才気がとても王を務めるに足らないことを。

帝国が倒れ、東大陸が群雄割拠の時代になれば、必ずや我が子の代で国が亡ぶだろうと。

事実、王国時代の半分ほどの所領になったにも拘わらず、グリナッへはその管理を満足にできていない。領地は荒れ、人心は離れていく一方だ。

ゆえにアントガダル王は連合を裏切って帝国に

ついた。アントガダル王国を終わらせ、大陸の歴史に汚名を刻むことを覚悟した。全ては我が子を生かすための決断である。

そして帝国の家臣となった後、帝国の政治と距離を置いているのも、アントガダル王の工作である。魔窟がごとき宮廷に我が子が首を突っ込めば、すぐさま食い潰されると解っていたため、近づかずに良いように計らったのだ。

だがグリナッヘは気づかない。そこで気づけるような人間であったならば、アントガダル王もそのような決断をしなかったのだから、当然と言えば当然なのだが。

そんなグリナッヘにチャンスが巡ってきたのが、今年の夏のことだ。

「侯爵閣下に、耳よりのお話がございます……」

家臣の紹介で顔を合わせたその男は、オウルと名乗り、当初は商人であると語っていた。しかし何度も顔を合わせるうちに、自らの正体を亡国の輩と明かし、元連合国による帝国への一斉蜂起の計画が進んでいることを□□にしたのだ。

グリナッヘは一も二もなく飛びついた。これでアントガダル王国を復活させられる。そうすれば全ては上手（うま）く行く。自分の時代がやってくるのだと、彼は本心からそう確信したのだ。

そしてオウルに誘導されるままに皇子の一派に支持を表明し、内乱の備えという名目で武器を集め始めた。

衰えたとはいえ、ガイラン州においてアントガダル侯爵家の影響力は健在だ。武器も兵も次々と集められた。事は順調――のように思えたが、ここでグリナッへの悪癖がにじみ出る。

（――本当に上手く行くのだろうか）

そも、彼は先代から容姿（ようし）と野心を受け継ぐ過程で勇気と才覚を取りこぼしたと言われる男だ。今でこそ先代への批判を隠そうとしないが、生前は一度足りとも面と向かって異論を唱えることので

きなかった小心者である。このような大それた計画に乗りかかっておいて、泰然としていられるような器ではなかった。

不安に駆られるようになったグリナッヘは、オウルに何度となく計画の詳細や成功の確率を求めた。そうすることで安心を得ようとしたのだが、オウルは極秘だからと要求をかわす。するとグリナッヘはますます不安になり、不信感を募らせる。

何か保険が欲しい。もしもの時に身を護(まも)るための手札が。グリナッヘがそう考えるようになったのは当然の帰結であり、ゆえに、ロウェルミナ皇女が隣国ナトラに外遊に向かうという報(しら)せは願っ

ても無い助け舟だった。

皇女は皇位継承権を持ちながら、供回りはごく少数。ナトラはつい先日マーデンと戦争し疲弊している。皇女を手にした頃には真冬になり、雪に阻(はば)まれて帝国はこちらに進軍できない。そして春になれば一斉蜂起が始まる。

まるで神がそうせよと言っているかのような完全なお膳立(ぜんだ)て。元々反乱に備えていただけに、すぐに兵士は用意できた。後はグリナッヘの号令で、ナトラへの進軍が開始するのみ。

しかしそこで、グリナッヘの動きは止まる。

その手には、ナトラより届いた手紙があった。

◆◇◆

アントガダル侯爵の館の一室にて、グリナッヘはしかめ面を隠そうとも、せずに対面する相手を睨（にら）んでいた。

「これがかねてより侯爵閣下がご所望されていた、計画に参加している方々の連名にございます……」

机を挟んで恭（うやうや）しく頭を垂れるのは、今や顔見知りとなったオウルだ。ただし、それが本名かどうかはグリナッヘの知るところではないし、また興味もない。重要なのはこの男が蜂起計画の窓口で

あることだ。

「ご覧頂ければお解りになられるかと存じますが、名を連ねられておりますのは、侯爵閣下が轡を並べるに値する方々ばかり。これを閣下にお預けするのは、ひとえに閣下の才気と賢智を信頼すればこそです。計画の成就には皆様方の足並みを揃(そろ)えることが何よりも肝要ですので、なにとぞ軽挙は謹んでくださいますよう……」

「貴様に言われずとも解っておるわ！」

差し出された書類で机を叩きながら、グリナッヘは声を張り上げる。

オウルの言葉通り、計画の参加者の情報は以前

からグリナッヘが要求していたものだ。しかしこれまでオウルはそれを見せようなどとは思っていなかった。

事情が変わったのは、グリナッヘが兵の準備を始めたことだ。その狙(ねら)いがナトラにいるロウェルミナ皇女だと気づいたオウルは当然慌てた。グリナッヘは成功を確信しているが、オウルにとってみれば、成否に関わらず蜂起計画失敗のリスクを上げる行為でしかないのだ。

ゆえに、自重を求めるためのご機嫌取りとして、連名を記した書類を差し出したわけだが、さすがのグリナッヘもこの露骨な扱いには苛立(いらだ)ちを抱く

他(ほか)にない。

まして、今の彼にはそれどころではない事情があるのだ。

「もうよい、下がれ！兵は領内に留めておく！」

「……ははっ」

オウルは背中に不服を滲(にじ)ませながら部屋を出ていく。

しかしグリナッヘはそんな無礼をすぐさま忘れる。それどころか、あれほど欲していた計画についての書類も、雑に目を通すと放り投げてしまった。

代わりに彼が取りだしたのは一通の手紙だ。

何を隠そう、隣国ナトラの王太子からの文である。

内容は簡素なもので、ナトラ国に滞在している
さる高貴な御方が、アントガダル侯の屋敷への来
訪を所望されているーーというものだ。
（まさかこのような手紙が届くとは……）
この高貴な御方というのが、ロウェルミナ皇女
であることは考えるまでもない。
しかし疑問がある。何故（なぜ）ロウェルミナ皇女がア
ントガダルを訪れることを望んでいるのか。そし
て何故ナトラの王太子経由でその連絡をするのか
で、ある。
理由は明確には記載されていなかった。しかし
穴が空くほど手紙を見つめみると、文面の所々に

この件はロウェルミナ皇女独自の判断であり、内密にしてもいらいたいという意図が滲みでているのが解った。

（つまり、ロウェルミナ皇女は皇子派閥に行動を知られることを嫌がったのだ）

そう考えれば納得である。ロウェルミナ皇女の周りは皇子派閥の人間だらけだ。表だって手紙など出せば、内容は瞬く間に検閲されることだろう。そのためナトラの王太子を経由したのだ。

ただし、あくまで手紙の内容が本当なら、の話である。

（ロウェルミナ皇女がここを訪れる理由がまるで

見えん……）

どうしてもその点だけが解らず、ゆえにグリナッへは手紙を信じ切れずにいた。

あるいはグリナッへがもう少し革新的な考え方をできる人間ならば、ロウェルミナが皇位のために三派を出し抜いて派閥を強化しようとしている、と勘違いして納得したかもしれない。だが、男尊女卑の思想に固まった彼の脳からは、そのような思い付きは夢にも出てくることはなかった。

グリナッへとしては手紙を信じたい。これが正しければ軍を差し向けることもなく、ロウェルミナ皇女が自ら手中に収まるのだ。まさに天運。王

に返り咲けと運命が促しているようだ。

しかし同時に、やはり都合が良すぎるという思いも過る。どうしたものか――

というように悩んでいたのが、数日前のことである。

この悩みは予想外の形で解決した。

原因は偶然帝都の方から戻ってきていた息子のゲラルトの存在である。

ゲラルト・アントガダルといえば、帝国において放蕩息子の代名詞のごとき存在である。

政治は元より武芸や教養にもまるで興味を示さず、日がな色事に現を抜かしてばかり。それで事

件を起こしたことも一度や二度ではなく、その度に侯爵家の立場を利用して強引（ごういん）に解決するような人間だ。

そのことにはグリナッへも苦々しく思っていた。なぜ自分からあのような不出来な息子が生まれたのかと真剣に悩むほどであるが――まあ、息子は息子だ。評判が悪いとはいえ大事な跡継ぎであり、いずれ態度を改めるであろうと楽観していた。

そんな息子がロウェルミナ皇女に熱を上げているという話も聞いていた。夜会で他の貴族と険悪になった際に、取りなしてくれたのが彼女であり、以来何度もプレゼントや文を贈っているという。

そしてゲラルトは手紙を知るや否(いな)や、こう言ったのだ。

「遂に私の気持ちが届いたのだ！　皇女殿下は私と会うことを望んでいるに違いない！」

さらにゲラルトは、これまでのアプローチの返事が芳しくなかったのは、他の皇子達がアントガダルと皇女の接近を危険視したからに違いないと主張し、「未来の妻を一刻も早くこの手に迎えなくては！」と言って止める間もなく飛び出してしまったのだ。

さしものグリナッヘもこの息子の暴走には呆気(あっけ)に取られた。

しかし時が経つにつれ、もしもそうならば、という感情が湧き上がってくる。

ゲラルトとロウェルミナ皇女の縁談が成立すれば、アントガダルは帝国の皇族の一員と成りうる。それどころかいずれ皇帝そのものが一族から誕生するかもしれない。

グリナッヘは自らの能力に自信がある。ただ仮に蜂起が成功して、帝国が滅んで群雄割拠の時代になった後、帝国ほど版図を広げられるのかと問われれば、伸びた鼻も縮こまるというものだ。

（少なくとも、ゲラルトが真偽を確かめるまで待つだけの価値はある）

ロウェルミナ皇女をミナトラから奪った上で蜂起計画に乗って帝国を滅ぼすか。

ロウェルミナ皇女とゲラルトを結婚させて帝国の皇族となるか。

グリナッヘの胸中で、天秤（てんびん）が揺れていた。

その天秤自体が、二人の策略家によって造られた虚構だとも気づかずに。

◆◇◆

グリナッヘの屋敷は、ガイラン州のサリュードという大きな街の中心にある。

元々はアントガダル王家の別荘の一つだったのだが、帝国に臣従するにあたって王宮は明け渡すことになり、代わりにこの屋敷を新たに侯爵家の本拠地とした歴史があった。

普段は穏やかな場所なのだが、現在この街にはグリナッヘによって集められた兵士達が詰めており、彼らがそこかしこで騒動を起こしていた。

領主たるグリナッヘの元には街の人間達からの陳情が届くも、グリナッヘはどうでもいいとばかりに取り合わない。結果さらに兵士達は統率を失い、乱暴狼藉を恐れた住民たちは息をひそめて家に籠(こも)るようになっている。

その有様（ありさま）を横目に、屋敷から出たオウルは時折背後を注意しながら路地裏を歩き、やがて小さな家屋の扉の前で足を止める。

そして扉を二回、一拍置いて三回叩（たた）く。すると音もなく扉が開き、オウルは滑るようにして中に入った。

家屋の中には数人の男たちがいた。服装こそ市民を装った姿だが、その物腰には剣呑（けんのん）な雰囲気があった。

「いかがでした隊長。グリナッヘの様子は」

「愚か者とは、あいつのためにある言葉だ」

オウルは舌打ちしながら男たちを見回す。隊長

という呼称の通り、ここにいる者たちを統率する立場にあるのがオウルだった。グリナッヘは、自らの膝元（ひざもと）にオウルの手勢が密（ひそ）かに集まっていることなど知りもしない。

もっとも、彼らの目的は帝国を滅ぼすことだ。グリナッヘに語った通り、そこに偽りはない。

ただし、それ以外の部分についても真実とは限らないが。たとえばそう――出身などは。

「ゲラルトの方はどうなっている？」

「従者に潜ませている手の者から、もうじきナトラ入りするとの連絡が」

「止められそうにはないか……王太子と皇女の調

査は進んでいるか？」
部下の一人が頭を振る。
「芳しくありません。王太子も皇女も身辺になかなか入りこめず……」
「どこぞの馬鹿（ばか）共とは大違いだな」
オウルは苛立ちを隠そうともせずに吐き捨て、改めて一同を見回す。
「ともかくゲラルトと王太子と皇女の三人の動きを注視しろ。帝国打倒の計画を成就するためには、僅（わず）かな綻（ほころ）びとて見逃すわけにはいかん」
「「はっ！」」
指示を受けた部下たちが迅速に動き出す。

それを見届けながらオウルは視線を西へ――ナトラへ向けた。

（全く、こうも予想外の展開になるとはな……）

皇女の突然のナトラ訪問。あれで順調だった流れに変化が生じた。そして今、グリナッヘの息子のゲラルトまでもその渦中に飛び込んでいこうとしている。

果たして今、ナトラで何が起きようとしているのか。そのことにオウルは思いをはせずにはいられなかった。

◆
◇
◆

「貴殿がナトラの王太子か」
ウェインが王宮の玄関ホールに到着するや否や、その声は放たれた。
十数人もの供回りを連れた男は、二十代の終わり頃といったところか。
飢えというものに無縁であろうふくよかな体型。およそ苦労というものを刻まれたことのないなだらかな横顔。身にまとう衣服は最高級の生地で、華美な装飾品が所狭しと飾られている。
いうなれば、贅を凝らしたーーというよりも、贅で凝り固めたかのような人間である。

「こうして顔を合わせるのは初めてになるな、ウェイン王子。私がグリナッヘ・アントガダルの子、ゲラルト・アントガダルだ」

「……これはこれは、よくぞ参られたゲラルト卿」

抑揚のない声音（こわね）でウェインは応じた。

「かねてより、帝国の重臣たるアントガダル侯爵家とは誼を通じたいと思っていたゆえ、卿とこうして出会えたことを嬉（うれ）しく思います。――しかし突然のことに些か驚きましたが。何用でここに来られたので？」

ゲラルトは意気込みも露（あら）わに言った。

「無論、我が愛しき一輪の花、ロウェルミナ皇女

を迎えるためだ」

（こいつマジかあああああああああ!?）

ウェインは思わず脳裏（のうり）でツッコミを入れた。

言うまでもないが、ここはナトラ王国の王宮である。国家運営における中枢であり、ウェインを筆頭とした要人も多く働いているため、常に厳重な警備が敷かれている。

本来ならば関係のない人間がおいそれと入れる場所ではない。もちろん時には他国の人間を招くことはあるが、その時も事前に綿密な調整を行った上だ。

つまるところ、他国の貴族が共をぞろぞろと連

れて、アポイントも取らずに押し掛けるなど、非礼どころか正気を疑うような所業である。

（しかも口ワを迎えに来たってお前さあ……！）

ニニムから、このゲラルトがロウェルミナに懸想をしていることは聞き及んでいる。

間違いなく、アントガダル侯爵に向けて出した

あの手紙を、偶然家に戻っていたゲラルトが読んでしまったのだろう。そして恋心を拗らせてこうして押しかけるにまで至った、といったところか。

押しかけという点ではニニムも同じだが、あちらはあくまで建前であり、それに事前の調整もすませている。こちらの暴走っぷりとは比べるべく

もない。

（あと俺（おれ）を軽んじるのは別にいいけど、せめても少し取り繕ってくれよ！）

先ほどからゲラルトの態度には、ウェインを王太子として敬う素振（そぶ）りがない。

恐らく自分はウェインと対等、あるいは格上だと思っているのだろう。アントガダル王国が帝国に臣従せずに独立を保っていれば、彼はウェインと同じ王太子なのだから、その気持ちは解らないでもない。

が、それをこうも表に出されると困る。ウェインを主君と敬っている周りに示しがつかない。

「なるほど、事情は解りました」

ともかく場を切り替えようとウェインは決めた。

ついでに周りの溜飲が下がるように、かつゲラルトが少しは自重するようにと僅かな毒を添える。

「古来より恋は人を盲目にするといいますが――どうやらその理からはゲラルト卿も逃れられなかったようで」

「うむ、その通りだ」

（今の皮肉だからあああ！　気づいてええええええ！）

ウェインの願いなど意に介さずゲラルトは続けた。

「それで、私を待ち望む花笑みはどこに？」

誰(だれ)も望んでないから、という思いを抑えながらウェインは言った。

「そう焦(あせ)るものではありませんよ、ゲラルト卿。女性の準備には時間がかかるというものでしょう。まして卿ほどの男に会うとなれば、髪の一房とて妥協はできない。ここは鷹揚(おうよう)に構えてみせるのが男の器というものでは？」

「……確かに王子の言う通りだな。私も些か心が乱れていたようだ」

些かどころではないが、それを指摘するわけにもいかない。

「部屋を用意してあるので、ひとまずそこで休まれるのが良いでしょう。夜には二人のために宴を開きますので」

「では、お言葉に甘えさせてもらおう」

ゲラルトは我が物顔で供回りを引き連れながら宮廷の奥へと案内されていった。

その背中を見届けた後、ウェインは疲労を滲ませながら呟（つぶや）いた。

「さて――ニニム」

「はっ。こちらへ」

ニニムはウェインを手近な部屋に案内する。部屋には誰もおらず、二人きりだ。

そこでウェインは小さく息を吐き、
「何で来てるんだよゲラルトオオオオオオオオオオ！」
叫んだ。
「来るか!?　普通来るか!?　ここ隣国の王宮だぞ!?　招かれてもないんだぞ!?」
ウェインは喚きながら隣のニニムを見る。
「なあ、ニニムもそう思っ……う……」
同意を求めたその声は、しかし尻すぼみになって消えた。
そこにかつてないほど不機嫌なニニムがいたからだ。

「ええっと、ニニムさん……？」
先ほどまでの憤りなど一瞬にして吹き飛んだウェインが恐る恐る声をかけると、ニニムは吐き捨てるように言った。
「……ゲラルト（あいつ）、ずっとウェインのことを見下してたわね」
「あ、ああ、まあ帝国の侯爵家の跡取りだしな。あれぐらい別に」
「良くない」
ニニムの声には有無を言わさぬ凄みがあった。
「何一つとして、良くないわ」
「……」

ここでかける言葉を間違えると不機嫌がこちらにも突き刺さってくる。そう確信したウェインは、慎重に言った。

「そうだな、良くない。だが、そのためにニニムが怒るのはダメだ」

「私が誰にどう怒ろうとダメ出しされる謂れは無いわ」

「あるとも。お前は俺の心臓だ。その心があんな奴（やつ）に占められるのは俺が許さん」

この理屈にはさしものニニムも面食らった顔になった。

生じた隙（すき）を逃すことなくウェインは畳みかける。

「それにほら、怒りなんて大体仕事を失敗させる原因になるんだ。どうせなら楽しいことを考えろよ」

「……楽しいことって？」

ウェインは数秒ほど考えて、

「俺のこととか？」

冗談めかして口にすると、しかしニニムは至極真面目な顔になり、小さく言った。

「……そうする」

「お、おう」

ニニムの怒気が消えていくのをウェインは感じた。納得してくれたらしい。

ウェインは内心で安堵しつつ、手近な椅子に腰かけた。

するとごく自然に、その膝の上にニニムが座った。

「……ニニムさん？」

「気にしないで」

無茶である。が、ニニムはその無茶を押し通すつもりのようだ。

「来たのが軍じゃなくて良かったわね。正直今回ばかりは間に合わないと思ってたわ」

ウェインが口ウェルミナの狙いを看破したのは、彼女が滞在を始めてからしばらく経った頃だ。送った手紙が届くよりも早く出兵されていれば、も

はや止められなかっただろう。

「向こうが寸前まで出兵に踏み切っていなかったのが幸いしたわね」

何事もなかったかのように話を続けるニニムを見て、ウェインは彼女を膝からどかすことを諦め、会話に応じることにした。

「……いや、そこは寸前まで悩んでるだろうってのは想定してた。それ込みでも際どいとは思ってたけどな」

「例のアントガダル王の研究のおかげ？」

「そういうこと」

ウェインは頷いた。

「グリナッヘ・アントガダルは決断から逃れ、責任から逃れ、自分を助けてくれる正解が降ってくることを漫然と期待する人間だ。大陸の命運を左右するような選択を前にして、即断即決できるような器じゃない。……こいつを助けるために帝国に身売りしたんだから、アントガダル王も無茶するよな」

もはや喜劇じみた話だ。嫡子たるグリナッヘが親の思いを顧みないのに、隣国の王太子が正しくその心の内を理解しているのだから。

だがそのウェインの意識とて、グリナッヘの息子たるゲラルトにまでは及んでいなかった。

「それでウェイン、この後はどうするの？　私としてはあれを一刻も早く追い出したいんだけど」

「そしたら今度こそ軍がやってくるだろ。だからダメだ。……俺がすべきことの一つは、今頃部屋でめっちゃ悩んでるだろうロワの妨害をすることだな」

ゲラルトの来訪が二二ムの口より告げられた後、ロウェルミナはフィシュと共に部屋に戻った。自らの計画が破たんしたことで修正を余儀なくされたのだ。

「ロワの目的はナトラとアントガダルをぶつけることよね。となるとこの後の宴を台無しにしよう

とするのかしら？」

「いいや、帝国の中枢に後ろ盾を持たないロワがアントガダルを弾劾するには、アントガダルは自分を誘拐しようとした叛逆者という構図か、それに近しいものが必要になる。ナトラ（うち）とアントガダルが普通に喧嘩（けんか）してるようじゃあダメなんだ」

「それじゃあどう出ると？」

そこでウェインは渇いた笑みを浮かべた。

「恐らく、ロワが取る選択は――」

「ゲラルト・アントガダルを篭絡します」

部屋でフィシュと向かいあうロウェルミナは、そう静かに宣言した。

「そして私との婚姻を餌に、蜂起計画の全容を証拠と共に証言してもらいましょう」

「はっ……しかし、よろしいのですか？」

「全くよろしくありませんよ」

ため息を混ぜながらロウェルミナは続ける。

「ゲラルトが私に懸想していることは知っていましたが、ナトラの王宮にまで押し掛けてくるとは完全に想定外です。後れを取った以上、今までの計画に執着していては更なる痛手を招きます」

「彼の者の暴走は、摂政殿下が出したとされる手

紙によるものと思われますが、そこの追及はされないのですか？」

「ウェインの思惑通りというのは癪（しゃく）ですが、言い逃れる準備はしているでしょう。今は置いておきます。ナトラを悪役にしたところで、私に利点はありませんからね」

大陸東部で蠕動する一斉蜂起計画の阻止。これがロウェルミナの最優先すべきことだ。何があろうともその一点はブレない。

「そしてこの後の宴で、ウェインもゲラルトと私を結びつけるよう動くでしょう」

「摂政殿下と協調すると？」

「ええ、その点において私とウェインの利害は一致していますから」

しかし、とロウェルミナは続けた。

「その先については話が別です。私はゲラルトを味方につけ、彼を扇動します。そして――」

「ロワの計画には続きがあるんだ」

ウェインの言葉に二ムは小首を傾げた。

「一斉蜂起の阻止――の、続きってこと？」

「そうだ。ロワはな、本気で狙ってるんだ。――皇帝位を」

ニニムは驚くよりもまず、戸惑いの顔になった。彼女が愛国者であることは知っている。ゆえに自分を囮（おとり）にして帝国の窮地を救おうとしていることも理解できる。しかし彼女が皇帝になれるかといえば話は別だ。

「さすがに実現は難しいと思うけれど」

「そのために今回の件があるのさ」

いいか、と前置きしてウェインは続けた。

「ロワの本来の計画では、自分を餌にしてアントガダルにナトラ（うち）を攻撃させ、アントガダルを悪役にして打ち負かす。そしてアントガダル侯を引っ立てて蜂起計画をぶちまけさせ、ご破算にさせる

わけだが――この時、外から見るとさもナトラ(うち)がロワについたように映るだろう？」

今度こそニニムの顔に驚きが走った。

実体は降りかかる火の粉を払っただけだが、ウェインの言う通り、ナトラがロウェルミナに付き従ったようにも見える。

「けれどナトラ(うち)を味方につけたところで皇帝選には」

「干渉する力はない。が、国家の後ろ盾があるという看板は掲げられる。そこに加えて三皇子を出し抜いて帝国の危機を救った智謀と胆力だ。どちらかだけじゃ効果は弱いが、二つ揃えば話は違っ

てくると思わないか？」

「……」

思える。

これまで見向きもしてこなかった諸侯が、ロウエルミナに注目することは想像に難くない。

そこからさらにロウェルミナが皇帝の器を示せば、三皇子から離反して彼女につこうとする者も出てくるだろう。

「……でも、その計画は崩れたわけね。ゲラルトがここに来て、彼を篭絡するとしたら、もうアントガダルがナトラ（うち）を攻める理由はないもの」

「そうだ。……だから、恐らくは逆をしようとし

てくる」

「逆って……？」

ウェインはにっと笑った。

「――ゲラルトの手で、グリナッヘ・アントガダルを討伐させます」

これにはフィシュはギョッと目を見開いた。

「殿下、それは一体……」

「アントガダルがこちら側につけば、蜂起計画の阻止は可能でしょう。ですが皇帝選に向けてアントガダルを私の勢力に組み込む場合、蜂起計画に

一枚噛(か)んでいた事実は重石になります。内外に対して明確な禊が必要です」

「そのためにゲラルトに父親を討(う)たせる、と？」

慄くフィシュだが、ロウェルミナは事も無げに頷く。

「筋書としては、父親が帝国に対して反乱を起こそうとしていることを知ったゲラルトは、偶然にも皇女から隣国に招かれ、そこで皇女に恐るべき計画を打ち明ける。それを知った皇女はゲラルトと共に反逆者を討伐する――といったところでしょうか」

フィシュは唸(うな)りながら思慮を巡らせる。

恐らくロウェルミナならば可能だろう。ゲラルトを篭絡し、動かし、彼女が語ったような流れを引き起こせるはずだ。

しかしこれには問題があった。

「殿下、我が方の手勢もゲラルト卿の供回りもごく少数。とてもアントガダルを討伐するには……」

「足りないでしょうね」

ロウェルミナはにっこりと微笑んだ。

「なので、ナトラの兵をお借りしましょう」

「なんてロワは考えてるだろうが、冗――談じゃね

え！」

ウェインは叫んだ。

「帝国が倒れて西側がデカイ顔をするのは確かに面倒だ。だからそれを防ぐために協力するのは構わん。が、皇帝選については話は別だ。そんなもののために兵力を割く気は毛頭（もうとう）ない」

「というか予算が無いものね」

先のマーデンとの戦争による出費は、今も重くのしかかっている。

ここからさらにアントガダルと戦争などすれば、財政は火の車を通り越して灰になりかねない。

「そういうわけでこっちがすべきことは、ロワが

ゲラルトを誑し込むのをサポートしながら、アントガダル討伐に兵を貸すという言質を取られないことだ」

「なかなかハードな会談になりそうね」

「まあ、なんとかするさ。ニニムは家臣達のフォローを頼む。俺とロワの縁談の話だったのが、急にゲラルトが出てきて戸惑ってるだろうしな。あと、ゲラルトの供回りも適当に酔わせて、ゲラルトの人となりとか手に入るだけ情報を集めておいてくれ」

「解った、やっておくわ」

ウェインは頷き、軽く天を見上げた。

「などとウェインは考えているのでしょうが、そうは行きません。是が非でも兵を出してもらいます」

「ここはやはり、ゲラルト卿を出汁に引きずり出しますか？」

「ええ、いずれはアントガダル領を継ぎ、あるいは私の夫になるやもしれないとなれば、今ここで縁を繋(つな)いでおきたいと考えるのが必然でしょう。ウェインのことですから、あの手この手でゲラルトに付け込もうとするはずです。――その隙を突

きます」

ロウェルミナはフィシュを見る。

「ともあれこちらは私がやります。着いてきたお兄様たちの家臣がどういうことだと今頃騒いでるでしょうから、フィシュはそちらの方を静かにさせておいてください」

「はっ、お任せください」

ロウェルミナは頷き、静かに瞼（まぶた）を閉じた。

（全く、こんなデカい計画に巻き込んでくるとは、やってくれるなロワの奴）

（完全に詰みと思っていたのがこうも躱（かわ）されると
は、さすがウェインですね）
（だが――）
（ですが――）

（――最後に笑うのは、この俺だ／この私です）

かくして、二人の策略家は互いに勝利を確信しながら宴へと向かう。
そしてすぐにも示されるのだ。
この二人の確信の、どちらが間違いであったのかが――

◆
◇
◆

「――さすがゲラルト卿。素晴らしい見識を持っておられる」

「ゲラルト様のような方が未(いま)だ表舞台に立っていないのは、帝国にとって大きな損失ですね」

「いや、はっはっは」

月の浮かぶ夜。催された宴の中で、ナトラの王太子ウェインと、アースワルド帝国皇女ロウェルミナに挟まれたゲラルトは、人生の絶頂の中にいた。

「ウェイン王子とロウェルミナ皇女にそこまで言

われると、さすがに面映ゆいな」

現在、作戦は第一段階にある。

すなわち、ウェインとロウェルミナが協力してゲラルトをよいしょしまくり、心のタガをどんどん外してしまおうというものだ。

「何を言うかと思えば」

ウェインは鷹揚に笑った。

「私はただ事実を指摘したのみですよ。ありもしない影に美辞麗句を述べるほど、私の口は軽くはないと自負していますので」

心にもないことを、とロウェルミナの視線が突き刺さったがウェインはもちろん無視する。

「ウェイン殿下の仰(おっしゃ)る通りですとも」
すると今度はロウェルミナは淡く微笑んだ。
「今でも帝国の侯爵家という大事な柱になって頂きましたが、ゲラルト様はアントガダル王家の血を引いておられる御方。その高貴な血を思えば、私達がどれほど言葉を並べても足りないほどです」
どの口でほざく、とウェインの視線が飛んできたがロウェルミナは当然無視した。
「いや、はっはっは、これは参った参った」
作戦は順調だ。ウェインとロウェルミナという立場のある人間に褒めそやされ、ゲラルトは喜色満面である。

当然、二人を疑う心など微塵(みじん)もない。ゲラルトの自尊心が器として見られるとしたら、今頃黄金で形作られた二人の言葉が酒とともになみなみと注(そそ)がれていることだろう。

一方で、この宴に参加している他の者たちは複雑な顔をしていた。

宴にはゲラルトの従者達と、帝国の使節団の一部と、それを接待するナトラ王国の家臣たちが陪席しているわけだが、ゲラルトの従者たちは主(あるじ)が機嫌がいいことを喜んでいるものの、王太子と皇女が揃って持てなしているのはさすがに過剰に見えるのか、戸惑いがある。

帝国使節団に至っては困惑を通り越して不快感を滲ませている。

フィシュが事前に話を通していたものの、そも彼らは皇子側の人間であるためロウェルミナの計画を告げられない。ゲラルトが突然やってきたので、ロウェルミナ皇女がウェイン王子と共に応対することになった、ということしか言えずにいた。

ゆえに、彼らにとってみれば、他国での公式行事の最中でゲラルトが横やりを入れてきた形になる。しかもその無礼を取り繕うためにロウェルミナ皇女がわざわざ応対しているというのに、皇女に対する不敬な態度ときたら、もはや噴飯ものだ。

相手が侯爵家ということもあり、直接口には出さないが、帝国貴族の面汚しも甚だしいと全員が思っていた。

そして事実を告げられていないのはナトラの家臣も同じだ。ロウェルミナによって戦争に巻き込まれそうになっていると知れば、面倒ごとが起きるだろうというウェインの判断である。

ただし彼らに関してはウェインに対する信頼があるため、使節団ほど戸惑いはない。ともかくウェインに指示された通りに応接しようという意思があった。

そういうわけで、宴は進んでいるものの、周囲

からは「どうなっているのだ？」「解らん……」といった囁き(ささや)声が漏(も)れ聞こえている状況である。

とはいえ、そんな雑音は当然ゲラルトの耳には届いていない。なにせウェインとロウェルミナという二人の策士が共謀して彼の相手をしているのだ。この結果は当然といえる。

しかし二人が協力しているのはあくまでゲラルトを篭絡するという一点のみ。作戦が第二段階に差し掛かると、主導権を握るべく、ウェインとロウェルミナは火花を散らし始める。

「我がナトラ王国が、二人が巡り合う一助になれたことは実に喜ばしいことです。この報せを聞けば、

父君のグリナッヘ侯もさぞ喜ばれるでしょう」
ウェインがこう口にすれば、
「あら、それでは私と共に戻って来いと急かされてしまいますよ。せっかくゲラルト様とお顔を合わせる機会に恵まれたのです。今しばらくこの件は秘して、私達だけの時間を楽しみませんか？」
ロウェルミナはそうゲラルトに囁く。
今の二人のやり取りを解りやすく翻訳すればこうなるだろう。
「さっさとグリナッヘに連絡して兵を解散させてこいや」
「させません。いっそグリナッヘが暴発するまで

焦らします」

もちろんゲラルトにこの翻訳された内容が入ることはない。

使いこまれていない上に酒に浸された彼の脳髄に収まるのは、二人が口にした言葉通りのものだけだ。それが解っているからこそ、二人は舌戦を繰り広げる。

「しかしロウェルミナ皇女、仮に御身とゲラルト卿が夫婦になるとなれば、アントガダルのみならず帝国の一大事。混迷の中にある臣民にとって大いに励みとなることは間違いないかと。一刻も早く公表するのが皇族の務めでは？（訳・いいから

アントガダルと組んで蜂起計画潰しにいけよ」

「ですが持てなされてばかりで、何もお返しできずにナトラを去るのは心苦しく思います。いかがでしょうウェイン王子、私達とともに帝国へ参りませんか？　私とゲラルト様を結び付けてくたさった御方ですもの、心から歓迎いたしますよ（訳・ナトラが後ろ盾にあると周知してくれるなら考えますが？）」

「お誘いはありがたい。ですが、私は父の代理としてこの国を支えなくてはならないので。ロウェルミナ皇女に皇族としての姿勢を説きながら、自分が蔑ろにするわけにはいきませんので（訳・絶

対行かねえ。皇帝選については自力でどうにかしろ」

「そうですか……それでは今日にでも手紙を認めることにしましょう。お兄様やグリナッヘ侯爵の驚く顔が、目に浮かぶようですね（訳・手紙について表ざたにしますよ？）」

「それならば私も文を添えましょう。なに、未来のアントガダル侯爵とその夫人のためならば、この程度の助力は惜しみませんとも（訳・はぁーん!?　何のこと解りませんなー!?）」

などと、このような調子でしばし会話を続けていた二人だったが、不意にその流れに変化が生じた。

「殿下、ご歓談中のところ失礼致します」
背後に控えていたニームが、そっとウェインに書類を差し出した。
「急ぎ殿下にご確認して頂きたい案件が」
ウェインは書面に目を通す。余人の眼に触れても大丈夫なよう、表向きはありふれた事業の報告書だが、ウェインとニームだけが知っている符牒が仕込まれていた。
「失礼、しばしお二人で時を過ごしてもらいたい」
断りを入れると、ここぞとばかりにロウェルミナはゲラルトに攻勢をかける。
それを耳にしつつウェインは符牒を読み解く。

中身はウェインがニニムに依頼していた、ゲラルトについての調査報告書だった。

（えーっと何々、ゲラルトがアントガダル領に帰還していたのが偶然ではないと判明……え、マジで？）

予想外の始まりに、ウェインは思わずニニムを見た。すると彼女は小さく頷いて、冗談の類ではないことを告げる。

（いやでも、偶然じゃないってどういうことだ……？）

困惑しながら読み進める。そこにはゲラルトの半生が記されていた。

ゲラルト・アントガダルは帝国侯爵家の嫡男として産まれ、何一つ不自由することなく育てられた。

アントガダル領にいる間の彼に苦悩や葛藤、挫折や後悔などという出来事はなく、舗装された道のりを馬車で行くがごとく、順風満帆な人生を過ごしていた。

しかし帝都に赴くと話は変わった。権力という殻で守られてきたゲラルトに、裏切り者のアントガダルという侮蔑（ぶべつ）が容赦なく向けられたのだ。

温室育ちのゲラルトにこのストレスは甚大だった。結果として彼は安易な酒と色に走り、黄金と宝石をバラまき、自分に耳障りの良いことだけを

口にする人物で周りを固めた。帝国でも名うての放蕩息子の完成である。

そんな折、彼はとある夜会でロウェルミナと出会い、何度もアプローチを仕掛けるようになる。これがただの一目ぼれであったのならば救いはあるが、実体は違う。彼は単にロウェルミナの人気を感じて、そんな彼女を手に出来ればきっと自分も認められるであろう――という劣等感から無意識にロウェルミナを求めたのだ。

しかしそのような歪(ゆが)んだ求愛がロウェルミナの心に届くはずもなく、すげなく躱される。すると今度は怒りが彼の心を満たした。たとえ皇女

とはいえ、侯爵家の嫡男である自分をこのように扱っていいのか。こんな理不尽が許されるのか、と。

皇女が突如ナトラへ向かった時にその怒りは爆発(ばくはつ)する。表向きは外遊だが、実情は縁談の話し合いということを耳にしたゲラルトは、使用人を片っ端から鞭打(むちう)ち、ロウェルミナを口汚く罵(ののし)った。彼が侯爵家の人間でなければ、間違いなく不敬罪で捕まっていただろう。

その後、彼は突然帝都からアントガダル領に戻る。それはなぜか？

ナトラから帰還するロウェルミナの一行を襲撃するためである。

（ぶっは!?）

ここまで読んだところで、ウェインは心の中で噴き出した。

（これマジ……？）

思わず二ニムを見ると、彼女は神妙に頷く。頬（ほお）が若干ひきつっているのは、彼女もまたゲラルトがここまでの人間とは考えていなかったためだろう。もちろんウェインとて、まさか侯爵の子息が一方的な逆恨みで皇女への襲撃を計画していたとは想定外だ。

しかも続きを読む限りでは、ゲラルトにとってそれは正しい行いだったらしい。裏切ったのは口

ウェルミナの方であり、自分の手で解らせてやらねば気がすまない――いや、正義のためにそうしなくてはならないと信じ切っていたのである。

そんな状況が変わったのは、件の手紙が原因だ。

手紙を読んだゲラルトは、人目もはばからず涙を流したという。

『おお――信じていた甲斐はあった。私の想(おも)いは伝わっていたのだ』

ロウェルミナを罵った事実など、既に彼の脳内からは抜け落ちていた。代わりに浮かぶのは、妻としたロウェルミナを隣に侍らせ、帝国市民より祝福される自分の姿だ。

かくして彼はロウェルミナを迎えるために、ナトラに向かうことを父親に告げて飛び出したわけである。

（……なるほど）

資料を読み終えたウェインは小さく息を吐いた。

（こいつやっべえ）

ドン引きである。

癖（くせ）のある人物だとは思っていたが、これほどとは。

他に代替として利用できる相手がいれば、間違いなくそちらに乗り換えていたことだろう。

そしてなんという運命の悪戯か。ウェインはそのゲラルトを、友人たるロウェルミナとくっつけ

る算段をつけなくてはいけないわけだが――

（まあそれはいいか）

一秒たりとも迷うことなく、ウェインはその点を割り切った。

（俺が優先すべきなのは俺の利益（りえき）だ。それに今の状況も半分くらいロワが招いたようなもんだしな！　つまり自業自得！）

本人が聞けばさすがに頬をひきつらせそうなことをウェインは考え、その上で挑発するような眼差（まなざ）しをロウェルミナに向けた。

（――それに、その程度の人間も御せないようじゃ、皇帝なんて夢のまた夢だぜ、ロワ）

すると彼の視線を感じ取ったロウェルミナは、小さく笑みを浮かべた。

彼女はウェインと違ってゲラルトの供回りに探りを入れるような手駒（てごま）は持たない。

しかし帝都にいた頃からゲラルトの人となりは掴（つか）んでいる。彼が一筋縄ではいかない気性の持ち主であることは理解していた。

それを踏まえた上で、御せる。御してみせる。

そういった自信と自負を込めた笑みだった。

だがその時だ。ウェインとロウェルミナの、無言のうちに意思を通じ合わせるかの様子に、間にあるゲラルトが反応した。

「……そういえば、あのような手紙を送るのだ。二人は以前からの知己であったのかな？」

ゲラルトのその言葉に、暗い嫉妬（しっと）が含まれていることは、二人にとって明白なことだった。

そしてもちろん、ゲラルトがそういった感情を抱いた場合のことも二人は想定しており、動揺はない。

「ああ、帝国に留学した時期に出会いましてね。いや思えば実に惜しいことをしました。当時にゲラルト卿のことを耳にしていれば、友誼を結ぶべく足を運んだのですが」

すらすらと虚実を並べるウェインにゲラルトは

小さく頷いた。

「……確かに、私も帝都で長く過ごしていたが、ウェイン王子の噂（うわさ）はまるで耳に届かなかったな。帝都ではどのような暮らしを？」

ここで身分を偽って士官学校に通って首席の成績を取っていた――などと馬鹿正直に口にしては、ゲラルトは大層顔を歪めるだろう。ウェインは虚実織り交ぜながら返答をする。

「私としては帝国の文化を満喫したかったのですが、いかんせん帝国で学ぶべきことが多すぎたもので。日がな屋敷で過ごしてばかりで、娯楽といえば余暇に剣を振り回す程度ですよ」

これならばゲラルトが自分の存在を知らなくても不自然ではない。そう思ったウェインだったが、予想外のところにゲラルトは喰いついた。

「ほう……王子は剣の腕に覚えが？」

「……まあ、嗜み程度ですが」

何やら嫌な流れを感じたウェインだが、せき止める間もなくゲラルトは言った。

「それは奇遇だ。剣技ならば、私も心得がある」

（（絶対嘘だ――））

ウェインとロウェルミナは一瞬にして同じ結論に至った。

しかしこれについては他の人間も同じ感想を抱

いただろう。ゲラルトの体型、筋量、足捌(さば)き、全てにおいて剣技に心得がある人間のそれではない。

ではなぜゲラルトはそんな嘘を口にしたのか。

（俺がロワと仲良さげでムカつくから、剣で打ち負かしてマウント取ろうって魂胆か）

というわけである。

そういう目的ならばせめて別の手段で挑めばいいのでは、と余人ならば思うだろう。しかし何もゲラルトとて無作為に剣を選んだわけではない。

ウェインたちの与り知らぬことではあるが、彼は普段から自分の従者を剣で打ち負かし、悦に浸っているという事実があった。

もっとも、いかにゲラルトの機嫌を損ねることなく上手く負けるかで、日々従者たちが苦心していることについては、ゲラルトもまた与り知らぬことなのだが――ともあれ、剣に心得があるというゲラルトの言葉に偽りはなかったのだ。少なくとも、彼にとっては。

（どうするよこれ）

ウェインは視線をロウェルミナに飛ばす。

ロウェルミナもまた呆（あき）れを滲ませながら視線で応じた。

（適当に相手をして満足させてあげるしかないでしょう）

（その適当ってのが難しいんですけどおおおおおお）

（ふぁいと、おー、です）

自分は見てるだけなのだから、ロウェルミナは余裕の表情だ。こん畜生、とウェインは内心で毒づいた。

「どうだろうか王子、ロウェルミナ皇女の前で我らの剣技を披露するというのは」

ゲラルトの発言に周囲は色めき立った。当然だ。ウェインにしろゲラルトにしろ重要人物であり、万が一にもケガなどしたら大問題になる。

「殿下……」

背後に控えていた二二ムが一歩前に踏み出る。
それをウェインは手で制した。
「案ずるな、余興だ。木剣を」
ウェインは上着を脱いで木剣を受け取ると、会場の中央に躍り出る。
周囲の家臣や使用人たちが慌ただしく場を広げる中で、同じく木剣を手に持ったゲラルトがウェインの前に立った。
「王子、勝敗の程はいかにして？」
「では、先に剣を落とした方で」
構えながら二人は向かい合う。
この時、周囲の人間達はウェインの勝利を確信

していた。何もウェインを贔屓したわけではない。全身が揺れ動いて安定しないゲラルトに対して、呼吸や視線、剣先に乱れのないウェインを見て、その剣力の格差を感じ取ったのだ。

しかし当の二人は周囲と全く違うことを考えていた。

（ウェイン王子には私の引き立て役となってもらおう）

ゲラルトはそう自らの勝利を確信し、

（さあて、どうにか丸く収まるように片づけなくちゃな）

ウェインは互いの面子（メンツ）やその後の展開も含めて

思慮を巡らせる。

（目的のためにはゲラルトに花を持たせる必要がある。だが、俺も立場的に人の眼があるところでおいそれと負けられん）

そうなれば狙うべきは――ゲラルトの持っている木剣だ。

ゲラルトの木剣の握りは甘く、簡単に叩き落すことができるだろう。

そして落としたと同時に自分も木剣を手放し、引き分けに持ち込むのだ。そのために勝敗条件を剣を落とすことに設定したのである。

（正直酔っぱらってるゲラルトじゃいつまでも剣

を振り回せないだろう。十中八九、すぐにバテる。何合か打ち合いながら、息切れと同時に仕掛ける か）

ウェインが方針を固めたところで、状況が動いた。

「でええええいあああああああ！」

沈黙に耐えかねたように、ゲラルトが奇声と共にウェイン目がけて地を蹴(け)る。

剣を振りかぶっての、作為も何もない突進だ。捌くことも受けることも容易だが、必要なのは安直な勝利ではない。

「ふっ――」

木剣同士がぶつかり合い、渇いた音が広間に反

響した。

それが二度、三度と立て続けに鳴り響き、ウェインは押されているように装いながらゲラルトの動きと、彼の持つ木剣の位置を冷静に捉(とら)え続ける。

そうしている内に、ウェインの予想通りゲラルトの呼吸が乱れて出足が鈍る。頃合(ころあい)いだ。ウェインはタイミングを見計らいながら呼吸を整え――

（――今だ！）

踏み出した。

瞬間、ゲラルトの足がもつれた。

「へっ――？」

それは酔いによるものか、あるいはウェインの

気迫に圧（お）されたのか。

真実は定かではないが、ウェインが動くのに示し合わせたかのようにゲラルトは体勢を崩した。

そしてつんのめったことでゲラルトの頭部の位置が下がり、奇（く）しくもその先にあるのは――今まさにゲラルトの持つ木剣を狙って放たれたウェインの剣である。

（おいいい

ええええええ！）

ウェインは腕に全力を籠めた。

彼の祈りと筋肉による指示が届いた木剣は、奇跡的に軌道をズラし、ゲラルトの顔を掠（かす）めると、半ば手放されかけていたゲラルトの木剣に命中した。

鈍い音と甲高い音が、ほぼ同時に鳴り響いた。

片方はゲラルトが床に転がった音であり、もう片方はゲラルトの木剣が床に叩き落された音であった。

そしてウェインは、木剣を振り抜いた姿勢でしばし固まっていたが、やがてゆっくりと構えを解

いて剣を降ろした。

周囲から歓声が上がった。

旗から見れば、完璧（かんぺき）ともいえるウェインの勝利である。ゲラルトに対する好感度の低さから、ナトラの家臣達は元より、帝国の使節団すら手を叩いていた。

そして当然ながら、その喝采（かっさい）を一身に浴びるウェインと、それを眺めるロウェルミナはこう思っていた。

（やべえええええ勝っちゃったあああああああ！）

（なに勝ってるんですか貴方はあああああああ

あ！）

二人揃って絶叫である。

軌道を変えるために腕に全力を込めたため、木剣同士が衝突した瞬間に剣を手放すことができなかったのだ。おかげで引き分けにすることができなかった。

（い、今からそれとなく剣を落として誤魔化（ごまか）り……！）

小細工を弄しようとするウェインだが、衆目がそれを許さない。

どうしたものかと必死に頭を回転させていたその時だ。

「殿下っ！」

それに呼応してウェインニムが声をあげた。ここには顔を羞恥（しゅうち）と怒りで染めながら、落とした木剣を拾いあげてこちらに突進しようとするゲラルトの姿があった。

（――まずい）

瞬間、ウェインが抱いたのは、不意を打たれたことへの焦燥（しょうそう）――ではなかった。

この期に及んでもなお、ゲラルトの攻撃を木剣で防ぐことはウェインにとって難しいことではなかったからだ。

彼が懸念（けねん）したことは、このままではゲラルトが、

取り決めた勝負で完敗したにも拘わらず不意打ちをした卑怯者になってしまうことだ。そうなれば、彼の名誉を回復させることは非常に難しい。

（防ぐのはだめだ、ゲラルトが攻撃したという事実が残る。同じ理由で受け流すのもだめ。とにかく受けずに回避しかない。それもごく自然に、攻撃を避けたと思われないように――！）

出来るのか。いややるしかない。

ウェインはゲラルトと肉薄するまでの僅かな間に、全身全霊で彼の突進を見定め、そして――

躱した。振り向きざまに、すれ違うように。

（よっしゃ完璧――！）

後は今のゲラルトの行為を、木剣を拾おうとした拍子にバランスを崩してつんのめったとでも強弁して押し通せばいい。そう思いながら、ウェインは真横を通り過ぎたゲラルトを眼で追って――

今更だが、宴が開かれているこの部屋は二階にある。

さらに言えば、打ち合っている内に二人は室内の壁際にほど近い位置にまで来ていた。そして当然ながらその壁にはいくつも窓がつけられている。

そこに、ゲラルトは突っ込んだ。

「あっ」

とウェインが言った。

けたたましい音がして、窓ガラスが割れ砕けた。
「えっ」
とロウェルミナは驚いた。
ゲラルトの勢いは窓を割っただけで止まらず、そのまま彼の上体が窓枠を越える。
「「ちょっ」」
とウェインとロウェルミナは声をあげた。
二人の見ている前で、部屋側に残っているゲラルトの下半身が浮き上がり――
落ちた。
窓の外に。
重いものが地面にぶつかる音が、すぐさま届いた。

「――」

その場にいた全員が、一連の光景に呆気に取られて固まった。

そこから真っ先に復帰し、動いたのは、控えていたニニムだった。

呆然（ぼうぜん）としている全員の前を駆け抜け、窓枠を乗り越えて迷いなく飛び降りる。二階というのは、ニニムにとっては問題ない高さだった。

次いでウェイン、ロウェルミナ、さらに従者達も慌てて窓枠に駆け寄り下を覗（のぞ）き見る。

「ゲ、ゲラルト様!?」

「ニニム！　ゲラルト卿は無事か!?」

全員が見守る中で、ニニムは地面に横たわって動かないゲラルトの傍(かたわ)らに膝を突き、容態を確認する。

数秒の後、ニニムは非常に困窮した表情を浮かべた。

「その、なんと言いますか」

二人を見上げ、恐る恐る二ニムは言った。

「真に申し上げにくいのですが――亡くなられております」

ウェインとロウェルミナは、揃って顔を見合わせた。

◆第六章◆

宴の翌日。
執務室は重苦しい雰囲気に包まれていた。
その原因はもちろん机に突っ伏して欝々としたオーラを放つウェインだ。
傍(かたわ)らにはニニムが控えているが、彼女の表情もまた苦い。
「……なあニニム」
突っ伏したままウェインが声を発した。
「何かしら」

「例えばの話だが――突然怪しい手紙で隣国に呼び寄せられた大貴族の子息がいたとしよう」
「ええ」
「そいつが現地で死んだとしよう」
「ええ」
「周囲はどう感じると思う？」
ニニムは一息挟んだ後、言った。
「――確実に暗殺されたと思うでしょうね」
「ですよねえええええええええええ！」
ウェインは叫びながら起き上がると、バンバンと机を叩(たた)いた。
「いや、もう、何で!?　何で死んでるのゲラル

ト!?　嫉妬（しっと）に駆られて出来もしない剣の戦いを吹っ掛けて、負けたからってキレて不意打ちしようとしたら勢い余って窓から落ちて首の骨折るとか、お前、もう、お前、お前さあああああああ！」

「びっくりするぐらいコロッと死んだわね……」

「おかげでこっちも死にそうだわ！　計画破綻（はたん）どころかこのままだとアントガダルどころか帝国と戦争まで有り得るっつーの！」

なにせゲラルトは帝国に名を連ねるアントガダル侯爵の子供。正真正銘の貴族だ。それが他国に招かれた先で死んだとなれば、アントガダル侯にとっても帝国にとっても攻め入る大義名分として

十二分である。

「どうして、どうしてこうなった……俺(おれ)はただゲラルトをおだてて丸め込んで口ワとくっつけて帰国してもらいたかっただけなのに……」

顔を覆(おお)いながら呪詛のようなうめき声を漏(も)らすウェイン。

ニニムとしても彼の気持ちは解る。まさかこんな盤面をひっくり返すような事態になるとは、どうして予想できようか。しかし、このままにしておくわけにはいかない。

「恨み言は終わった後で好きなだけ聞くから、ともかく今は切り替えましょう。これからどうする

か考える必要があるわ」

ニニムの正論を浴びたウェインは「ぐぇー」と一際（ひときわ）大きく亡者のように唸（うな）った後、欝々としていた顔をスッと引き締めた。

「――まず、すぐさま帝国が動くことはない」

「同感ね。帝国は皇子の三派に分裂している上に拮抗してる。ここでナトラにすぐさま攻め入れるフットワークは無いわ」

「次はアントガダル侯だが……ゲラルトが連れてきた従者の確保はどうなってる？」

「概ね確保して軟禁はできたわ。けれど二名、いつの間にか行方（ゆくえ）をくらませてる。確保した連中の

証言によれば新参の従者だったみたい」
「ボンクラの従者にしちゃ判断が早いな……」
「ゲラルトの死はすぐにグリナッヘに届くかしら？」
「可能性は高いし、そうでなくても目撃者にはロウェルミナが連れてきた帝国の家臣団もいるからな。帝国貴族が死んだとなれば本国に報告するだろうし、かといってそいつらは軟禁できない。いずれアントガダル侯の耳に届くことだ」
ただし、とウェインは続けた。
「届いたとしてもアントガダル侯もすぐには動かない。あれは間違いなく、息子がどういう意図で

殺されたのかを考え、悩み、迷い、時間を浪費する」

「まさか事故死したなんて夢にも思わないでしょうね」

「俺も夢にも思わなかったがな！」

ああああもおおおお、と再び喚きだすウェインを二ムは宥(なだ)める。

「はいはい落ち着いて。ともかく、その間にこちらは手を打たなきゃいけないわけね」

「ああ、そういうことだ……」

ウェインは大きく息を吐いた。

「俺の思惑、ロワの思惑、アントガダルの思惑、

その他もろもろ……その全(すべ)てがしっちゃかめっちゃかになった今、先に主導権を握った人間が大きく有利になる。つまり控えめに言って、状況はまだイーブン……！」

「というからには相当追い込まれてるってことよね」

「やかましい！　後ろ向きになったって落としたものを拾いに行けるわけじゃないんだからいいんだよ！　ともかく、ここから俺が先手を取り続ければ、この件で暗躍してる連中全員にほえ面かかせることはまだ十分可能な圏内……のはず……！」

その時、執務室の扉が叩かれた。

現れたのは使節団の応対を任せている官吏の一人だ。

「失礼いたします、殿下。今しがた、ロウェルミナ皇女より至急面会したいとの申し出が」

（ほげええええええええ!?）

ウェインは内心でほえ面をかいた。

「如何いたしますか？」

「……ロウェルミナ皇女の要望となれば断れないな。通してくれ」

「はっ」

従者は下がり、扉が閉じられる。

そしてしばしの沈黙の後、ニニムは呟（つぶや）いた。

「先手、取られちゃったわね」
「ぬあああああああああ！」
ウェインは叫んだ。
「やっべえ、ロワがどう出てくるか考えが纏(まと)まってない……！」
「帝国貴族を死なせたことで抗議をしてくる、とか」
「可能性は高い。だとするとそれに伴って何を要求してくるかだが……」
高速で思考を巡らせるウェインだが、結論を出す間もなく再び扉が叩かれる。
「ロウェルミナ皇女殿下をお連れしました」

（もう少しゆっくり連れてこいよおおおおお！）

理不尽な文句を内心で官吏に飛ばしている内に、連れられて姿を現せたロウェルミナがウェインに向かって一礼した。

「お忙しいところ申し訳ありません、ウェイン王子」

「……いやなに、ロウェルミナ皇女を拒む扉など、ナトラにありはしませんよ」

僅（わず）かに硬い笑顔を浮かべながらウェインは言った。

「ただご存知（ぞんじ）の通り、昨夜の件の対処に追われていまして。できれば手短にお願いしたい」

牽制(けんせい)しながら出方を探る。そうしながらウェインの内心は決意に燃えていた。

（さあ来い、何でも言って来い、絶対に弾(はじ)き返(かえ)してやる……！）

今ここでロウェルミナに主導権を渡すわけにはいかない。彼女が何を要求してくるかは不明だが、何であっても頑として突っぱねるのが唯一の正解だ。

「では、手短に」

こほん、とロウェルミナは軽く咳払(せきばら)いし、ウェインもまた応じるように息を整え――

「降参します」

「――はあ？」
ウェインは思わず困惑の声をあげた。

◆◇◆

「ゲラルトが……死んだ……？」
執事から告げられた言葉に、グリナッヘは持っていた書類を取り落とした。
「ど……どういうことだ!?　何故あいつが死なねばならん!?」
「そ、それが、今しがたゲラルト様の従者が駆け込み、ナトラの王宮にてゲラルト様が転落死され

たと……」

「馬鹿(ばか)な！　何かの間違いであろう！」

「私もそう思いました。ですが従者はこれを……」

執事が差し出したのはゲラルトの懐剣だった。宝飾品が散りばめられたそれを見間違うことはない。

「従者の話によれば、ゲラルト様に付いていた他(ほか)の者達は全てナトラの兵によって捕らえられ、自分だけが辛うじて脱出してきたと……」

グリナッヘは足元が崩れるような感覚を抱いた。すぐ傍(そば)にあった机に手を突き、辛うじて体を支えながら、彼は絞り出すように言った。

「その従者は今、どうしている……？」

「激しく衰弱していたため、休ませております。ナトラの兵から逃げ延びながら、ここまで何も口にせずにいたようですので……」

「……解った。そやつが目覚め次第、何が起きたのか全て聞き出せ。それとしばらく一人で考える。誰(だれ)も部屋に寄せ付けるな」

「はっ……」

執事が下がり、一人になったグリナッヘは、苦悶(くもん)の表情になった。

「どうなっている……なぜ、なにが……」

無意識に口から零(こぼ)れでる問いかけは、今まさに彼の胸中を支配する疑問だ。

ゲラルトが死んだ。異国の地でその命を失った。

（病死……事故……いいや、まさか）

ゲラルトは殺された。間違いない。

ではなぜ。どうして殺されなくてはいけなかったのか。

（事の始まりは、手紙だ。恐らく手紙は――ゲラルトを狙った罠だった）

ゲラルトがロウェルミナ皇女に思いを寄せていることを知った上で、屋敷に戻っているところを狙って手紙を送り、まんまと誘いだしてゲラルトを殺したのだ。

すなわち計画を敷いたのはナトラ。従者たちを

捕らえたという点からも間違いないだろう。□封じのためにそうしたのだ。

ではなぜナトラがゲラルトを殺す必要があったのか。

（ゲラルトに恨み……しかしそのためにここまでするか？　ましてゲラルトは帝国貴族……それも侯爵たる私の子だぞ）

それをわざわざ呼び寄せて殺すなど、無茶がすぎる。□封じしたとしてもいずれは露見し、そうなれば帝国に喧嘩（けんか）を売ったも同然だ。

そこでグリナッヘはハッとした。

（そうだ、息子を殺されたのだ。これならば攻め

入る大義名分として申し分ない。そしてロウェルミナ皇女を……）

グリナッヘにとってそれはいわば逆転の発想だ。だがすぐさま別の疑念が浮上する。

（……いや、そもそもロウェルミナ皇女は暗殺計画を知っていたのか？）

手紙は王太子名義ではあったが、内容は皇女の意思を告げるものだ。

手紙が王太子の独断ではなく皇女の同意の上で手紙を出したとするのならば――協力していると考えるのが自然だ。

ではなぜ皇女が王太子による帝国貴族暗殺に協

力したのか。

「――まさか」

グリナッヘはその予感に身震いした。

（気づかれていたのではないか……反乱計画に……）

それこそグリナッヘにとって最悪の想像だった。

恐らくロウェルミナは全てを知ったわけではないのだろう。それならばこんな迂遠なことをする必要はない。しかしその摑（つか）んだ一部の情報の中に、自分が反乱計画に絡（から）んでいるというものがあったのだ。

そこでロウェルミナは一計を案じた。ナトラの

王太子に何らかの取引を持ち掛け、ゲラルトをおびき出す。そこでゲラルトから反来計画について情報を引き出そうとしたのだ。

（殺されたということは役目は終わったということだ……どこまでだ、どこまでゲラルトは知っていたのだ……）

反乱計画については、さしものグリナッヘも他人に漏らすようなことはしていない。息子であるゲラルトが相手であっても同じだ。しかし兵や武器を集めるグリナッヘを見て、何か感づいていた可能性はある。

もしもゲラルトが全容を知り、かつ暴露してい

ればーーナトラを攻めるどこではない。報(しら)せを受けた帝国軍がここに差し向けられる可能性もある。

（いますぐ防衛を……待て、それよりもどうにか言い逃れを……いや、いっそ皇女を確保してしまえば……だが……だが……）

思考がぐるぐると渦を巻き、結論が出ないまま危機感だけが募っていく。

もはや状況は完全にグリナッヘの許容量を超えていた。

それでも考える事だけはやめられず、グリナッヘは出口の見えない迷宮をさまよい続ける。

◆◇◆

「一体どうなっている……！」

ゲラルトの死の報せを受けたのはグリナッヘだけではなかった。

捕縛されることなく逃げたゲラルトの従者。それはオウルが潜伏させていた手の者であり、その密偵が出した報告が今、オウルの元に届いていた。

「ゲラルトが死ぬなど……よりにもよって、このタイミングで」

「皇女の前で王太子と演武を披露していたところ死亡とのことですが……」

「やはり暗殺でしょうか？　事故の可能性が高いとはありますが」

「それ以外に何がある。いかにゲラルトとはいえ異国で事故死するほど間抜けなものか」

しかしそうだとしたら、何のために。

当然というべきか、オウルもまたグリナッヘと同じその疑問へ辿(たど)り着く。

だが彼がグリナッヘと違うところは、その疑問の答えを出すよりも優先すべきことがあるのを忘れていないことだ。

（ナトラとアントガダルが戦争になれば、その結果がどうあれ多くの耳目が集まる。反乱計画の

準備が終わっていない段階で、そのように目立つ真似（まね）は回避しなくてはならん）

オウルは思慮を巡らせ、決断した。

「――全員聞け。これより作戦を変更する」

◆◇◆

ロウェルミナがウェインの部屋に赴く少し前。

彼女はフィシュと共に、部屋で顔を突き合わせて唸っていた。

「困ったことになりましたね……」

ゲラルトを旗幟としてナトラを巻き込み、アン

トガダル侯を大逆罪で討つ。

そんなロウェルミナの構想は、今や粉々に砕け散っていた。

ウェインの言っていた通り、全て台無しにされて頭を抱えているのは彼だけではなかったのだ。

「フィシュ、間違いなくゲラルトは死亡したのですね？」

「はっ……私も死体を検分いたしましたので、間違いございません。また死因に不審な点はなく、首の骨折による即死です」

「そうですか……この状況で暗殺は考えにくいですし、やはり事故死なのでしょうね」

ロウェルミナは深く息を吐いた。

するとフィシュが真剣な面持ちで言った。

「恐れながら殿下、ここは一度帰国されることを考慮に入れるべきかと」

ロウェルミナの眼差(まなざ)しに鋭さが増す。だがフィシュはひるまない。

「元よりこの計画は薄氷を渡るもの。ひとえに殿下の計画が知られることなく時を迎えることが何よりも肝要でありました。しかしながら計画は摂政殿下に看破され、ゲラルト卿を利用する策も水泡に帰しました。使節団として同道している皇子派の家臣達も、今でこそゲラルト卿の死に動揺していますが、既に予定していた帰国の日を迎えている

以上、ここに留まろうとすれば不審を抱くでしょう。もはやこの地で策謀を巡らせることは困難であると進言いたします」

フィシュの言葉は徹頭徹尾正論だった。

ゲラルトの死を引き合いにしてナトラに留まることこそ認めさせたが、そも使節団の多くはなぜゲラルトが現れたのか、そしてなぜあれほどまでにウェインとロウェルミナが彼をもてなしたのか、答えを得ていない。いずれロウェルミナへの不信を抱くのは間違いなかった。

「帝国の窮地を救い、さらに皇帝位へ踏み出さんとする殿下のご意思は重々承知しております。そ

のために殿下の計画が最大の機会であったことも。

「……機を逸しましたか」

「はっ……」

フィシュは痛ましげに頷(うなず)いた。

フィシュとて現状には口惜しさがあるのだ。大使として失脚し、燻っていたところを拾い上げられ、再び帝国のために働ける機会を与えてくれたロウエルミナには恩義がある。

女の身でありながら皇帝位を目指すという野望にも惹(ひ)かれた。フィシュもまた外交官として身を立てていた頃に、男尊女卑の風潮による壁には何

度もぶつかった経験がある。それを覆さんとする彼女に協力したいという思いは強い。

まして彼女の才気と愛国心は本物だ。帝国の窮地を救うため、自らを餌（えさ）として外国に身を置ける皇族がどれほどいようか。

計画が成功さえしていれば。そう思う気持ちはあるが、もはや詮無きことだ。

「これ以上逃した獲物の影に執着していては、御身さえ危のうございます。ここは帝都へ戻り、次善の策を練るのが上策かと」

事ここに至れば、最も優先して然（しか）るべきはロウエルミナの身の安全だ。たとえ当のロウェルミナ

からどれほど反発されようとも、とにかく彼女を無事に帰国させること。それが自らに課せられた役目であるとフィシュは確信していた。

「……フィシュ」

美しくも冷たい声音（こわね）で名を呼ばれ、フィシュは心胆を引き締める。

勘気を恐れて口を噤むようでは臣の名折れ。彼女に登用されてまだ数か月ほどだが、それだけの忠節を抱く価値のある人物である。何を言われようとも諫言は撤回すまいとフィシュは固く決意し――

むぎゅ、と抱きしめられた。

「わっ、えっ、で、殿下？」
全くの予想外の出来事にフィシュは眼を白黒させた。
「これは、ええっと、どのような意図が……？」
「実は憧(あこが)れていたのです。信の置ける家臣に諫(いさ)められるというものに。これまでの私の周りにはそういった人材はいませんでしたからね」
また随分と子供のようなことを――と考えてから思い至る。その卓越した智謀から忘れがちだが、彼女は未(いま)だに十代半ばの少女であるのだ。
しかしながら、今はそれどころではない。心を鬼にしてフィシュは言った。

「お戯れを。事態は一刻を争います。このようなことをしてる場合ではございません」

「ええ、解っています」

ロウェルミナはフィシュから離れると、にっこりと笑った。

「フィシュ、貴女の諫言、一言一句に至るまで正論です。これ以上この地に留まろうとすれば私の命も危ういでしょう」

「では」

「ですが私の命の行く末など些事でしかありません」

眼を剝くフィシュの前でロウェルミナは続けた。

「皇帝位への道が阻(はば)まれた今、帝国皇女として、また帝国を愛する一人の臣民として、優先すべきは帝国の安寧です」

「そのために命懸けでこの地に残ると？」

「それが最善であると見極(みきわ)めた上ならば」

二人は静かに見つめ合った。

互いの意思の硬さが視線に宿り、両者の間に火花が散る。

そして当然というべきか――折れたのはフィシュの方だった。

「……御身はアースワルド帝国の正統なる皇女殿下であらせられます。何があろうとも、些事など

と片づけられる御命ではありません。そのことだけは、お忘れなきよう」

「ありがとうフィシュ」

「臣下たる私に礼など不要です。まして、まだ何一つ問題は解決していないのですから」

フィシュの言葉はもっともだ。ロウェルミナの決意がどれほど硬く崇高であろうとも、立ちはだかる難問に通じるものではない。

「そのことですが……今からウェイン王子の元を訪ねようと思います」

「摂政殿下を頼られると？」

「帝国を維持したいのは私も彼も同じ。私がこの

機に功をあげるのを諦(あきら)め、帝国のためだけに動くとなれば彼も協力してくれるでしょう」

「理屈で言えば仰(おっしゃ)る通りかと。しかし人には感情があります。摂政殿下からすれば、我らはナトラに大禍を持ち込んだ怨敵。容易(たやす)く頷いて頂けるかは……」

「そこに心配はいりません。ウェイン王子は私情を捨てて利を取れる人間です」

そう断言してから、ロウェルミナは苦笑を浮かべた。

「まあ、もしも否(いな)と言われた時は、せいぜい媚びへつらうとしましょう。どこまで通用するかは解

りませんが」

「その時は私もお供いたします」

主君の決意に、フィシュはただ深く頭を下げた。

◆◇◆

「――と、いうわけです」

自らの事情の説明を終えたロウェルミナは、ニムが出した紅茶のカップに口をつけた。

「あわよくば、などと思ったのが傲慢だったのか、ともあれ私はこの件を利用して成りあがることを諦めました。ここからは反乱を潰すことだけに集

中するつもりです。なので、協力して計画を練りませんか？」

「……」

ロウェルミナの体面に座るウェインは、背後に控える二ニムに視線で問いかける。

（どう思う？）

（嘘（うそ）は言ってなさそうだけど）

むう、とウェインは唸った。

「正直信じがたい気持ちがある」

「そんな、友達の言葉を疑うだなんて。私が二人を騙（だま）すと思いますか？」

「この会合、全力で騙そうとしたけどしくじった

から協力しましょう、って内容だよな？」
「まあその通りなのですが」
あっけらかんとした様子でロウェルミナは小首をかしげる。
「どうすれば信じて頂けますか？」
「それは信用してもらいたい方が考えるべきことじゃないか？」
「ごもっとも。そうですね……では一つ、服でも脱ぎましょうか？」
「信用というものを、布切れ一枚分の厚みだと考えてるのなら止めないけどな」
ウェインは肩をすくめた。

「まして、さすがに俺を侮りすぎだ。そんな誰がどう見たって解るような色仕掛けに引っかかるほど俺は間抜けじゃない」
「外で待っているフィシュもお相手をしますよ」
「詳しく話を聞こう……！」
「――ていっ」
ニニムの持っていたペンがウェインの後頭部に突き刺さった。
「ウェイン、遊ばないの。時間がないんでしょ」
「解った解った、解りましたよ」
後頭部をさすりながらウェインは言った。
「ロワ、確認するが、反乱を潰すためなら何でも

するってことでいいのか？」

「もちろんです。もはや手段を選んでいられる身ではありませんから」

「……いいだろう、それじゃグリナッヘとアントガダル領について知ってることを全部話してもらおうか」

ロウェルミナは頷き、知り得る限りのことを話す。

そもそも彼女はナトラにアントガダルを打ち破ってもらうつもりでいたのだ。抱える兵力や地理などは深く調べてあった。

「最大動員兵力は四千……ガイラン州全体ならこの倍は集まるんだろうが、アントガダルの力だけ

なら妥当な数字だな。武具も西側ので統一して行き渡ってるか。ただし練度は低い上に指揮官不足ね」

「それと馬も足りないようです。戦争になれば向こうは歩兵が重点になるでしょうね」

「戦争になればな」

ウェインの断言にロウェルミナは首を傾げる。

「先の部族間の争いを無血で収めたのもそうですが、まさか本当に噂（うわさ）に聞くような博愛主義に目覚めたのですか？」

「そんなわけあるか。あれは単に人的資源の浪費を抑えるためだ。自国の人間を自国の軍で討伐（とうばつ）す

るだなんて大損だしな。そして今回戦争を避けた理由はもっと単純で――金が無い」

「無いと言っても、どの程度で？」

「聞いて驚け、今の予算だと防衛用を除いて動かせる兵力は五百程度だ」

ロウェルミナは信じられないとばかりに眼を剝いた。

「……冗談でしょう？」

「マジもんのマジだぞ、マーデン戦からまだ全然回復してないんだ。なあ――ニーム？」

「はい。それ以上の兵を動かした場合、国政への影響が看過できない領域になります」

「かといって俺じゃ五百で四千に真っ向から勝つ自信ないしな。ハガル辺りが指揮すればワンチャンあるかもしれないが、西に置いてるあいつを呼び戻す時間はない。というわけで、少なくとも真っ向勝負を挑む方向は無しだ」

理由を並べ立てられると、不承不承ながらもロウェルミナは頷いた。

「……なるほど、それならば戦争にしないというのは理解できます。ですが武力行使が不可能だとすれば、どうやってこの事態を解決すると？」

「問題をもう一度見直してみろ。俺たちの目的はグリナッヘを軍事的に打ち負かすことか？　違う

だろ。あいつの口から反乱について証言させ、一斉蜂起を防ぐことだ。つまり、できるだけ金をかけることなく、グリナッヘの心を折って屈服させればいい」

にっとウェインは笑った。

「そして俺たちは学生時代から、こういう無理難題を何度もこなしてる。――さあ、悪だくみを始めようぜ」

◆◇◆

グリナッヘの元にゲラルトの死の報せが届いて

から、一週間ほど経過した。

冬入りも目前になり、都市部にかけても雪が見受けられるようになっている。

「旦那様、街の者から兵士の狼藉を諫めてほしいという陳情が相次いでおります」

「兵士側からも、待遇に対する不満が噴出しています。このままでは脱走者が出るのも時間の問題かと……」

「旦那様、州総督や代官から書簡が届いております。なにとぞ確認のほどを」

我が子の命が失われようとも、領内で起こる問題は休んではくれない。配下より矢継ぎ早に浴び

せかけられる報告は、本来ならばどれもが率先して片づけなくてはならない内容だ。

しかし今のグリナッヘにそれらに構う心理的な余裕はなかった。

「ええい、そのような些事はお前たちが片づけておけ！　それよりもナトラだ！　ナトラの調査はどうなっている！」

この一週間、グリナッヘは動かなかった。正確に言うのならば、動けなかった。

ナトラに攻め入ってロウェルミナ皇女を確保したい想（おも）いはある。しかし軍を動かした途端、帝国軍が来るかもしれないという恐怖がグリナッヘに

その選択肢を取らせなかった。

行ったことといえば、屋敷の警備を厳重にしたことぐらいだ。なお街の方も警戒を強めるように指示は出しているが、監督する者が不足しており、グリナッヘ自身も確認を怠っているためほとんど効果は出ていない。

「それがまだ何も連絡は……」

「この役立たずどもが！　くそっ！　おい、戻ってきたゲラルトの従者は今どうしている！」

「はっ、ようやく快復してきたところで……」

「ならば今すぐ呼んで来い！　何が起きたのか私が直接問いただす！」

グリナッヘは当たり散らしながら配下に指示を飛ばす。いつわが身に危険が降りかかるともしれない重圧は、ただでさえ乏しい彼の品位というものを奪い去っていた。

そんな彼の前に、慌ただしく使用人の一人が飛び込んできた。

「だ、旦那様！　大変です！」

「騒々しいぞ、何事だ！」

「も、申し訳ありません。その……今しがた表門にお客様が」

「客だと？　馬鹿が、追い返せ！　今は相手をしている暇はない！」

「旦那様が多忙の極(きわ)みであることは重々承知しております、ですが来訪されたのは――」

「――」

使用人がその名を告げた途端、グリナッヘは部屋を飛び出した。

廊下を駆け抜け、階段を駆け下り、辿り着いた館の玄関口には数人の人間が立っている。

「――お初にお目にかかる、アントガダル侯」

中心に立つのは一人の少年。

品位のある佇(たたず)まいは彼が高貴なる出自であることを示し、その若さと顔立ちは、グリナッヘが聞いているある人物と合致する。

「貴様……まさか、本当に」
「いかにも」
少年はグリナッヘに向かってふてぶてしい笑みを浮かべ、言った。
「私がナトラ王国王太子、ウェイン・サレマ・アルバレストだ」

◆◇◆

（さあて、大一番だ）
驚き、戸惑い、怒り――様々な感情が渦巻くグリナッヘの視線を真（ま）っ直（す）ぐに受け止めながら、ウェ

インは内心で思考を巡らせる。
出来るだけ金をかけずに、かつ確実にグリナッへの心を折るにはどうすればいいか。
答えは単純明白で、自分でへし折りに行けばいい。
それが今、ウェインがここにいる理由である。
だが当然、そこには大きな危険がある。
「衛兵！　出会え！」
ゲラルトが声を張り上げた。するとすぐさま武器を持った兵達がグリナッへの元に駆けつけてくる。
（まあそうなるな）
グリナッへにとってみれば、飛んで火にいる夏

の虫どころの話ではない。

だがその反応は織り込み済みだ。まして、同じように少数の供回りだけで敵地に乗り込むことは、ロワが既にやっていること。ウェインが臆する理由など――

（……やっべ、死ぬかも）

今すぐにでも襲い掛かってきそうな衛兵たちが、ぞろぞろと集まってくる様子には、さしものウェインも若干引いた。

「殿下」

連れてきた護衛の一人――ラークルムが剣に手をかける。

「待て、まだ早い」
護衛を手で制しながらウェインは声を張り上げた。
「アントガダル侯、兵を下げてもらいたい。私は貴公と争いに来たわけではないのだ」
「何をほざく！　我が息子、ゲラルトを手にかけておいて……！」
「まさしくそこだとも。私達の間には大きな認識のすれ違いがある。それを解いて歩み寄るためにこうして自ら足を運んだのだよ」
「ほお、すれ違いだと？　なにがどう違うというのだ！」

するとウェインは含みのある表情になる。

「望みとあらば説明しよう。――だがいいのかな？この場で口にして」

グリナッヘの顔に動揺が走った。その反応でウェインは看破する。

（思い当たる節は有り。思い当たる節をこっちが知っているかもってところに驚きはない。となれば十中八九ゲラルトの死は反乱計画絡みと考えてる――よし）

素早く方針を定めるウェイン。その思考速度は、グリナッヘなど相手にすらならない。

「アントガダル侯、お互いのために話し合いの席

を設けるべきだと思わないか？　ロウェルミナ皇女殿下から言伝も預かっているのだ。それに、ゲラルト卿の遺体もそちらに引き渡したい」

ウェインは屋敷の外を示す。そこには荷車と、その上に積まれた貴人用の棺がある。中にはゲラルトの亡骸が収めてあった。

「ご子息の遺体の前で流血は避けたいだろう？」

「ぬっ、ぐ……」

これは何もグリナッヘの情を狙った言葉ではない。ゲラルトを引き合いに出すことで、グリナッヘが兵を下げる理由を用意したのである。

そして案の定、グリナッヘは不承不承という態

度を作りながらも頷いた。

「……いいだろう。席を用意する」

ウェインはにっと笑った。

「素晴らしい。実りある会合になること約束しよう」

◆
◇
◆

「ナトラの王太子が!?」

部下からの報告に、オウルは思わず驚愕（きょうがく）の声をあげた。

「はっ、間違いありません……！　今しがた、ア

ントガダルの屋敷に」

「……どいつもこいつもっ！」

手近な椅子（いす）を蹴（け）り飛ばし、ままならぬことに対する怒りを発散しながら、オウルは急いで思考を纏める。

「王太子の手勢はどれほどだ？」

「僅か五人です」

「……」

馬鹿げた話だ。一国の王太子がそれだけの人数しか連れずに異国に向かうなど。

同時に、誰もそんなことはしないと思い込んでいるからこそ、この奇襲ともいうべき来訪は成功

したのだろう。もしも百人単位で連れていれば、事前に察知されていたはずだ。

しかし今回ばかりはその思い切りの良さが命取りだ。この街にいるのは、グリナッヘの手駒（てごま）だけではない。

「すぐに動かせる手勢は何人いる？」

「十名ほどになります」

「全員集めろ。もしも王太子が生きて屋敷から出るようならば、我らで仕留める」

「例の件で潜ませている者たちは如何しますか？

呼び戻すことも可能ですが」

「……いや、そちらは動かさなくていい。並行し

て進める」

「ははっ！」

部下に指示を飛ばしながら、オウルは自らが後手に回っていることを自覚していた。

主導権を握っているのは間違いなくナトラの王太子だ。

（だからこそ、ここで……！）

決意を固めながら、オウルは準備を始めた。

◆◇◆

「まず最初に、ゲラルト卿の死について詫びさせ

てもらいたい」

用意された部屋の席に座り、グリナッヘと一対一で向かい合うウェインは、開口一番謝罪した。

「信じてもらえないかもしれないが、私としては彼を死なせるつもりはなかったのだ」

「信じられるわけがなかろう！」

（ですよねー）

吐き捨てるグリナッヘにウェインは内心で同意した。

当事者でなければ、自分でも謀殺されたと考える状況だ。まさか勝手に窓から落ちて死んだなどと、誰が思い当たるだろうか。

「仮にそうだとしたら、息子はなぜ死んだのだ」
問いかけはウェインが待っていたものだ。
「それは無論、皇女殿下のご意思だとも」
「なにい……!?」
「単刀直入に言おう、アントガダル侯爵。――皇女殿下は全てご存知だ」
悪徳を積み重ねている者にとって、他者から囁(ささや)かれる『知っているぞ』という言葉ほど疑心暗鬼をもたらすものはない。ましてそれが自らより権威ある者からともなれば、その効果が絶大であることは、グリナッヘの表情が物語っていた。
「しっ……知っているとは、何のことだ」

震える声音で、精一杯取り繕いながらしらばっくれようとするグリナッヘだが、ウェインは容赦なく追撃を放った。

「無論、貴公が反乱計画に一枚噛(か)んでいることども」

「なっ……！」

「忠告しておくが」

反射的に何か口にしようとするグリナッヘをウェインは制した。

「言い逃れができる段階はとうに過ぎている。証拠も十分に集まった。仮にここで私を殺したとしても、いずれ帝国軍がこの地に向かってくるだろ

う」

「ば、馬鹿な……そんなことが……！」

ブラフだ。証拠など何もない。グリナッヘは未だに逃げ切れる位置に立っている。

（さあ喰いつけ喰いつけ……）

無論、このブラフだけで落とせるとはウェインは考えていない。グリナッヘを誘導するための撒き餌だ。

「ありえない、そんな……そうだ！　それならば貴様は何をしにここに来たのだ！　まさかゲラルトの死体を引き連れて、私に死刑宣告をしに来たとでもいうのか！」

かかった。ウェインはその一瞬を見逃さない。

「貴公を救いに、と言ったら笑うかな？」

「どっ……どういうことだ」

「ロウェルミナ皇女は侯爵家は取り潰すつもりだ。帝国を愛する皇女は、帝国の敵に容赦はしない。私は帝国留学時代に皇女と縁を結んでいてな。ゆえに協力したのだが――私と皇女では少々考え方が違うのだよ」

グリナッヘは気づけない。ウェインの真に迫った言葉を耳にしている内に、虚構を前提に更なる虚構を積み重ねられ、前提となった虚構がさも真実であるかのように心の中に収まってしまってい

ることに。

「我がナトラにとって、ガイラン州は理解ある隣人であることが好ましい。侯爵家が潰れれば領地は召し上げられ、州総督が全ての実権を握ることになるだろうが――それでは困る。あの男からは王家の血に対する敬意というものがないのでな」

「むっ……」

「帝国の家臣にこそなったものの、貴公はアントガダル王家の血を引くれっきとした王族。そういった高貴な人間が排斥され、血の重みを知らぬ凡俗が幅を利(き)かせるなど、全く恐ろしい未来だと思わないか？」

言うまでもないが、ウェインは微塵(みじん)もそんなことを思っていない。

そもそも血筋になど大した価値はないというのが本来のウェインの考えである。

だが、価値はあるという認識が大陸、特に貴族の間に蔓延していることも理解している。ならばそれを利用することに躊躇(ためら)いはなかった。ウェインは思想家ではなく政治家なのだ。

そして案の定、血を引き合いに出したことでグリナッヘは警戒心を緩(ゆる)めた。

「それは……そうだ、その通りだ。だが、救うというのは一体どうやって……」

「なあに、案ずることはない。――諸悪の根源たるゲラルト卿は既に死んだのだから！」

「はー――？」

唖然とするグリナッヘに向かって、ウェインは凄絶（せいぜつ）な笑みを浮かべた。余人がここにいれば、さながら悪魔が微笑んだかのように見えただろう。

「恐るべき話だ。全く恐るべき話だとも！　帝国への忠誠を忘れ、自らの野心のために肉親を軟禁し、反乱計画に乗じて独立を望むなど、人面獣心とはまさにことのことだ！」

「……ま、待て、まさか」

「だが、帝国内での彼の評判を思えば、恐らく多

くの人が納得するだろう！　あるいは貴公への同情すら集まるかもしれんな！　何にしてもそのような凶賊の存在を察知し、罠にかけて屠ることに成功したロウェルミナ皇女殿下の智謀は見事としか言いようがない！」

「貴様、ゲラルトに全ての罪を被せ――」

「無論のこと！」

グリナッヘの言葉をウェインは遮る。

「無論のこと、貴公の罪は問われるだろう。我が子の行いを償うは親の務め！　しかしながら反乱計画に関与した証拠を全て提出し、息子を止められなかった自らの罪を認めて証言を行うのであれ

ば、領地の減封ですませるという言質は皇女殿下より頂いている……！」

「っっ――」

グリナッヘは身震いした。

ウェインの持つ言葉の意味と、彼の放つ圧倒的な凄みが、グリナッヘを戦慄（せんりつ）させたのだ。

「アントガダル侯爵、仕方のないことだったのだよ。貴公は被害者だ。恥を忍んで、ナトラで待っている皇女殿下のお慈悲に縋ろうではないか」

じわり、じわりと毒を染（し）みこませるように、ウェインはグリナッヘを逃げ道に導いていく。

人は追い詰められた時、どこにも逃げ場がなけ

れば暴発するしかない。だが逃げ道があれば、あるように見えれば、そこに逃げ込むのが人の性質だ。

「ゲラルトは」

不意に、絞り出すようにグリナッヘは言った。

「やはりゲラルトは、謀殺されたのだな……」

「私としても苦慮の末だった。しかし必要な犠牲だったといえるだろう」

大嘘である。普通に事故で死んだだけだ。だが死んでしまった以上、死後の名誉も死んだ理由も全て利用し尽くす。死者は何も語らない。ただ生者に騙られるばかりだ。

「必要な犠牲……か……」

「我が子を悼む気持ちはよく解る。だが、優先すべきは血の存続だろう？　貴公が、アントガダル家が存続さえしていれば、後世でいくらでも日の目を見る機会はある。さあアントガダル侯、今は亡きお父上のように賢明な判断を下す時だ」

「……」

グリナッヘは深く沈黙した。

その脳裏（のうり）ではかつてないほどの勢いで思慮が巡らされていることだろう。

（乗ってこい乗ってこい乗ってこい乗ってこい……！）

祈りながらウェインは黙って彼が結論を出すの

を待った。

そして長い長い静寂の末に、グリナッヘはその言葉を口にした。

「……出立の準備をする。少し時間をくれ」

（おっしゃあああああああああ！）

内心でガッッポーズをしながらウェインは満足げに頷き、手を差し伸べた。

「貴公は素晴らしい決断をした。これで何もかもが丸く収まるだろう」

◆
◇
◆

部屋を用意するというグリナッヘへの提案を固辞し、ウェインは護衛を伴って屋敷から出た。目的地は街の宿だ。

貴人が遠出するとなれば、一人着の身着のままというわけにはいかない。護衛や身の回りの世話をする人員を選出し、そのための費用や物資を用意し、目的地までの道筋や道中の休憩場所をどこにするかを吟味した上で、ようやく出発となる。

ゆえに数日は準備時間が欲しいとグリナッヘは主張したのだが、ウェインは首を振った。

「言っただろう、皇女殿下は全てご存知だと」

なにせグリナッヘは寸前までナトラ侵攻を目論

んでいたのである。その辺りの準備はほとんど終了しているはずであり、事実、そう告げたことでグリナッヘは翌日には準備を終えると前言を翻し(ひるがえ)た。

グリナッヘがそんな時間稼ぎをしようとしたのは、生来の往生際の悪さが一つ、心の準備をする時間を欲したことが一つ、そして最後の一つは――

「殿下」

不意に、横を歩いていた護衛のラークルムが声をあげた。

「ああ、解ってる」

まだ昼日中にも拘わらず、都市の中はひっそりと静まり返っている。

駐留している兵士達が狼藉を働いた結果、街の住民が怯(おび)えて引きこもっているという話を聞いた時、それを放置しているゲラルトには大層呆(あき)れたものだが――

（この静けさは、違うな）

最初に都市に踏み入った時のそれとは別の空気だ。何者かが、意図して付近の人払いをしている。それをウェインは持ち前の観察眼から、ラークルムは生来の直感から認識していた。

「躱(かわ)せるか？」

「……いえ、前後に気配があります。挟まれました」

石畳の上を平然と歩きながら、ラークルムは他の護衛に向かって指で指示を出す。彼らは素早くウェインを囲むように展開した。

「恐らく、そこの横道の奥にも配置されているでしょう」

「周到なことだ」

グリナッヘの手の者ではない。事前にこちらの道筋を把握し、人払いを完了させて待ち伏せするなどという迅速な計画は、彼の手駒にできる芸当ではないだろう。

では何者か。その結論を出す前に、前方と後方に立ちふさがるようにして人影が現れる。

「切り抜けます。遅れませぬように」

「――」

ウェインたちは剣を抜き、襲撃者に向かって地を蹴った。

◆
◇
◆

アントガダルの屋敷の傍には礼拝堂がある。

民からの陳情を受けて建設したもので、グリナッへ自身は信心深いわけではない。しかし今、彼

はそこにいた。我が子の遺体が収まった棺とともに。

「……」

ゲラルトの死に顔は穏やかなものだった。遺体の状態も、ナトラ側が丁重に扱ったのだろうということが解る。それを眺めるグリナッヘの姿は、子を失い感情の行先を定められずにいる親そのものだ。

しかし事実は違った。グリナッヘの胸中には、まるで悲しみというものはなかった。

「……最後まで馬鹿な息子だったな」

失意を滲(にじ)ませながらそう呟き、すぐさまグリナッヘは自嘲(じちょう)の笑みを浮かべた。

「いや……それも当然か。なにせ私の子なのだから」

先ほどのウェインとの会合が脳裏に過る。

あの時、自分は圧倒されていた。

帝国の侯爵ともあろう人間が、二回りも下の若造の気迫に呑(の)みこまれた。

ああ、思い出す。そう、父たるアントガダル王と対面した時もこうだった。

（父と同じ、あるいはそれ以上か……）

自ら敵地に乗り込み、弁舌で以(もっ)て相手を説き伏せ、悠々と帰還する。そんなことを実行しようと思えるのはよほどの馬鹿か英雄で、その上で成功

させるのだから、彼はまさしく英雄の器なのだろう。そしてこの先、アントガダル王と同じように、大陸を巻き込み歴史を牽引する傑物するのだ。

自分もずっとそうなりたかった。父のように、父よりも偉大になりたかった。

だが今日、あの少年と対面して痛感した。

なれない。自分は決してそこまで届かない、と。

「ふ――ふふ、ふふふ」

胸から湧き上がるこの感情を、何と表現すればいいだろうか。

怒りではない。憎しみでもない。炎のような美しさも、水のような華麗さもない。無骨で、不細

工な、岩のようなこの激情を。

「思えば、お前を褒めたことなど一度も無かったな」

グリナッヘとゲラルト。親と子。子であるゲラルトは命を落とし、親であるグリナッヘもまた遠からず歴史の海に沈んでいくだろう。

「今更私がお前のために涙を流したところで、なんの慰めにもなるまい」

意地だ。感情の名は意地だ。

これから行うことは、顧みられぬ路傍の石に許された、最初で最後の乾坤一擲だ。

「ゆえに、これが手向けだ。挑んでやろう。あの

若き英雄に」

グリナッヘは踵（きびす）を返した。

礼拝堂の外で待っていた従者に向かって命令を下す。

「動ける兵をかき集めろ。ナトラの王太子を捕縛し、ロウェルミナ皇女を手に入れる……！」

◆◇◆

剣戟が路地裏に響き渡る。

それはウェインの護衛と襲撃者たちが奏（かな）でる音だ。

（まずいな……）

状況を冷静に観察しながらウェインは内心で舌打ちをした。

襲撃者の数は十名。対してウェインの護衛は五名。数は圧倒的に向こうが有利だ。

ただし護衛はナトラ軍でも選りすぐりの精兵だ。数的不利にあっても崩れることなく、ウェインの周囲を固めながら拮抗を維持して――

（いや、誘導されている）

襲撃を凌（しの）いでいる内に、ウェイン達はこの路地裏にまで追い込まれていた。そこに戦術的な意思があることをウェインは見抜く。

（この剣戟を聞いた市民が通報、あるいは聞きつけた警邏が駆け付けるまでそう時間はかからない。となると向こうの望みは短期決戦。誘導されたこの付近に必ず罠を張っている）

どこだ。ウェインは家屋の壁で背面を塞ぎながら視線を走らせる。路地裏は狭く決して大規模な罠は仕掛けられない。恐らくはシンプルで、一度きりの、不意打ちのような――

「――やっべ！」

瞬間、ウェインが背中を預けていた壁が、槍の一撃によって向こう側からぶち抜かれた。

「ぬおおおおおおおっ!?」

咄嗟（とっさ）に身を翻したウェインの肩衣を、槍の穂先が掠（かす）めて切り裂く。

「チィ！」

仕留め損なったことに新手の襲撃者――オウルは舌打ち。追撃の刺突を放つが、ウェインの剣がそれを弾いた。

「殿下！」

「こっちはいい！　目の前の相手に集中しろ！」

焦（あせ）るラークルムに声を張り上げて自制を押し付ける。そうしながらもウェインは新手の男から視線をそらさない。

「まさか避けられるとは、随分と運がいいな」

ウェインは鼻で笑った。

「今のが運に見えるのか？　初対面だが、その節穴には同情するぞ」

（あっぷねえええええ！　無理無理無理無理！　二度目は絶対無理！）

爆発（ばくはつ）しそうな心臓を鋼の精神で抑え込みながら、ウェインは考える。

（こいつが出現した途端、襲撃者の気が引き締まった。連中の精神的支柱なのは間違いない。こいつを仕留められれば他は崩れる。だが……）

槍を構えるオウルを見て難敵（なんてき）であると確信する。

切り込むための隙（すき）がどこにも無い。それどころか、

防戦に徹してもどこまで持つか。
（となれば……）
ウェインはふてぶてしい笑みを浮かべた。
「なるほど、お前たちがグリナッヘ侯爵を反乱計画に引きこんだ連中だな」
「……」
「まあ、答えるわけがないか。では勝手に当ててやろう。お前たちの正体は帝国に滅ぼされたかつての連合国の生き残り――」
ウェインは射抜くように告げた。
「という建前（たてまえ）で動く、西側の工作員だ」
オウルの槍が放たれた。

ウェインは剣の腹でその軌道をずらす。一撃が重い。手に痺(しび)れが走った。

「こんな辺境の侯爵まで巻き込もうとするとは執拗なことだ。しかし、選定を誤ったな。あれは疫病神の類だ。おかげでお前たちの計画はボロボロなんじゃないか？」

「……」

「まだ修正は効くと思ってる顔だな？　本当にそうか？　なあおい、本当はまだこの街に仲間がいるんだろう。しかし、そいつらは別件で動けない。違うか？」

その言葉で初めてオウルの顔に動揺が走った。

「当ててやるよ。そいつらの任務は、口封じのためにグリナッヘを暗殺することだ。そして屋敷にある蜂起計画の証拠も全て抹消しようとしている。特に今は屋敷の中が慌ただしくなってるから、さぞ動きやすいだろう」

（この男は……！）

オウルは内心で戦慄を抱いた。全てウェインの言葉通りだ。この若い王太子は、ナトラにいながらにしてオウルの動きを読み切っていたことになる。

だが、それだけだ。たとえ読まれていたところで関係ない。こちらの手勢は既に屋敷に潜り込み、

ウェイン達はここで足止めされているのだから―

―

「――俺の手勢がこれだけだと、誰が言った？」

オウルの眼が驚愕に見開かれた。

◆◇◆

アントガダルの屋敷は上を下への大騒ぎだった。

指示と兵士たちが慌ただしく行き交い、時には怒声も放たれる。

まるで嵐（あらし）のような有様（ありさま）だが、それをどこ吹く風で眺めている者たちもいた。

「一体何事でしょう？」
「さあて、また旦那様が何か思いつきなさったんだろう」
のんきにそんな会話をするのは下級の使用人（メイド）だ。
彼らに与えられている仕事は屋敷に関連することであり、それ以外のことには興味も役割も持っていなかった。
「それよりほれ、あの小僧に食事を持って行ってやりい」
「ああ、そうですね」
食事を載せたトレイを受け取り、使用人の少女が向かうのは病室だ。

そこには一週間前、息も絶え絶えで辿り着いたゲラルトの従者が身を休めていた。

「それにしても、うーん」

廊下を歩きながら使用人は独りごちる。

「ゲラルト様の出立前にお見送りましたけど、従者の中にあんな子いましたっけねえ……いれば覚えてると思うんですけど。なにせ結構可愛(かわい)いですし」

そう呟きながら病室に向かっていると、ふと、廊下の奥の角に人影を見た。

「あれ、あそこは……」

この屋敷には、使用人が立ち入るどころか近づ

くことさえ許されない部屋がいくつかある。その部屋には宝物や重要な書類などが保管されていると聞いているが、詳細は彼女の知るところではない。重要なのは、人影を見た廊下の角の奥にその部屋があるということだ。

恐らくは屋敷の構造に不慣れな兵士などが迷ったのだろうと彼女は考えた。食事を運んでいる最中でもあるし、放っておいてもよかったが、主たるゲラルトがこれを知れば、不機嫌になって使用人たちに当たり散らすだろう。

（仕方ありませんねー）

少女はとてとてと廊下の奥へ向かい、ひょっこ

りと角の向こう側を覗(のぞ)き見た。

「あのー、そこは立ち入り禁止で……」

告げる言葉が、途中で止まる。

角の先にいたのは二人の男だった。兵士の装いをしたその二人は、少女の声にギョッとした様子で振り向いていた。

だが驚いたのは少女の方も同じだった。その兵士の一人が、先にある扉の前に片膝(かたひざ)をつき、鍵(かぎ)をこじ開けようとしていたからだ。

「えっと、何をしてーきゃっ」

男の一人に腕を掴まれ、少女は強引(ごういん)に角の奥に引き込まれる。持っていたトレイが床に落ちて騒

音を奏でた。

「きちんと見張りをしとけと言っただろう……！」

「すまん。すぐに始末する」

自分の身に何が起きているのか、そしてこれから何が起きようとしているのか、ここにきてようやく少女は認識した。この二人は泥棒か何かで――自分はそれを目撃してしまったのだ。

人を呼ばなくては。そう考えるも、あまりにも判断が遅すぎた。その時には口元を男の手でふさがれ、さらには男のもう片方の手には短刀が握られていた。

（あ、や、やめ）

もがいて逃れようとするも、膂力の差は圧倒的だった。手を振りほどくことができないまま、男の持つ白刃が吸い込まれるようにして少女の喉元（のどもと）へ走り――

「……あっ？」

男の持っていた白刃が、男の頭に突き刺さった。

何が起きたか理解できない――男と少女は奇（く）しくも同じ表情を浮かべ、少女に覆いかぶさるようにして男は崩れ落ちた。

そして突然のことに呆気（あっけ）に取られる少女の傍に、いつの間にか一人の少年が立っている。

その顔立ちを少女は知っている。一週間前に屋

敷に駆けこんできたゲラルトの従者だ。

「食事、悪かったな。持ってきてもらったのに」

けれど同時に戸惑いがあった。あの少年の髪は黒だったはず。なのに今、傍に立つ彼の髪は、まるで雪のように真っ白で。

「まあ、ともかく安心しろよ。すぐ終わるから」

そう言って白髪の少年――ナナキ・ラーレイは素っ気なく言い放った。

「グリナッヘを守れ？」

その日、ウェインに呼ばれて執務室に来たナナ

キは、その指令に戸惑いを隠さなかった。
「どうしてそんなことをする必要があるんだ？」
「俺の予想だと十中八九、グリナッヘは暗殺される」
ウェインの答えは明朗だった。
「下手人はグリナッヘを反乱計画に引き込んだ西側の工作員。理由は計画のこれ以上の破たんを恐れてのことだ。なので、グリナッヘが死なないように守ってほしい」
「……面倒くさいな。死なせちゃだめなのか」
ウェインは頭を振る。
「だめだ。今あいつに死なれるとかなり困る。生

きて証言してもらわなきゃな」

ナナキは不満そうに唸った。

「俺の主（あるじ）はフラーニャだ。あいつの傍を離れるのは」

「解ってる。当然だが、不在の間のフラーニャの護衛は厚くするつもりだ」

「……どうしても俺じゃないとダメか？」

「お前じゃないとダメだ」

ウェインは断言した。

「この任務には高度な変装技術が必要になる。俺の知ってる中でその条件に見合うのは、ナナキ、お前だけだ」

――フラム人は化粧が得意。

昔から大陸の西側で広く知られていることわざである。

なぜそのようなことわざが生じたのかといえば、フラム人の持つ白い髪と赤い瞳（ひとみ）という特徴的な外見にある。

大陸の西側で被差別階級であるフラム人は、その人種的な特徴ゆえに容易（ういよう）に判別されやすい。それを回避するために、髪や瞳の色を誤魔化（ごまか）そうとしたのが始まりと言われている。

差別階級は嘲（あざけ）りながらその言葉を口にするが、フラム人にとっては生存するための必須技能だ。

親から子へ、その子が成長して親になればまた自分の子へ伝授する。そうやって連綿と築き上げられてきた変装技術は、大陸で最も進んでいるとされる。

そしてナナキは、その最先端の技術の使い手として非常に優秀なのだ。

「……仕方ないな。それじゃ、どうやって忍び込めばいい？」

「真正面からだ」

そう言ってウェインが取りだしたのはゲラルトの懐剣だ。

「こいつを持ってゲラルトの従者を名乗り、ゲラルトが

死んだことを告げろ。できるだけ衰弱してるように演技をしてな。そうすればお前は屋敷で寝て過ごせるし、疑心暗鬼にかられたグリナッヘは屋敷の警備を厳重にするだろう。そうなれば、暗殺者もおいそれとは近づけなくなる」

「じゃあ俺は潜り込んだ後は何もしなくていいのか？」

「いいや、しばらくしたら俺も屋敷に乗りこむつもりだ。恐らく屋敷は大騒ぎになるだろう。暗殺者はその隙をついてグリナッヘを殺害し、蜂起計画の証拠を破棄しようとするはずだ。それを阻止した上で、証拠を確保してもらいたい」

「軽く言ってくれるな」

「軽いものだろ？　ナナキなら」
ナナキは答えずに懐剣を受け取り懐(ふところ)にしまった。
そして踵を返そうとするが、その間際(まぎわ)、彼は言った。
「最後に一つだけ。これはフラーニャのためになるのか？」
「なるとも。俺が嘘を吐いたことがあるか？」
「結構あるだろ」
ウェインは眼を逸らした。
ナナキは鼻を鳴らしながら言った。
「だけどまあ……フラーニャのためと言った時は、まだ一度も嘘を吐いてないな」

そうしてナナキは部屋を出て行った。
その姿はすぐさま周囲の景色に溶け込み、彼は誰にも気づかれぬまま、アントガダル侯の屋敷に出立し――

「な、なんだ貴様はっ!?」
今こうして、暗殺者と対峙(たいじ)していた。
「見て解らないか？　同業だよ」
ナナキは男目がけて床を蹴った。
男は驚きながらも腰元の短剣に手を伸ばそうとするが、遅い。

その指先が柄に触れるよりも早く、ナナキは音もなく男の懐にまで入り込むと、逆に男の短剣を抜き去ってそのまま男の顎（あご）を刺し貫いた。

「がっ……!?」

男はうめき声をあげると、突き刺さった短剣に手を伸ばそうとするが、それを成し遂げる前に力を失い、床に倒れ込んだ。

「……」

少年は物言わぬ骸となった男を一瞥（いちべつ）した後、振り向く。

「な？　すぐ終わっただろ……って」

呼びかけた先にいた少女は、男の死体をどかす

こともできずに気を失っていた。
目の前で二人の人間が殺される光景は、彼女にとってあまりにも刺激が強すぎたようだ。
「……まあいいか、手間が省けた」
暗殺を阻止した次は、蜂起計画の証拠を手に入れなくてはいけないのだ。死体を隠さなくてはいけないし、迅速に行動しなくてはならない。
「今頃（いまごろ）ウェインも切羽詰まってるところかな」
そんなことを呟きながら、ナナキは意識を失った少女を適当な部屋に寝かせるべく抱え上げた。

◆◇◆

そしてナナキの予想通り、ウェインの状況は佳境を迎えつつあった。

「既に館に仕込んでいたのか、貴様の手勢を――」

「気づくのが少しばかり遅かったな」

ウェインはオウルに向かって挑発するような笑みを浮かべる。

「俺の手勢は優秀だからな。暗殺を防ぎ、屋敷に隠されている反乱計画についての証拠も手にしてる頃だろう。さあどうする？　のんびり俺の相手をしてる場合か？」

「ぐっ……！」

オウルの心に僅かな迷いが生まれ、しかし彼はそれを精神力で封殺した。

「ならば、今すぐ貴様を殺して駆け付ければいいだけのこと――！」

裂ぱくの気合と共に、オウルは渾身（こんしん）の一撃を放った。

「ああ、そうだな。――そう来ると思ったぜ！」

その動きを予見したウェインは槍を捌（さば）き、さらに返す刀でオウルの首を狙う。

しかしオウルもさるもの。ウェインの完璧（かんぺき）なカウンターを紙一重で回避し、逆にその隙を狙って槍を振り抜こうと腕に力をこめ――気づいた。

剣を握っていないウェインのもう片方の手から、光を反射する何かが放たれたことを。

（暗器っ!?　いやしかし、当たる場所は肩。受けても致命傷には）

ならない。そう思った瞬間、染みこむような声が届いた。

「――毒」

そこからのオウルの反応は神がかり的だった。

身体を強引にひねり、今まさに突き刺さろうとしていた暗器を回避する。オウルでなければ不可能な動き。しかし同時に、オウルであっても他の全てを犠牲にせねば成し遂げられない奇跡だった。

「――駄目だぜ、暗殺者が生きようとしちゃ」

その隙を見逃すはずもなく、ウェインの剣がオウルの片腕を切り落とした。

「ぐあっ――!?」

余人ならば絶叫して倒れ込むところを、転がるようにしてウェインから距離を取ったオウルはさすがである。

だがその傷が致命傷であることは誰の眼にも明らかだ。出血する腕をもう片方の手で押さえながら、オウルは荒い息で叫んだ。

「王侯貴族が、暗器を使うか……！」

「たとえ外道詭道と言われることでも、王族が為(な)

せばすなわちそれが王道だとも」

ウェインはふてぶてしく笑う。

とはいえ、実は暗器に毒は塗布されていない。

普段の扱いが難しくなる上に、逆に奪われた時に窮地になるからだ。

「ぐっ……！」

全ては仕込みであったとオウルは理解する。屋敷の証拠を手に入れなくてはいけないという意識をオウルに植え付け、命懸けを許さない心理的な壁を作る。そこに絶妙なタイミングで囁かれた声は、まさしく毒そのもの。代償が片腕ですんだのはむしろ僥倖（ぎょうこう）といえる。

「隊長！　――ぐあっ!?」
オウルが崩れた影響はすぐさま他の襲撃者にも伝播（でんぱ）する。一度拮抗が崩れれば、もはや止める手立てはない。
「さあどうする、まだ続けるか？」
オウルは歯を砕かんばかりに噛みしめた。
「お前の首を必ず取りに行くぞ……ウェイン・サレマ・アルバレスト」
「そうか。もう来なくていいぞ」
オウルは叫んだ。
「……全員退け！　撤退だ！」
オウルの指示が飛ぶや否や、襲撃者たちは波が

引くようにして離脱する。
護衛達が一瞬追おうとするが、それをウェインが制した。
「放っておけ。それよりも……」
路地裏から出たウェインはアントガダルの屋敷の方へ眼を向ける。
その方角から大人数がこちらに向かって来る気配があった。
「私達を助けにきた……という雰囲気ではありませんな」
「そうか、こうなったか……」
グリナッヘが時間稼ぎをしようとしていた理由

は三つ。

往生際の悪さと心の準備。そして最後の一つは、ウェインとの会合を破棄し、あくまでロウェルミナ皇女を手に入れるかどうかを考慮する時間を欲したためだ。

それを察したからこそ、ウェインは可能な限り素早く出立するようグリナッへを急(せ)かした。優柔不断なグリナッへなことだ、そうすれば決断する前に刻限になって諦めるだろうと考えたわけである。

しかしその予想は覆された。何が理由かは解らないが、ウェインの見えていないところで、グリ

ナッヘを動かす何かがあったのだろう。

「殿下、如何いたしますか？」

「仕方ない。プランＢだな」

「と、仰(あお)いますと？」

ウェインは肩をすくめた。

「尻尾(しっぽ)巻いて逃げるってことだ。途中で馬を適当に奪って一気に距離を取るぞ」

「ははっ！」

オウル達にならうようにして、ウェイン達もまた素早くその場を離れていった。

◆
◇
◆

いざ行動を始めてみると、いかに自分が無能であるかという事実をグリナッヘはさまざまと突きつけられた。

まず動員しようした兵がなかなか集まらない。普段から規律で厳格に縛っていないからこそ、突然呼びかけても多くの兵士が応じられずにいた。

さらに集まってもなかなか纏まらない。これは現場指揮官が不足しているためだ。グリナッヘが声を張り上げて従うよう言い聞かせるも、侮る気持ちがありありと伝わってきた。

それでもどうにか兵達を従わせようとしている

と、ウェインたちを捕縛すべく先に差し向けていた兵士達から伝令が届く。

「閣下、確認しましたが件の王太子とその護衛は宿に戻っていないようです」

「それに関連してのことですが、先ほど人相書きに似た人物達が馬を奪って都市外へ逃げたという報告がございます。恐らくはこの連中が王子とその護衛かと」

「ぬう……！」

これはグリナッヘにとって大きな痛手だ。

彼の計画は、ナトラの中枢たるウェインを捕獲することでナトラを機能不全にし、その隙に攻め

入ってロウェルミナ皇女を手にするというものである。

これがウェインの実像を知る前ならば、逃がしたところで問題はない、などと鷹揚（おうよう）に構えていただろう。しかしウェインの持つ英雄の器を目（ま）の当（あ）たりにした今、彼が軍を率いればその脅威は想像を超えたものになるであろう、という確信がグリナッヘにはあった。

是が非でもこのまま逃がすわけにはいかない。

グリナッヘは声を張り上げた。

「今すぐナトラ方面の関所を閉鎖しろ！　歩兵はこのまま出兵の準備を整えておけ！　私は騎馬を

率いてウェインを追跡する！」

「か、閣下自ら追跡を指揮されるのですか？」

「何か不満があるのか⁉」

「い、いえ……」

言い淀む配下だが、グリナッヘもこれが苦肉の策であることは自覚していた。総大将たるグリナッヘが本陣から離れて追跡隊に加わることは、身の危険は元より作戦全体の指揮が滞ることにも繋がる。

しかしグリナッヘは追跡隊を指揮することを選んだ。それは他に任せるに足る部下がいないということもあれば、この手でウェインを捕縛してみ

せるという意地もあった。

ともあれグリナッヘはかき集めた四百の騎馬から、さらに足の速い馬を五十騎選出し、これを率いて都市を出発した。

相手は僅か五人。五十騎もいれば戦力的には十二分だ。問題は追いつけるかどうかである。出立するまでに相当な距離は稼がれているだろう。

だが、その点についてグリナッヘには自信があった。ナトラに続く道にあるいくつかの関所には、狼煙（のろし）による合図で封鎖を通達してある。もちろん関所を回避する方法はあるだろうが――大きく時間を食うはずだ。

そして案の定、二つ目の関所にて目撃証言を得た。狼煙を受けて封鎖しようとしていたところで、数人の騎馬が強引に突破していったという。しかも通せ通せないの押し問答を繰り広げたため、突破されたのは時間的についつい先ほどのことだった。

「このまま全速力で追いかけろ！　必ず生きて捕まえるのだ！」

グリナッヘは檄を飛ばしながら馬を走らせた。

そしてついに、地平線の先を駆けるウェインたちを視界に捕らえた。

「いたぞ！　あそこだ！」

恐らくウェインは、ナトラとの国境ギリギリに

兵を準備しているだろう。そこに駆けこまれれば打つ手はない。だがこの距離ならば、選りすぐった馬を持つこちらが先に追いつける。そして追いついてしまえばこの人数さだ、勝敗など考えるまでもない。

（間に合う、間に合うぞ……！）

グリナッヘの一団が小高い丘に差し掛かった。これを越えれば待っているのは下りの盆地。そこがウェインの終着点だ。

（見ていろゲラルト、お前を殺したあの若造をこの手でひっ捕らえてやる……！）

そして一団は一気呵成に丘を駆け抜け――

盆地に布陣した、数百人規模のナトラ軍を目の当たりにした。

◆◇◆

「交渉でグリナッヘの心を折れるかどうかは、五分五分ってところだ」

ニニムとロウェルミナを交えた作戦会議でウェインはそう言った。

「というわけで、駄目だった時の備えをしておく」

「当然の判断ですが、そもそも敵地のど真ん中で失敗して大丈夫なのですか？」

ロウェルミナの問いにウェインは答える。
「仮に失敗しても、すぐさま俺をどうこうできるような人間じゃないさ、グリナッヘは。そんで相手がまごついてる間に都市からトンズラする」
「ナトラまで逃げきれるかしら？」
次はニニムの問いかけだが、今度はウェインは頭を振った。
「無理だろうな。だから補足されないよう兵士を少数に分散させて侯爵領に浸透させておく。馬の足と関所の位置、周辺の地理からして……そうだな、この盆地辺りで合流させるか」
テーブルに広げられた地図の一点を示すウェイ

ン。この詳細な地図はウェインを勝たせるためにロウェルミナが提供したものだ。おかげで侯爵領の地理は丸裸であり、密(ひそ)かに兵士を浸透させることも難しくない。

「俺が逃げたことを知ったグリナッヘは兵を率いて追いかけてくるだろう。しかし速度を重視するなら引っ張ってこれる騎兵は百騎もいればいい方だ」

「……なるほど、見方を変えれば、四千はいるとされるアントガダル軍から百騎だけ突出させるわけね。それならこちらの少ない手勢でも倒せるわ」

「グリナッヘ侯はさぞ度肝を抜かれることでしょ

うね。相手は数人と思って少数精鋭で追いかけてみれば、数百のナトラ軍が待ち構えているのですから」

感心したように頷くニムとロウェルミナだが、そこにウェインが言葉を重ねた。

「おいおいおい、二人とも満足するには少し早いぜ？　これで終わりじゃないんだ」

「終わりじゃないって……後はグリナッヘを捕縛するだけじゃないの？」

「さっき言っただろう。軍事的に打ち倒すことじゃなくて、心を折るのが目的だってな。ただ捕まえただけじゃ、それこそ意固地になって協力しな

いなんて言うかもしれん」
なので、とウェインは意地悪く笑った。
「さらにもう一つ、仕掛けをする」

◆◇◆

「ばっ……馬鹿な」
眼前の光景に、グリナッヘは戦慄を禁じ得なかった。
ここはアントガダル侯爵領地。だというのになぜナトラ軍が布陣しているのか。
グリナッヘの疑問は当然のものだが、しかし現

状はその答えを求めるどころではない。

「閣下、今すぐ後退いたしましょう！」

「関所まで戻れば凌げるはずです！」

配下達が逼迫した声をあげる。

彼らの諫言は正しく、彼我の戦力差は明白だ。

ナトラ軍は四百はいるだろうか。整然と布陣する姿は敵ながら美しいとすら思える。

対してこちらは五十騎、それも追走劇で皆が疲労している。戦いを挑むことはおろか、この場に留まることすら無謀であると断言できた。

しかしグリナッヘは動かなかった。より正確に言うのならば、動けなかった。勝てるはずがない

ことは解っている。しかしここで逃げることはウェインの捕縛を実質的に諦めるということだ。自らの計画が音を立てて崩れゆく様を思い、茫然としてしまったのだ。

もしもこの時、ナトラ軍が攻撃を開始すれば、グリナッヘの一団は砂細工よりも脆(もろ)く崩れていっただろう。しかしそうはならなかった。

それよりももっと予想外の出来事が起きたのだ。

「――ん？」

先触れは足元より伝わる地響きだった。次に届いたのは背後からの重低音。何事かとグリナッヘの兵士達が後ろを向けば、巻き上がる砂煙。それ

を生み出しているのは――こちらへ迫る軍勢だった。

「は、背後より軍団が接近！　数は……およそ千！」

配下の一人が悲痛な声音を張り上げる。それもそうだろう、前方をナトラが布陣しているところに背後から謎（なぞ）の勢力が出現したのだ。完全に逃げ道を塞がれた形になっている。

「は、旗はどこのものだ⁉　まさかナトラか⁉」

どこからどうやって来たのかなどど、もはやどうでもいい。もしもナトラ軍だとすれば、降伏か玉砕か、残された道はそれしかない。グリナッヘは全身の臓腑（ぞうふ）が凍り付いたかのような緊張を抱き

ながら配下の返答を待った。

「あれは……違います！　帝国軍の旗です！」

「なんだとっ!?」

まさか都市に置いてきた歩兵が追いついたのか、とグリナッヘは考え、すぐさま頭を振る。さすがにあの軍勢が到着するのは早すぎる。ならばどこの軍か。解らない。だが帝国軍には違いなく、ならば帝国侯爵家たる自分の味方のはずだ。

「今すぐ背後の軍に合流する！　こちらの旗を掲げながら全速力で後退を」

「か、閣下！　お待ちください！」

グリナッヘの指示を遮り、配下がの一人が震え

る声音で迫る軍勢の中心を指さした。

「あれを……あの旗を！」

示された先をグリナッヘが見ると、そこには三つの旗が掲げられていた。

一つは帝国軍の旗。

もう一つは州軍旗の旗。

そして二つの旗を左右に置いて燦然（さんぜん）とはためく最後の旗は――

「ロウェルミナ皇女殿下の旗だと……!?」

グリナッヘの目的であるロウェルミナ。その彼女が今、軍勢を率いて迫ろうとしていた。

◆
◇
◆

「全く、このような無茶は二度とできませぬぞ」
その軍は構成する兵士の多くがガイラン州軍に属していた。
そして軍勢の中央。周囲を精兵によって固められ、最も厳重に警備されているそこで、馬に乗りながら苦言を口にするのは老齢の男性だ。何を隠そう、彼こそガイラン州の総督である。
「ええ、重々承知しております。総督には感謝してもしきれません」
応じるのは総督の隣を走る馬車の中にいる少女、

ロウェルミナだ。
「総督の配慮は必ずや兄上達に伝えますわ」
「殿下のお転婆ぶりも、忘れずにお伝え頂きたいものですな」
総督の苦言を右から左に受け流していると、伝令が馬を寄せてきた。
「報告いたします。盆地にてナトラ軍およびグリナッヘ軍を確認いたしました」
「そうか。では王太子と侯爵をこちらへお招きするように」
「ははっ！」
指示を出す総督を横目に、ロウェルミナは小さ

く呟いた。

「それでは、最後の仕上げを始めるとしましょう」

◆◇◆

果たしてこれは現実なのか、自分は夢でも見てるのではないか。グリナッへの心境はもはやその領域にまで到達しようとしていた。

彼は今、陣を張る作業に追われている州軍の中を歩いていた。前後をナトラ軍と州軍に挟まれ、どこにも逃げられなくなったところで、ロウェルミナ皇女名義で呼び出されたのだ。

これを断れるはずもなく、案内に導かれるままになっているが、その足取りはこれから刑を執行される死刑囚のように重い。

いっそこの道行きが終わらなければとさえ思い始めるが、そんな祈りが通用するはずもなく、彼は大きな天幕の前に到着した。

「アントガダル侯爵をお連れしました」

「入りなさい」

促されて天幕の入り口を潜ると、そこには三人の人間が待ち構えていた。ウェインとロウェルミナと総督だ。

「アントガダル、参上仕りました……」

ロウェルミナの前で膝を突く。床を見つめる彼の脳裏では、これから自分が辿るであろう未来が浮かんでは消えていく。その多くが自分の死という結末を迎えていた。

（どうすれば、どうすれば……）

必死になって脳を動かす。この窮地を逃れる方法が無いか。何でもいい。何か、何か――

その時、彼の眼にこちらを見つめるウェインの姿が映った。

「それでは早速ですが――」

「皇女殿下！」

ロウェルミナの言葉をグリナッヘは強引に遮っ

た。

「その前に一つ、私の疑問にお答えして頂きたく！」

「アントガダル侯！　無礼であるぞ！」

「構いません。……侯爵、私への問いとは？」

グリナッヘは深く呼吸をした後、ウェインを見た。

「何故この場に、ナトラの王太子がおられるのでしょうか……！」

グリナッヘは畳みかける。

「この地は我らが帝国の領地！　だというのにナトラの王太子が軍勢を引き連れている！　これは侵略を意図したものではありませぬか⁉」

ウェインを糾弾すること。それがグリナッヘの見出した活路だった。彼がここにいる正当性を失わせれば、この身を処断などできなくなると考えたのだ。

もちろんこの場にいる全員が結託していれば、正当性の有無など関係ないのだが――奇しくも彼の着眼点は良い場所を突いていた。ウェインとロウエルミナは結託しているが、総督はそうではなかったからだ。

「何を言うかと思えば」

しかし当然ながら、総督に対する根回しを怠る二人ではなかった。

「書簡も返さず、あれだけの手勢しか連れていないことに疑問があったが、まさかアントガダル侯、何も知らずにこの地に来たのか？」

「な、何だ、どういうことだ……？」

総督はため息を吐くと、呆れかえった眼差しで言った。

「ナトラの王太子殿下がここにおられるのは当然のことだ。――何しろ、これからナトラと帝国軍の軍事演習を始めるのだからな」

「――はっ？」

◆◇◆

「今頃演習が始まっている頃でしょうか」
ナトラの王宮の一室にて、帝国大使であるテオルド・タルムは感慨深げに呟いた。
「そうですね、予定通り進んでいるのであればナトラ軍、アントガダル軍、州軍が揃(そろ)っている時期でしょう」
応じるのは二ムだった。
「タルム大使には骨を折って頂き、感謝のしようもありません」
「なんの、なんの。せっかくのロウェルミナ皇女とウェイン殿下の出会いを、ゲラルト卿の事故死

という不幸な出来事で締めくくるのは私としても心苦しいものでしたからな」

タルムはその外交官人生で、多くの属州を渡り歩いており、ガイラン州総督ともコネを持っていた。そこにウェインは眼をつけ、彼に口利(くちき)きをしてもらい、総督と交渉してガイラン州で軍事演習を行う計画を立てたのだ。

これにより、ナトラ軍は合法的に帝国領に身を置くことが可能となった。どうあっても糾弾の材料になることはない。

なお、名目としてはロウェルミナのワガママに応(こた)えるため、である。彼女はウェインに恋焦(こいこ)がれ

てナトラに押しかけ、さらに戦場にまで付いて行ったお転婆というのが対外的な評価なため、ここでさらにウェインの指揮を間近でみたいと主張しても、さして不自然ではなかった。

「時にその、補佐官殿。例の金鉱山についてですが……」

「ご安心ください、タルム大使。王太子殿下は言葉ではなく行動で示す御方です。必ずや、大使の働きに報いることでしょう」

タルムを動かすにあたって、金鉱山で採掘された金を交渉材料として使用していた。もっとも、いずれは帝国に卸す腹積もりではあったのだから、

痛くもないのだが。

「そうですか。いや、それならば無事の帰還を待つばかりですな」

「全くその通りですね」

そう言って、ニニムは淡く微笑んだ。

◆◇◆

「軍事……演習……」

なんだそれは、とグリナッヘは思った。

そんなことは聞いていない。だが嘘ではないことは総督の表情が物語っている。

「そんな、馬鹿なことが……」

一両日に出来る事ではない。事前に状況を想定し、準備をしなくてはいけない。

つまりウェインは、屋敷に訪れた時点で全てを完了させていたのだ。自分を説得できればそれでよし、失敗したらここまで逃げ延び、ナトラ軍と州軍で挟み撃ちにすると。軍事演習という名目まできちんと用意した上で。

「有り得るのか……そんな、そんなことが」

一矢報いたいと思った。それだけなら不可能ではないと思った。

しかし全ては彼の手のひらの上だったのだ。こ

の自分よりも一回りも二回りも幼い少年に、自分が何を思い、どう行動するか、見透かされていたのだ。

（――勝てない。どうあっても、私では）

認めた瞬間、全身から力が抜けた。崩れ落ちそうになった体を支えたのは、素早く傍に来たウェインの手だった。

「……どうやら、アントガダル侯爵は少々お具合が悪いようですね」

鈴が転がるようなロウェルミナの声は、しかし断頭台のごとき冷たさがあった。

「申し訳ありません総督、ナトラ軍と州軍だけで

演習の準備を進めておいて頂けますか？」
「兵もおらず、指揮官もこの様子であれば、仕方ありませんな」
総督は頷いて天幕を出て行った。
そして彼の気配が遠ざかったところでロウェルミナは言った。
「それで侯爵、貴方はどうするつもりですか？」
「……どう、とは」
「どちらでもいいのですよ、私には」
ここまで言われれば、グリナッヘとて察する他なかった。
生きるか死ぬか、ここで選べと彼女は言ってい

るのだ。

一度は交渉を反故にしてウェインを捕縛しようとした自分に対して、それが最後の恩情であることは考えるまでも無い。

「わ、私は……」

偉大な人間になりたかった。

しかしそれは叶わないと知った。

ならばせめて英雄の軌跡に爪痕を残そうとした。

だがそれも、それすらも過分な願いだというのならば。

「どうか、皇女殿下のお慈悲を賜りたく存じます

「グリナッヘに出来ることは、もはや頭を垂れるのみだった。」

◆エピローグ◆

帝都に帰還したロウェルミナが真っ先にしたことは、家臣たちへの根回しだった。

反乱計画の証拠と証人は手に入れた。しかしこれをそのまま暴露すれば、計画に参加していた者たちの暴発を招きかねない。

ゆえに信頼のおける家臣に接触し、事情を打ち明け、計画参加者たちを切り崩すための準備を仕込むのである。

急がなくてはならない。しかし焦(あせ)ってもならない。

絶妙なバランス感覚を維持しながらロウェルミナは着々と家臣達を味方につけていた。

「順調ですね、ロウェルミナ殿下」

喜ぶフィシュにロウェルミナは頷（うなず）く。

「そうですね。それもこれもウェインのおかげです」

「そのことですが……本当によろしかったのですか？　摂政殿下との婚姻を白紙にして」

「白紙も何も、あれはウェインを惑わすためのブラフの一環でしかありませんよ」

「ですが、そうなっても良いとは思われていたのでしょう？」

「……」

ナトラにロウェルミナが向かうにあたって、いくつもの建前（たてまえ）を作った。

表向きは使節団の一員として。内々では結婚を前提とした会談。その真意は皇帝になるためにウェインの協力を募りに。というブラフで、本当は自分を餌（えさ）に帝国の窮状を救うというものだ。

けれどフィシュは知っていた。ロウェルミナは使節団の一員としてナトラを知りたいと思っていたし、ウェインと結婚をしてもいいと思っていたし、皇帝になるために協力して欲しいとも思っていたということを。

つまるところ彼女の用意した建前は、その全(すべて)が彼女の真意でもあったのだ。

「確かに、私はウェインを好ましく思っています」

「それでしたら」

「ですが正しくは少しだけ違うのです。私はウェインとニニムの二人が好きなのですよ」

「……あの補佐官殿、ですか？」

ロウェルミナは少しだけ気恥ずかしそうに頷いた。

「私にとって、あの二人の関係性は理想です。全てを語ることなく、背中を預け合う姿……学資時代から、混ぜてほしいと、何度も思いました。二

人ではなく、私も入れて三人にしてほしいと」

ロウェルミナは続けた。

「けれど今回の件で、私ではまだまだ混ざるには足りないと確信しました。なので今のところは置いておきます。いつか私が三人目に足ると感じた時、もう一度二人に会いに行きますよ」

「……とりあえず、当面殿下が結婚なさるつもりはないということは理解いたしました」

「それで充分です。ああ、ですが縁談の申し込みなどがあれば報告してください。結婚を餌にして色々釣り上げますので」

「御意（ぎょい）」

畏まるフィシュを見つめながら、ロウエルミナは今の話の流れからウェインとの別れの間際の出来事を思い出した。彼女はある疑問を彼に投げかけたのだ。

「ここまで手をかけずとも、ウェインならば他に手段があったのでは？」

グリナッへの心を折るという今回の作戦は、確かに上手く行った。しかしこれだけが手段だったとはロウェルミナには思えなかった。

「たとえばそう……グリナッへは反乱計画のスパイとして私の手で送り込まれたもので、ゲラルトの死は工作員による殺害。この形ならば我が子の名誉を貶めることにもな

らず、グリナッヘをそのまま説き伏せられたのでは？　他にも単純にグリナッヘを誘拐し、尋問してしまうとか」

「その辺りは俺も考えたけどな」

事も無げにウェインは言った。

「ああして心を折っておいた方が、ロワもグリナッヘを制御しやすいだろ？」

意外な返答だった。彼の言葉通り、今のグリナッヘはロウェルミナに忠実だ。逆らおうなどという気持ちは当面の間芽吹きもしないだろう。けれどそれはロウェルミナにとって有利なことでも、ウェインに利益をもたらすことではない。

そう考えたところで、ウェインは笑った。

「昔約束したからな。逃げられないぐらい巻き込まれたら、少しは協力するってさ」

「あっ……」

思わずロウェルミナは背を震わせた。

かつて交わした、些細（ささい）な、けれど自分にとって大事な会話の記憶。

それを覚えていたのは、大事にしていたのは、自分だけではなかったのだ。

そのことが何よりも、ロウェルミナには嬉（うれ）しかった――

（……そして、気になることがもう一つ）

あの日、ウェインはロウェルミナが戦うべき思

想を雄弁に語った。

今にして思えば、あれは即興ではなく、以前から彼が考えていたことのように感じられる。さらに彼は自分にもやるべきことがあると言っていた。

思想や文化の中で、彼が挑むようなものといえば、ロウェルミナには一つしか思い至らない。

（フラム人に対する差別思想……）

これは単なる推測にすぎない。けれど彼ならば実行し得るのではないかと思える。

一人の少女が誰（だれ）に憚ることなく生きられるようにという、ただそれだけのために、大陸に根付く恐るべき獣に戦いを挑むということを。

（もしもそうだとして、こちらが巻き込まれるようなことがあれば）

その時は、手を貸すとしよう。

今回の自分が、そうしてもらったように。

「……殿下？　どうかされましたか？」

怪訝そうなフィシュを見て、ロウェルミナは思考を振り払った。

「何でもありません。それよりも次の予定はどうなっていますか？」

「はっ、午後より大臣との会合が――」

アースワルド皇帝が病没しておよそ半年。

皇女ロウェルミナより、帝国反乱計画の情報が

もたらされる。

ロウェルミナが事前に根回しを行っていたため大きな混乱こそ起きなかったが、派閥争いに腐心していた三皇子たちは自らが罠（わな）にかけられていたことを知り、派閥内の引き締めと粛清に追われることになる。

結果として皇子派閥の求心力は大きく低下し、離れていった人材の多くはロウェルミナの元に集った。かくしてロウェルミナ・アースワルドは一つの派閥の長となり、歴史の表舞台に姿を現すこととなる。

◆
◇
◆

アースワルド帝国が新たな転換期を迎える一方。帝国使節団が無事に帰国したことで、ナトラ王国の王宮にはようやく普段通りの日々が戻りつつあった。

「あー……しんどかった」

執務室の机に体を預けながら、ウェインは大きく息を吐いた。

「まさか縁談から始まって、ガイラン州にまで出張ることになるとはな……」

「結局、ロワには随分振り回されちゃったわね」

今回の騒動で最終的な勝利者を決めるならば、間違いなくロウェルミナになるだろう。紆余曲折こそあったが、彼女は自らの望みを達成したのだ。

「まあでもいいじゃない。丸く収まったわけだし」

「良くない！　振り返ってみるとほとんどタダ働きだぞ俺！　使節団の接待費用を考えると完全に赤字だ赤字！」

「でもナナキがアントガダルの屋敷から証拠以外にも重要書類を盗み出してきたじゃない。それを材料にアントガダル侯爵と有利な取引も結べたでしょう？　鏡染の織物も卸してくれることになったし」

「それを入れてもプラマイゼロだ。しかも完全にロワ陣営に組み込まれたアントガダル領と取引してると、ナトラがロワ派ってことになりそうだし」

「今更遅いと思うけど」

「遅くない！　ナトラは中立！　帝国の派閥争いにはノータッチ！」

ウェインが往生際の悪さを発揮していると、ニムは何気ない口ぶりで言った。

「いっそのこと、ロワと結婚してガッツリ参加しちゃうのはダメだったの？　それで派閥争いに勝てれば、夢の悠々自適生活でしょ」

書類に目を通しながらそう語るニニム。なおウ

エインからは見えないが、持っている書類の向きは逆向きだった。

「おいおい、本気で言ってるのか？　勝ち目なんてどれほどあるか解らんし、まして仮に勝てたとしてロワが俺の隠居生活を認めるわけないだろ。次から次に難題に巻き込まれて、今の生活よりも忙しくなるに決まってる」

「ふーん……」

ニニムは気のない返事をすると、ととととウェインの傍（そば）により、その頬（ほお）を突っついて離れた。

「なんだ今の」

「気にしないで」

そう言われては仕方ない。ウェインは話を続けた。

「今後も帝国の情勢を見守る必要はあるが、ともあれロワの件は片付いた。今日からようやくいつも通りの日々だ。これで多少は休むことが」

「それじゃあ早速だけど」

どん、と二ムは書類の山をウェインの前に置いた。

「……なにこれ」

「ウェインがガイラン州に行ってる間に溜まった決済待ちの書類よ」

「……」

「他にも使節団の対応をしている間、後回しにさ

れていた各部署の陳情もあるわね。有力者との面会予定も半月分くらい詰まってるからそのつもりで」

「……」

「ああ、あと今回のロワとの縁談が流れたことで、今こそうちの娘をウェインの妃にって息巻いてる貴族が結構出てきてるらしいわよ。結婚したくないなら頑張って躱(かわ)すことね」

ニニムはにっこりと笑った。

「さ、それじゃあいつも通りお仕事を始めましょうか」

「国売ってトンズラしてええええええ！」

ウェインの慟哭（どうこく）は、どこまでも遠く響いていった。